

新（表紙）



旧（表紙）



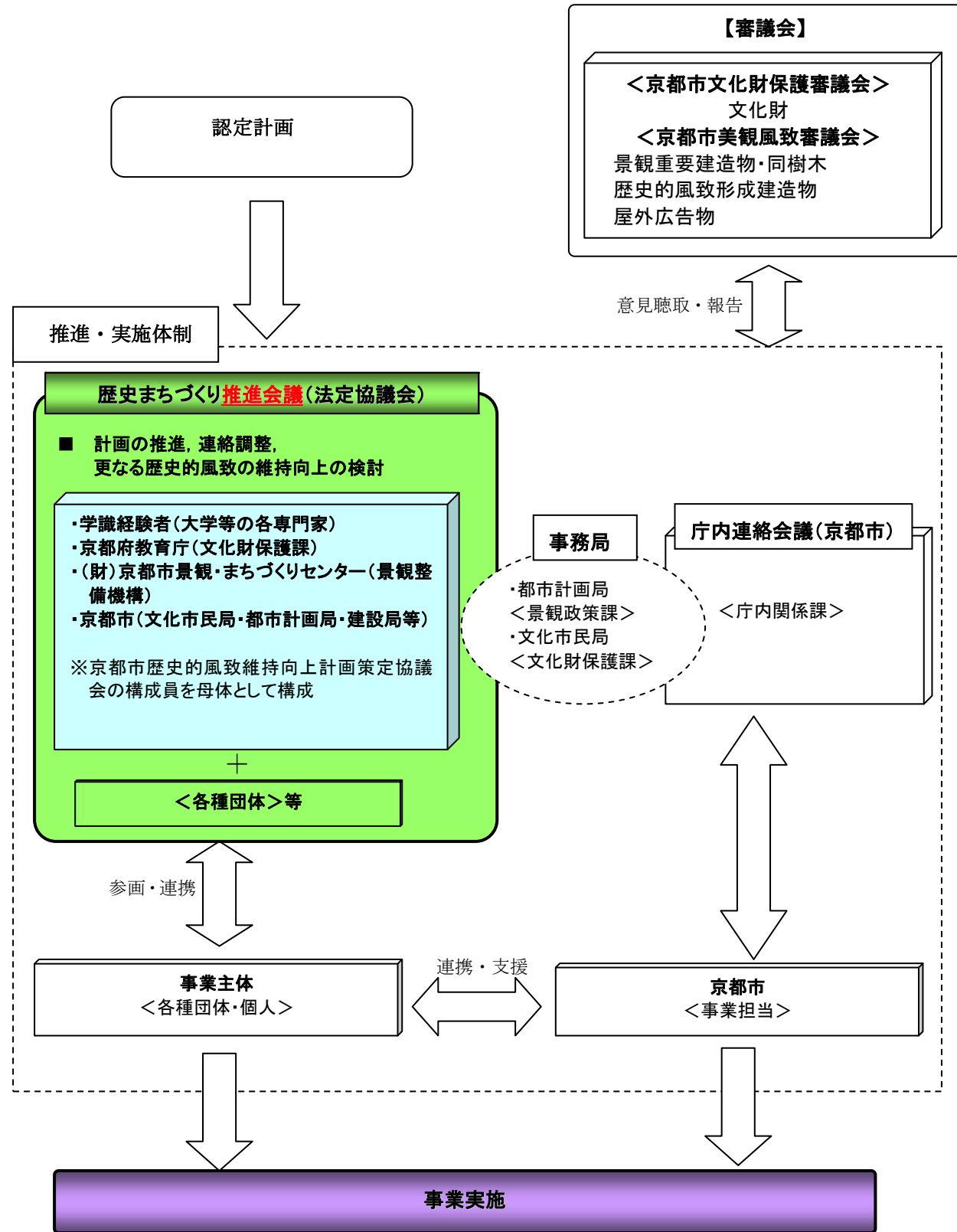
【参考】文部科学省・農林水産省・国土交通省関係地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律施行規則第2条における軽微な変更として扱うもの

新 (P8)	旧 (P8)
<p>H 2 3 . 8 . 3 1 : 京都市文化財保護審議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第3回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 3 . 1 0 . 2 5 : 京都市美観風致審議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第3回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 3 . 1 2 . 1 4 : 平成23年度第1回京都市歴史まちづくり推進協議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第3回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 3 . 1 2 . 2 6 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定申請 (第3回変更)</p> <p>H 2 4 . 2 . 1 4 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定 (第3回変更)</p> <p>H 2 4 . 2 . 2 4 : 京都市歴史まちづくり推進協議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第4回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 4 . 3 . 1 : 京都市文化財保護審議会の報告 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第4回変更内容に係る報告</p> <p>H 2 4 . 3 . 8 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定申請 (第4回変更)</p> <p>H 2 4 . 3 . 3 0 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定 (第4回変更)</p> <p>H 2 5 . 2 . 2 1 : 京都市歴史まちづくり推進協議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第5回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 5 . 3 . 5 : 京都市文化財保護審議会の報告 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第5回変更内容に係る報告</p> <p>H 2 5 . 3 . 5 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定申請 (第5回変更)</p> <p><u>H 2 5 . 3 . 2 9 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定 (第5回変更)</u></p>	<p>H 2 3 . 8 . 3 1 : 京都市文化財保護審議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第3回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 3 . 1 0 . 2 5 : 京都市美観風致審議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第3回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 3 . 1 2 . 1 4 : 平成23年度第1回京都市歴史まちづくり推進協議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第3回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 3 . 1 2 . 2 6 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定申請 (第3回変更)</p> <p>H 2 4 . 2 . 1 4 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定 (第3回変更)</p> <p>H 2 4 . 2 . 2 4 : 京都市歴史まちづくり推進協議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第4回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 4 . 3 . 1 : 京都市文化財保護審議会の報告 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第4回変更内容に係る報告</p> <p>H 2 4 . 3 . 8 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定申請 (第4回変更)</p> <p>H 2 4 . 3 . 3 0 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定 (第4回変更)</p> <p>H 2 5 . 2 . 2 1 : 京都市歴史まちづくり推進協議会の意見聴取 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第5回変更内容に係る意見聴取</p> <p>H 2 5 . 3 . 5 : 京都市文化財保護審議会の報告 「京都市歴史的風致維持向上計画」の第5回変更内容に係る報告</p> <p>H 2 5 . 3 . 5 : 「京都市歴史的風致維持向上計画」変更の認定申請 (第5回変更)</p>

新 (P11)	旧 (P11)
<p>(2) 計画の実施・推進体制</p> <p>ア 歴史まちづくり推進会議の開催</p> <p>国の認定を受けた京都市歴史的風致維持向上計画（以下、「認定計画」という。）の推進等を図るため、歴史まちづくり法第11条の規定に基づく「京都市歴史まちづくり推進会議」（以下、「<u>推進会議</u>」という。）を<u>開催する</u>。</p> <p>(7) 推進会議の主な役割</p> <ul style="list-style-type: none">①認定計画の推進及び連絡調整に関する協議②認定計画の変更に関する協議③歴史まちづくりに関する周知、啓発及び推進に関する事項 <p>(4) 構成員</p> <p><u>推進会議</u>は、認定計画の策定に当たって設置した「京都市歴史的風致維持向上計画策定協議会」を母体として構成している。今後、認定計画の推進に関わる各種団体を加えるなど、<u>推進会議</u>の構成員を随時拡充し、京都市における歴史まちづくりの更なる推進を図っていく。</p> <p>(ウ) 事務局</p> <p><u>推進会議</u>の事務局は、文化市民局（文化財保護課）及び都市計画局（景観政策課）が務める。</p> <p>イ 計画の推進・実施体制</p> <ul style="list-style-type: none">(7) <u>推進会議</u>をプラットフォームとして、京都市における歴史まちづくりの推進を図る。(4) 京都市役所の内部に歴史まちづくりに関わる担当部局による庁内連絡会議を設置する。<u>庁内連絡会議</u>の事務局は、<u>推進会議</u>の事務局が兼ねるものとする。(ウ) 京都市が実施する歴史まちづくりに関する各種事業については、庁内連絡会議において連絡・調整したうえ、<u>推進会議</u>において連絡・調整し、それを踏まえて担当部局が事業を実施する。(イ) それぞれの地域において市民の手によって取り組まれる歴史まちづくりについても、<u>推進会議</u>における協議・調整を踏まえ、京都市が行う各種事業とも有機的に連携しながら、取組を進める。 <p><u>(注) 平成25年10月の要綱改正により、「京都市歴史まちづくり推進協議会」から「京都市歴史まちづくり推進会議」に名称変更を行っている。</u></p>	<p>(2) 計画の実施・推進体制</p> <p>ア 歴史まちづくり推進協議会の設置</p> <p>国の認定を受けた京都市歴史的風致維持向上計画（以下、「認定計画」という。）の推進等を図るため、歴史まちづくり法第11条の規定に基づく「京都市歴史まちづくり推進協議会」（以下、「<u>協議会</u>」という。）を<u>設置した</u>。</p> <p>(7) 協議会の主な役割</p> <ul style="list-style-type: none">①認定計画の推進及び連絡調整に関する協議②認定計画の変更に関する協議③歴史まちづくりに関する周知、啓発及び推進に関する事項 <p>(4) 構成員</p> <p><u>協議会</u>は、認定計画の策定に当たって設置した「京都市歴史的風致維持向上計画策定協議会」を母体として組織した。今後、認定計画の推進に関わる各種団体を加えるなど、<u>協議会</u>の構成員を随時拡充し、京都市における歴史まちづくりの更なる推進を図っていく。</p> <p>(ウ) 事務局</p> <p><u>協議会</u>の事務局は、文化市民局（文化財保護課）及び都市計画局（景観政策課）が務める。</p> <p>イ 計画の推進・実施体制</p> <ul style="list-style-type: none">(7) <u>協議会</u>をプラットフォームとして、京都市における歴史まちづくりの推進を図る。(4) 京都市役所の内部に歴史まちづくりに関わる担当部局による庁内連絡会議を設置する。<u>本会議</u>の事務局は、<u>協議会</u>の事務局が兼ねるものとする。(ウ) 京都市が実施する歴史まちづくりに関する各種事業については、庁内連絡会議において検討・調整したうえ、<u>協議会</u>において協議・調整し、それを踏まえて担当部局が事業を実施する。(イ) それぞれの地域において市民の手によって取り組まれる歴史まちづくりについても、<u>協議会</u>における協議・調整を踏まえ、京都市が行う各種事業とも有機的に連携しながら、取組を進める。

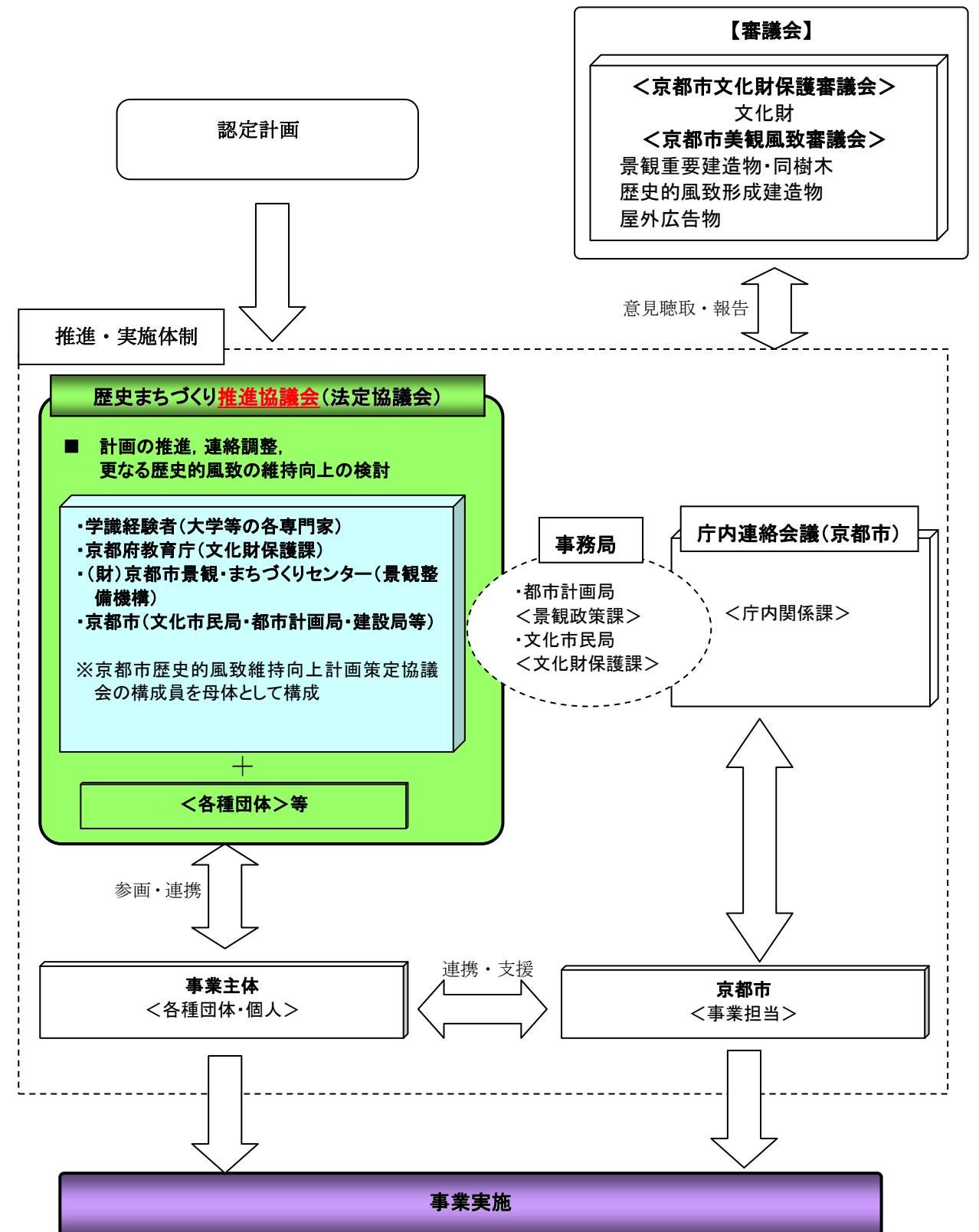
新 (P12)

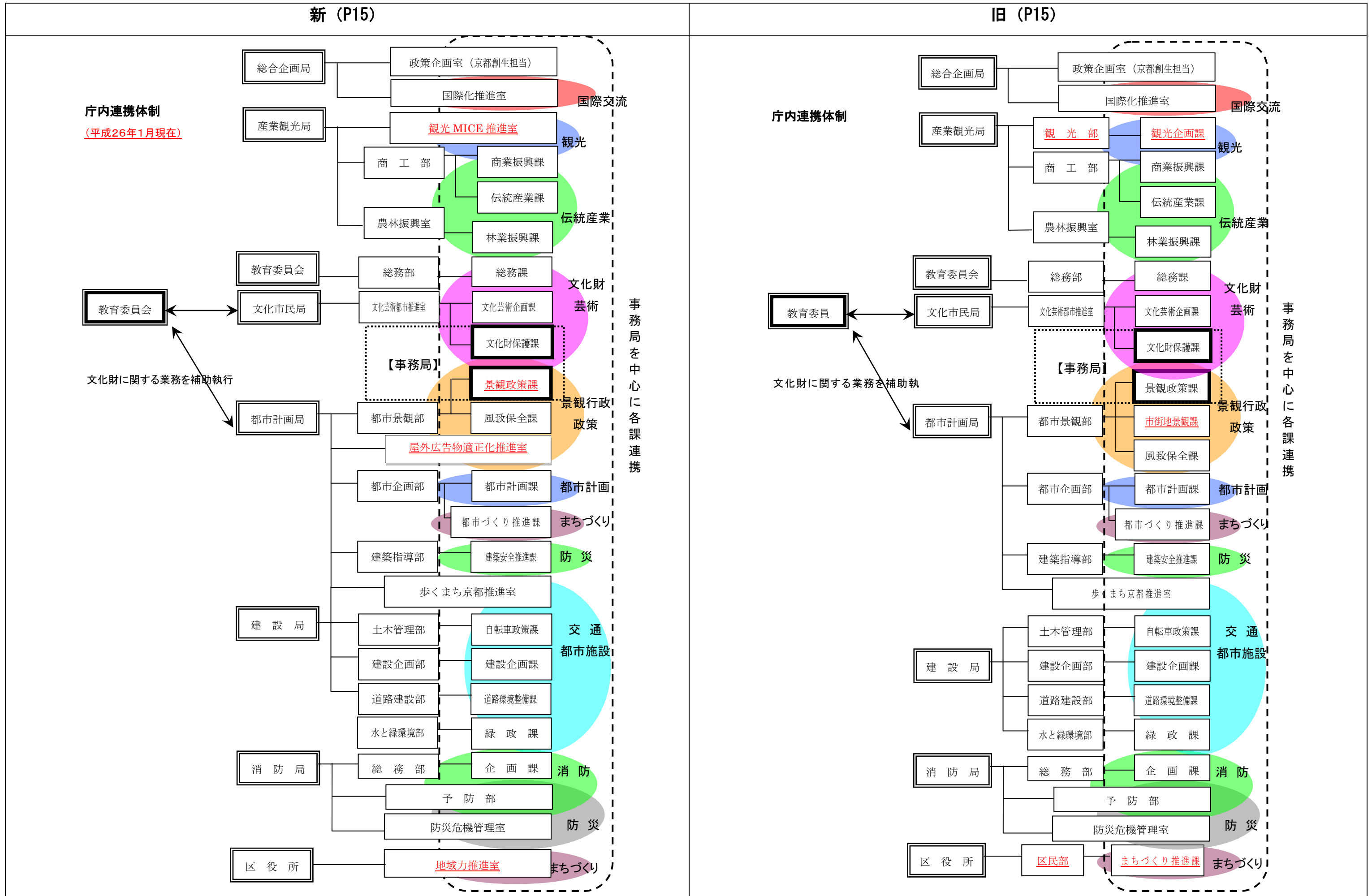
歴史的風致維持向上計画の推進・実施体制図



旧 (P12)

歴史的風致維持向上計画の推進・実施体制図





新 (P16)

1 京都市の地形・風土・気候

京都市は京都府の南部に位置し、東には比叡山、東山連峰が優美な姿を見せ、北は愛宕山、北山の連山がそびえ、西の諸峰は保津川を挟んで、嵯峨、嵐山の山溪を作り、南は大阪平野に開けている。

これらの低くならかな三方の山々に取り囲まれる京都盆地は、数万年前は湖底であったと言われており、北と東の山々から運ばれる土砂が堆積し、地盤の隆起とともに生まれ、現在の東北から西南へのなだらかな地形の基盤を形成してきたと推定される。

この太古の湖の湖底が堆積物で盆地化した際に取り残された遺構が、神

泉苑（※1）、深泥池（※2）、巨椋池

であるといわれており、巨椋池が干拓された現在、残っているのが神泉苑と深泥池となっている。

京都における良質の地下水脈も、湖の名残であり、このような良質な水脈が、茶道、庭園、友禅染や酒、麩、豆腐づくりなどで知られる、京都の産業や文化を育てる基盤となっている。

三山を山々に囲まれた京都盆地では、山々に源流を持つ鴨川や桂川などの清流が、この地形に沿うように市街地を緩やかに南下している。平安遷都から変わらず、後に山紫水明と称えられるこれらの緑豊かな山々と清流が、1200年の歴史に培われてきた京都の歴史的風土の骨格を形成してきたのである。

京都は、太平洋側気候と内陸性気候の特性を併せ持つ。四季の移り変わりが明瞭である一方、夏の蒸し暑さや冬の底冷えは、山に囲まれた盆地都市の宿命でもある。

このような厳しく多様な気候の中で、京都では四季折々の季節感や美意識が永年にわたり育まれてきた。そして、移り行く季節の中で、「花鳥風月」や「雪月花」を愛で、訪れる季節を迎え、去り行く季節を惜しむ数々の行事や祭事が行われてきた。

一方で、夏の厳しい蒸し暑さは、住まいや暮らし方に少なからず影響を与えた。例えば、伝統的都市住宅である京町家においては、坪庭を設け、打ち水をして涼風を取り入

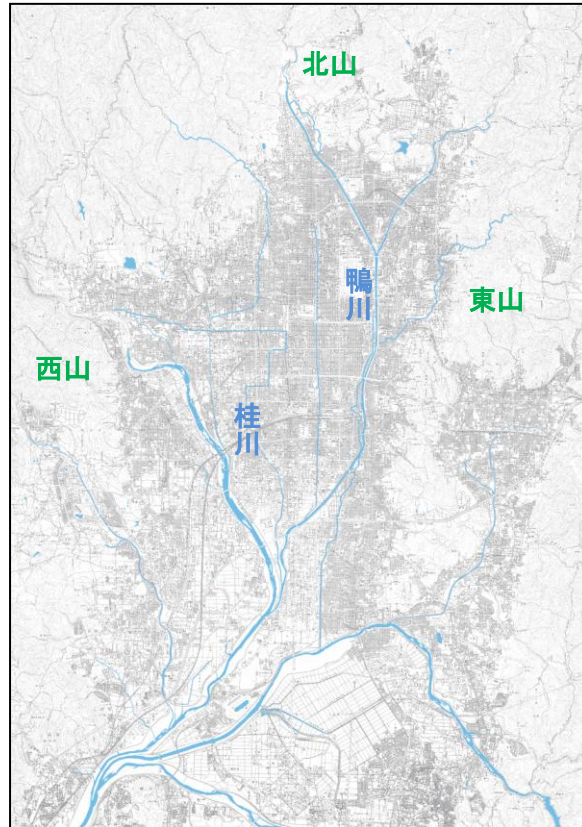


図 1-1 京都の地形

旧 (P16)

1 京都市の地形・風土・気候

京都市は京都府の南部に位置し、東には比叡山、東山連峰が優美な姿を見せ、北は愛宕山、北山の連山がそびえ、西の諸峰は保津川を挟んで、嵯峨、嵐山の山溪を作り、南は大阪平野に開けている。

これらの低くならかな三方の山々に取り囲まれる京都盆地は、数万年前は湖底であったと言われており、北と東の山々から運ばれる土砂が堆積し、地盤の隆起とともに生まれ、現在の東北から西南へのなだらかな地形の基盤を形成してきたと推定される。

この太古の湖の湖底が堆積物で盆地化した際に取り残された遺構が、神

泉苑（※1）、深泥池（※2）、巨椋池

であるといわれており、巨椋池が干拓された現在、残っているのが神泉苑と深泥池となっている。

京都における良質の地下水脈も、湖の名残であり、このような良質な水脈が、茶道、庭園、友禅染や酒、麩、豆腐づくりなどで知られる、京都の産業や文化を育てる基盤となっている。

三山を山々に囲まれた京都盆地では、山々に源流を持つ鴨川や桂川などの清流が、この地形に沿うように市街地を緩やかに南下している。平安遷都から変わらず、後に山紫水明と称えられるこれらの緑豊かな山々と清流が、1200年の歴史に培われてきた京都の歴史的風土の骨格を形成してきたのである。

京都は、太平洋側気候と内陸性気候の特性を併せ持つ。四季の移り変わりが明瞭である一方、夏の蒸し暑さや冬の底冷えは、山に囲まれた盆地都市の宿命でもある。

このような厳しく多様な気候の中で、京都では四季折々の季節感や美意識が永年にわたり育まれてきた。そして、移り行く季節の中で、「花鳥風月」や「雪月花」を愛で、訪れる季節を迎え、去り行く季節を惜しむ数々の行事や祭事が行われてきた。

一方で、夏の厳しい蒸し暑さは、住まいや暮らし方に少なからず影響を与えた。例えば、伝統的都市住宅である京町家においては、坪庭を設け、打ち水をして涼風を取り入

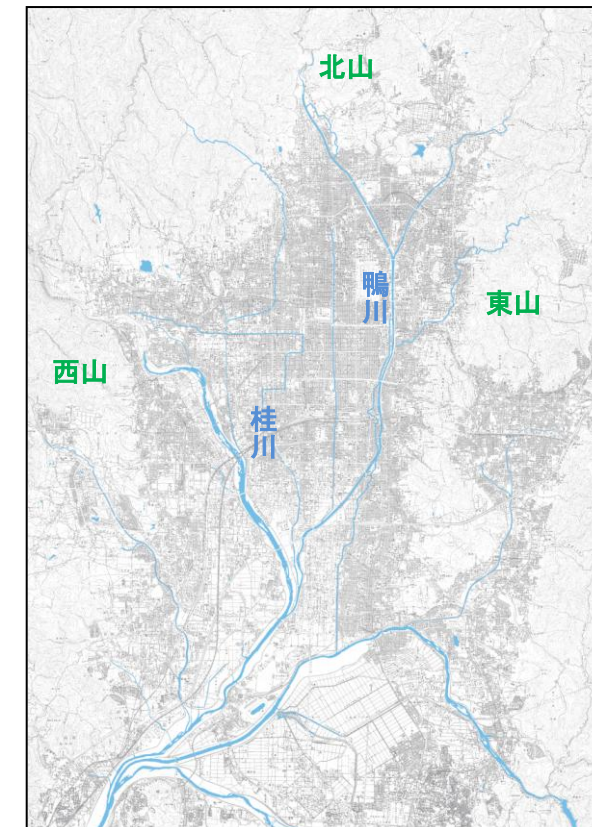


図 1-1 京都の地形

新 (P20)	旧 (P20)
<p>3 京都の通史</p> <p>京都は、平安京への遷都以降だけを取りあげても、1200年余の歴史を有する都市である。</p> <p>それ以前の歴史を含め、様々な時代の変遷を経る中で、それぞれの時代に培われ洗練されてきた文化や生活、そして歴史的な建造物が現在まで継承され、わが国に類を見ない大変厚みのある奥深い歴史的風致を形成してきた都市である。その重層的な京都のあゆみをそれぞれの時代ごとに俯瞰し、都市の形成過程について、文化や生活、歴史的建造物などから明らかにする。</p> <p>(1) 平安時代以前</p> <p>京都の人々の歴史は、旧石器時代（今から2～3万年前）までさかのぼる。人々は、狩りをし、草や木の実を採取して、主に京都盆地の周りの山や平地の丘を移動しながら生活していたと思われる。</p> <p>縄文時代（約12000年～2300年前）には、人々は京都盆地で生活をはじめ、狩りや川での漁、木の実の採取を行い、生活していた。京都盆地の各所で縄文時代の遺物が出土しているが、特に人々が多く住んでいた北白川周辺からは、沢山の土器類や竪穴住居跡が発見されている。</p> <p>弥生時代（約2300年～1700年前）になると、稲作が伝わり、京都盆地でも米づくりが行われるようになる。そのため、水田をつくり易い低地に集落が増加し、青銅や鉄でつくった刃物などの道具を使う社会になった。水田が多くつくられた京都市の南部（伏見区あたり）の低い土地からは、当時の遺跡が沢山発見されている。京都盆地の人々は、農耕技術の伝来により、治水灌漑をすすめて技術の拡大を図った。この農耕技術や、養蚕・紡績そして機織の技術を伝えたのが、弥生時代から古墳時代にかけて急速にひろがった渡来系氏族である。</p> <p>渡来人の秦氏は、産業に関する新しい知識、特に機織技術に優れていたが、河川の土木工事の功績も大きく、たびたび洪水の起きていた桂川に大きな堰をつくり、川の氾濫を防ぐと同時に、川の流れを本流と用水路に分けて、農業用水に利用できるようにした。なお、秦河勝が603年に建立した広隆寺は、国宝第1号の</p> <p><small>もくぞうみろくぼさつはんかぞう</small> 木造弥勒菩薩半跏像を安置していることでも有名である。</p> <p>奈良時代の末になると、奈良の都（平城京）では、道鏡をはじめとする僧たちが政治的に力を持ち始めたため、桓武天皇は仏教勢力などを政治から遠ざけ、天皇中心の国をつくるため、長岡京に遷都した。</p> <p>しかし、災害などの頻発が、桓武天皇の弟（早良親王）の呪いであるなどとして天皇を悩ませたり、近くを流れる桂川が洪水を起こしたことなどが原因で、わずか10年で平安京に都を移すことになった。</p>	<p>3 京都の通史</p> <p>京都は、平安京への遷都以降だけを取りあげても、1200年余の歴史を有する都市である。</p> <p>それ以前の歴史を含め、様々な時代の変遷を経る中で、それぞれの時代に培われ洗練されてきた文化や生活、そして歴史的な建造物が現在まで継承され、わが国に類を見ない大変厚みのある奥深い歴史的風致を形成してきた都市である。その重層的な京都のあゆみをそれぞれの時代ごとに俯瞰し、都市の形成過程について、文化や生活、歴史的建造物などから明らかにする。</p> <p>(1) 平安時代以前</p> <p>京都の人々の歴史は、旧石器時代（今から2～3万年前）までさかのぼる。人々は、狩りをし、草や木の実を採取して、主に京都盆地の周りの山や平地の丘を移動しながら生活していたと思われる。</p> <p>縄文時代（約12000年～2300年前）には、人々は京都盆地で生活をはじめ、狩りや川での漁、木の実の採取を行い、生活していた。京都盆地の各所で縄文時代の遺物が出土しているが、特に人々が多く住んでいた北白川周辺からは、沢山の土器類や竪穴住居跡が発見されている。</p> <p>弥生時代（約2300年～1700年前）になると、稲作が伝わり、京都盆地でも米づくりが行われるようになる。そのため、水田をつくり易い低地に集落が増加し、青銅や鉄でつくった刃物などの道具を使う社会になった。水田が多くつくられた京都市の南部（伏見区あたり）の低い土地からは、当時の遺跡が沢山発見されている。京都盆地の人々は、農耕技術の伝来により、治水灌漑をすすめて技術の拡大を図った。この農耕技術や、養蚕・紡績そして機織の技術を伝えたのが、弥生時代から古墳時代にかけて急速にひろがった渡来系氏族である。</p> <p>渡来人の秦氏は、産業に関する新しい知識、特に機織技術に優れていたが、河川の土木工事の功績も大きく、たびたび洪水の起きていた桂川に大きな堰をつくり、川の氾濫を防ぐと同時に、川の流れを本流と用水路に分けて、農業用水に利用できるようにした。なお、秦河勝が603年に建立した広隆寺は、国宝第1号の</p> <p><small>もくぞうみろくぼさつはんかぞう</small> 木造弥勒菩薩半跏像を安置していることでも有名である。</p> <p>奈良時代の末になると、奈良の都（平城京）では、道鏡をはじめとする僧たちが政治的に力を持ち始めたため、桓武天皇は仏教勢力などを政治から遠ざけ、天皇中心の国をつくるため、長岡京に遷都した。</p> <p>しかし、災害などの頻発が、桓武天皇の弟（早良親王）の呪いであるなどとして天皇を悩ませたり、近くを流れる桂川が洪水を起こしたことなどが原因で、わずか10年で平安京に都を移すことになった。</p>

新 (P21)

(2) 平安時代

京都の都としての歴史は、延暦13年(794)、桓武天皇が平安京に遷都の詔を發したことから始まる。中国から輸入された風水説に基づく

写真省略

「^{しじんそうおう}四神相応」(※1)の条件に適

していたため、京都の地が平安京の建設地に選定されたと考えられている。

平安京の内部の構成を見ると、朱雀大路を中心として、東西1,508丈(約4.5km)、南北

1,753丈(約5.2km)、「左京」と「右京」の左右対称の二つの京からなる都市として計画され、その造営は、これまでの都づくりを集大成したもので、遷都の前年から延暦24年(805)まで続いた。

左右対称の都市構造をもつ平安京は、中心軸に朱雀大路が南北にとおり、その南端が都の正門である羅城門、北端が内裏や大極殿などからなる平安宮に接していた。そして、条坊制による基盤目状の道路が計画的に配置され、以来、現在に至るまで、格子状の道路配置が京都の都市構造の骨格をなしてきた。

平安京内の町割の単位は40丈(約120m)四方で、さらに一町の土地を四行八門に分割された四行八門式の敷地を戸主と呼び、これが1家族の宅地の基準であった。各町のまわりには築地・板塀・柵などが建てられ、条坊の周囲の築地は嚴重に固められたうえ、朱雀大路に面する左右京の坊門は、兵士が警固した。しかし、全京城の長大な条坊の修理維持は至難であったため、次第に廃亡し、京の住人の動きは自由になっていく。

図省略

図省略

図1-4 四行八門制宅地割

出典 「平安遷都1200年記念 甦る平安京」

旧 (P21)

(2) 平安時代

京都の都としての歴史は、延暦13年(794)、桓武天皇が平安京に遷都の詔を發したことから始まる。中国から輸入された風水説に基づく

写真省略

「四神相応」(※1)の条件に適していたため、京都の地が平安京の建設地に選定されたと考えられている。

平安京の内部の構成を見ると、朱雀大路を中心として、東西1,508丈(約4.5km)、南北

1,753丈(約5.2km)、「左京」と「右京」の左右対称の二つの京からなる都市として計画され、その造営は、これまでの都づくりを集大成したもので、遷都の前年から延暦24年(805)まで続いた。

左右対称の都市構造をもつ平安京は、中心軸に朱雀大路が南北にとおり、その南端が都の正門である羅城門、北端が内裏や大極殿などからなる平安宮に接していた。そして、条坊制による基盤目状の道路が計画的に配置され、以来、現在に至るまで、格子状の道路配置が京都の都市構造の骨格をなしてきた。

平安京内の町割の単位は40丈(約120m)四方で、さらに一町の土地を四行八門に分割された四行八門式の敷地を戸主と呼び、これが1家族の宅地の基準であった。各町のまわりには築地・板塀・柵などが建てられ、条坊の周囲の築地は嚴重に固められたうえ、朱雀大路に面する左右京の坊門は、兵士が警固した。しかし、全京城の長大な条坊の修理維持は至難であったため、次第に廃亡し、京の住人の動きは自由になっていく。

図省略

図省略

図1-4 四行八門制宅地割

出典 「平安遷都1200年記念 甦る平安京」

新 (P23)	旧 (P23)
<p>られ、京都の北部山間を経て若狭にいく若狭街道は平安期から利用され、西日本と平安京羅城門を結ぶ西国街道も、起源は平安京成立のころである。</p> <p>水運の要所としては、大堰川（桂川）の梅津、ことに木津川・宇治川・桂川の三川が合流する淀・山崎が、水陸運輸の結節点としてもっとも重要な機能を果たし、平安京の外港としての役割を担っていた。</p> <p>計画的に建設された平安京は、貴族の邸宅が区割りされた街区に営まれ、身分的ヒエラルキーが居住地にも反映された。平安時代半ば頃には、庶民が集住し商工業都市の萌芽が見られ、次第に当初の計画理念を離れて都市が変質していった。平安時代初期に形成された東市、西市は、京人の生活に関係が深かったが、右京が早く荒廃したことから、西市は早く廃れ、東市も私店や行商人の発達に押され、10世紀末には東西市ともに「無人」といわれるほどになり、12世紀後半には東市もひどく荒廃した。</p> <p>都市住民は、通りに面し築地塀に小屋掛けするなどして、通りに開いて商売を行う店舗住宅を形成した。通りに面して設けられた建築は、『年中行事絵巻』に描かれているように、祭礼時には棧敷的な空間ともなつたとされている。こうした通りに面した店舗住宅が京都の町家の原型となつたと考えられている。鎌倉期には、人々は道路の一部を宅地として開発が進むこととなる（こうした土地を「巷所」という。）。</p> <p>9世紀頃から、天皇の譲位後の住まいである後院が京中に置かれるようになり、10世紀頃より度重なる内裏の火災によりそれら京中の邸宅に里内裏が置かれた。11世紀になると、白河や鳥羽など平安京の郊外に寺院や離宮、別荘等が建設され、院政による政治的中心となつたため、これらの周辺地域の開発が進み、市街地の範囲が拡大していった。具体的には、現在の岡崎地区に白河天皇による法勝寺の他、歴代の天皇・皇族によって六勝寺（法勝寺、延勝寺、円勝寺、最勝寺、成勝寺、尊勝寺）、宮殿が建設された。また、白河上皇、鳥羽上皇の時期には、院御所として鳥羽に鳥羽殿（鳥羽離宮）や諸寺院が建設された。</p> <p>初期の平安京では、遷都の背景の一つである、律令国家の精神的支柱として位置付けられた南都仏教による政治的腐敗に対し、仏教的影響を断絶するため、京中の寺院は東西両寺に限られていた。この時代における仏教は、真言宗、天台宗など、加持祈祷を行なう密教を持ち、皇室や貴族の現世利益をかなえる宗教という性格が強く、基本的に皇室や藤原氏などの貴族仏教としての性格をもつ。</p> <p>平安中期になると、阿弥陀如来による死後の救いを説く浄土教思想が広まり、平安末期に専修念仏が広まると、もはや仏教は貴族だけのものではなく、民衆全体への広がりを見せ、鎌倉新仏教のさきがけとなつていった。</p> <p>政治・行政面では、平安時代中期の10世紀は、政治・行政の基本原則であった律令体制が変質の段階を迎える。藤原家の勢力が拡大され、藤原家の摂政・関白の就任などと、天皇・皇族の地位は低下の一途をたどりながらも、律令政治は維持されてきたが、摂政・関白という天皇に代わる執政官が常置となつて、藤原家がこれを占め、</p>	<p>られ、京都の北部山間を経て若狭にいく若狭街道は平安期から利用され、西日本と平安京羅城門を結ぶ西国街道も、起源は平安京成立のころである。</p> <p>水運の要所としては、大堰川（桂川）の梅津、ことに木津川・宇治川・桂川の三川が合流する淀・山崎が、水陸運輸の結節点としてもっとも重要な機能を果たし、平安京の外港としての役割を担っていた。</p> <p>計画的に建設された平安京は、貴族の邸宅が区割りされた街区に営まれ、身分的ヒエラルキーが居住地にも反映された。平安時代半ば頃には、庶民が集住し商工業都市の萌芽が見られ、次第に当初の計画理念を離れて都市が変質していった。平安時代初期に形成された東市、西市は、京人の生活に関係が深かったが、右京が早く荒廃したことから、西市は早く廃れ、東市も私店や行商人の発達に押され、10世紀末には東西市ともに「無人」といわれるほどになり、12世紀後半には東市もひどく荒廃した。</p> <p>都市住民は、通りに面し築地塀に小屋掛けするなどして、通りに開いて商売を行う店舗住宅を形成した。通りに面して設けられた建築は、『年中行事絵巻』に描かれているように、祭礼時には棧敷的な空間ともなつたとされている。こうした通りに面した店舗住宅が京都の町家の原型となつたと考えられている。鎌倉期には、人々は道路の一部を宅地として開発が進むこととなる（こうした土地を「巷所」という。）。</p> <p>9世紀頃から、天皇の譲位後の住まいである後院が京中に置かれるようになり、10世紀頃より度重なる内裏の火災によりそれら京中の邸宅に里内裏が置かれた。11世紀になると、白河や鳥羽など平安京の郊外に寺院や離宮、別荘等が建設され、院政による政治的中心となつたため、これらの周辺地域の開発が進み、市街地の範囲が拡大していった。具体的には、現在の岡崎地区に白河天皇による法勝寺の他、歴代の天皇・皇族によって六勝寺（法勝寺、延勝寺、円勝寺、最勝寺、成勝寺、尊勝寺）、宮殿が建設された。また、白河上皇、鳥羽上皇の時期には、院御所として鳥羽に鳥羽殿（鳥羽離宮）や諸寺院が建設された。</p> <p>初期の平安京では、遷都の背景の一つである、律令国家の精神的支柱として位置付けられた南都仏教による政治的腐敗に対し、仏教的影響を断絶するため、京中の寺院は東西両寺に限られていた。この時代における仏教は、真言宗、天台宗など、加持祈祷を行なう密教を持ち、皇室や貴族の現世利益をかなえる宗教という性格が強く、基本的に皇室や藤原氏などの貴族仏教としての性格をもつ。</p> <p>平安中期になると、阿弥陀如来による死後の救いを説く浄土教思想が広まり、平安末期に専修念仏が広まると、もはや仏教は貴族だけのものではなく、民衆全体への広がりを見せ、鎌倉新仏教のさきがけとなつていった。</p> <p>政治・行政面では、平安時代中期の10世紀は、政治・行政の基本原則であった律令体制が変質の段階を迎える。藤原家の勢力が拡大され、藤原家の摂政・関白の就任などと、天皇・皇族の地位は低下の一途をたどりながらも、律令政治は維持されてきたが、摂政・関白という天皇に代わる執政官が常置となつて、藤原家がこれを占め、</p>

新 (P24)

貴族政治が展開する。そして、中下級の貴族たちが国司として地方行政にあたった。
また、検非違使庁の機構が整備され、検非違使の公権力も拡大されていき、本来の警察的職務を超えて、市政にまで介入するようになる。

11世紀の中ごろには、院政が開始され、武家が登場する。平清盛は、院政のもとで栄華を誇り、六波羅に一族の居住区をもって平氏の政権を造り上げた。政治的伝統をもたず、本来は皇室・貴族の軍事・警察的守護者にすぎなかった武士が、国政を動かす立場に就いた。しかし、この政権は、背景となる勢力を確立しえず、すぐに崩壊する。

1185年、朝廷は、平氏の政権を滅ぼした源頼朝の要求を容れて、守護・地頭を勅許し、1190年には源頼朝の上洛と後白河会談が行われ、京都の朝廷は、鎌倉幕府を国家的・全国的に軍事・警察権を行使する機関と認知し、公武の提携がなされた。

平安時代の代表的な建造物

この時代の代表的な建造物に、東西両寺、醍醐寺があるが、西寺は現存していない。現在の教王護国寺（東寺）五重塔は江戸時代に再建されたものである。醍醐寺は、貞観16年（874）聖宝が山上に草庵を結び^{じゆんてい}准胝・如意輪両観音像を安置したのが始まりである（上醍醐）。延長4年（926）に下醍醐が開かれ五重塔などを建立した。平成6年（1994）12月「古都京都の文化財」として、教王護国寺と共にユネスコの世界遺産一覧表に登録された。（※2）



写真 1-3 醍醐寺五重塔

※1 四神相応

四神とは青龍、白虎、朱雀、玄武を言い、これを東西南北に配し地形にあてはめて、東に川、西に大道、南に湖、北に山のある地を四神相応という。元来は中国の思想。日本では特に宮都を営むのに必須の地形とされ、平安京の場合は、鴨川や船岡山などがあったので相応の地（東に鴨川、西に山陰道、南に巨椋池、北に船岡山と想定することができる）とされたと考えられる。

※2 「古都・京都の文化財」

平成6年（1994）に「古都・京都の文化財」として、『世界遺産一覧表』に登録された。

登録された「古都京都の文化財」は、17箇所の文化資産（以下、“登録資産”とする）からなり、これは古都京都の近郊及び周囲をとりまく東山、北山、西山の山麓部を中心に分散して所在している。このうち京都市内には以下の14の登録資産がある。

賀茂別雷神社（上賀茂神社）、賀茂御祖神社（下鴨神社）、教王護国寺（東寺）、清水寺、醍醐寺、仁和寺、高山寺、西芳寺、天龍寺、鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、龍安寺、本願寺、二条城

旧 (P24)

貴族政治が展開する。そして、中下級の貴族たちが国司として地方行政にあたった。
また、検非違使庁の機構が整備され、検非違使の公権力も拡大されていき、本来の警察的職務を超えて、市政にまで介入するようになる。

11世紀の中ごろには、院政が開始され、武家が登場する。平清盛は、院政のもとで栄華を誇り、六波羅に一族の居住区をもって平氏の政権を造り上げた。政治的伝統をもたず、本来は皇室・貴族の軍事・警察的守護者にすぎなかった武士が、国政を動かす立場に就いた。しかし、この政権は、背景となる勢力を確立しえず、すぐに崩壊する。

1185年、朝廷は、平氏の政権を滅ぼした源頼朝の要求を容れて、守護・地頭を勅許し、1190年には源頼朝の上洛と後白河会談が行われ、京都の朝廷は、鎌倉幕府を国家的・全国的に軍事・警察権を行使する機関と認知し、公武の提携がなされた。

平安時代の代表的な建造物

この時代の代表的な建造物に、東西両寺、醍醐寺があるが、西寺は現存していない。現在の教王護国寺（東寺）五重塔は江戸時代に再建されたものである。醍醐寺は、貞観16年（874）聖宝が山上に草庵を結び^{じゆんてい}准胝・如意輪両観音像を安置したのが始まりである（上醍醐）。延長4年（926）に下醍醐が開かれ五重塔などを建立した。平成6年（1994）12月「古都京都の文化財」として、教王護国寺と共にユネスコの世界遺産一覧表に登録された。（※2）



写真 1-3 醍醐寺五重塔

※1 四神相応

四神とは青龍、白虎、朱雀、玄武を言い、これを東西南北に配し地形にあてはめて、東に川、西に大道、南に湖、北に山のある地を四神相応という。元来は中国の思想。日本では特に宮都を営むのに必須の地形とされ、平安京の場合は、鴨川や船岡山などがあったので相応の地（東に鴨川、西に山陰道、南に巨椋池、北に船岡山と想定することができる）とされたと考えられる。

※2 「古都・京都の文化財」

平成6年（1994）に「古都・京都の文化財」として、『世界遺産一覧表』に登録された。

登録された「古都京都の文化財」は、17箇所の文化資産（以下、“登録資産”とする）からなり、これは古都京都の近郊及び周囲をとりまく東山、北山、西山の山麓部を中心に分散して所在している。このうち京都市内には以下の14の登録資産がある。

賀茂別雷神社（上賀茂神社）、賀茂御祖神社（下鴨神社）、教王護国寺（東寺）、清水寺、醍醐寺、仁和寺、高山寺、西芳寺、天龍寺、鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、龍安寺、本願寺、二条城

新 (P30)

伏見を結ぶ伏見街道をはじめ、奈良―伏見間に新大和街道、大津より分かれ、伏見・淀を通り大阪へとつなぐ東海道など、主要街道がすべて伏見へ直結された。
また、伏見城の外堀として開削された宇治川派流がこの地域の南側に流れ、伏見は淀川の港湾都市として発展を遂げた。



写真 1-7 宇治川派流



写真 1-8 現在のお土居

文化面では、天正4年、京都に南蛮寺と呼ばれたキリスト教の教会が建築され、その布教も本格化し、南蛮文化は京都の新しい風俗となった。

このような南蛮文化を積極的に取り入れたのが織田信長であり、後継者豊臣秀吉にも引き継がれ、南蛮風意匠の工芸品が庶民の間に広まった。

南蛮文化を受け入れる窓口の一つであった堺は、商品流通のルートばかりでなく、戦国大名が渴望する鉄砲の生産を掌握し繁栄を誇った。そうした堺の町衆である武野紹鷗、千利休によって新しい茶の湯が誕生した。

茶の湯に用いられる茶入れや茶壺などの茶道具は、財宝の第一位とされ、戦国大名、さらには天下人の**垂涎**の的となった。茶の湯の一人者千利休は、天下人織田信長に召

しだされて**茶頭**となり、つづいて秀吉にも重用されて「天下第一の茶湯者」と称され、京都で活躍するに至った。秀吉は茶の湯を政治的に利用し、禁中で茶会を開いたり、黄金の茶室の建設や北野の大茶会によってその威勢を世に示した。こうした企図を成功させたのが千利休であったと言えよう。

利休の流れをくむ表千家（不審庵）、裏千家（今日庵）、武者小路千家（官休庵）の三千家は、現在、市内の上京区にある。

安土桃山時代の代表的な建造物

この時代の代表的な建造物として、醍醐寺の三宝院殿堂（表書院他：国宝・重要文化財）、大徳寺唐門（国宝）など桃山期の特色ある建造物の代表事例が、現存している。

また、本願寺飛雲閣（国宝）は、金閣、銀閣と共に「京の三名閣」の一つに数えられる建築物で、こけら葺の三層からなる楼閣建築である。



写真 1-9 本願寺飛雲閣

旧 (P30)

伏見を結ぶ伏見街道をはじめ、奈良―伏見間に新大和街道、大津より分かれ、伏見・淀を通り大阪へとつなぐ東海道など、主要街道がすべて伏見へ直結された。
また、伏見城の外堀として開削された宇治川派流がこの地域の南側に流れ、伏見は淀川の港湾都市として発展を遂げた。



写真 1-7 宇治川派流



写真 1-8 現在のお土居

文化面では、天正4年、京都に南蛮寺と呼ばれたキリスト教の教会が建築され、その布教も本格化し、南蛮文化は京都の新しい風俗となった。

このような南蛮文化を積極的に取り入れたのが織田信長であり、後継者豊臣秀吉にも引き継がれ、南蛮風意匠の工芸品が庶民の間に広まった。

南蛮文化を受け入れる窓口の一つであった堺は、商品流通のルートばかりでなく、戦国大名が渴望する鉄砲の生産を掌握し繁栄を誇った。そうした堺の町衆である武野紹鷗、千利休によって新しい茶の湯が誕生した。

茶の湯に用いられる茶入れや茶壺などの茶道具は、財宝の第一位とされ、戦国大名、さらには天下人の**垂涎**の的となった。茶の湯の一人者千利休は、天下人織田信長に召しだされて**茶頭**となり、つづいて秀吉にも重用されて「天下第一の茶湯者」と称され、京都で活躍するに至った。秀吉は茶の湯を政治的に利用し、禁中で茶会を開いたり、黄金の茶室の建設や北野の大茶会によってその威勢を世に示した。こうした企図を成功させたのが千利休であったと言えよう。

利休の流れをくむ表千家（不審庵）、裏千家（今日庵）、武者小路千家（官休庵）の三千家は、現在、市内の上京区にある。

安土桃山時代の代表的な建造物

この時代の代表的な建造物として、醍醐寺の三宝院殿堂（表書院他：国宝・重要文化財）、大徳寺唐門（国宝）など桃山期の特色ある建造物の代表事例が、現存している。

また、本願寺飛雲閣（国宝）は、金閣、銀閣と共に「京の三名閣」の一つに数えられる建築物で、こけら葺の三層からなる楼閣建築である。



写真 1-9 本願寺飛雲閣

新 (P32)

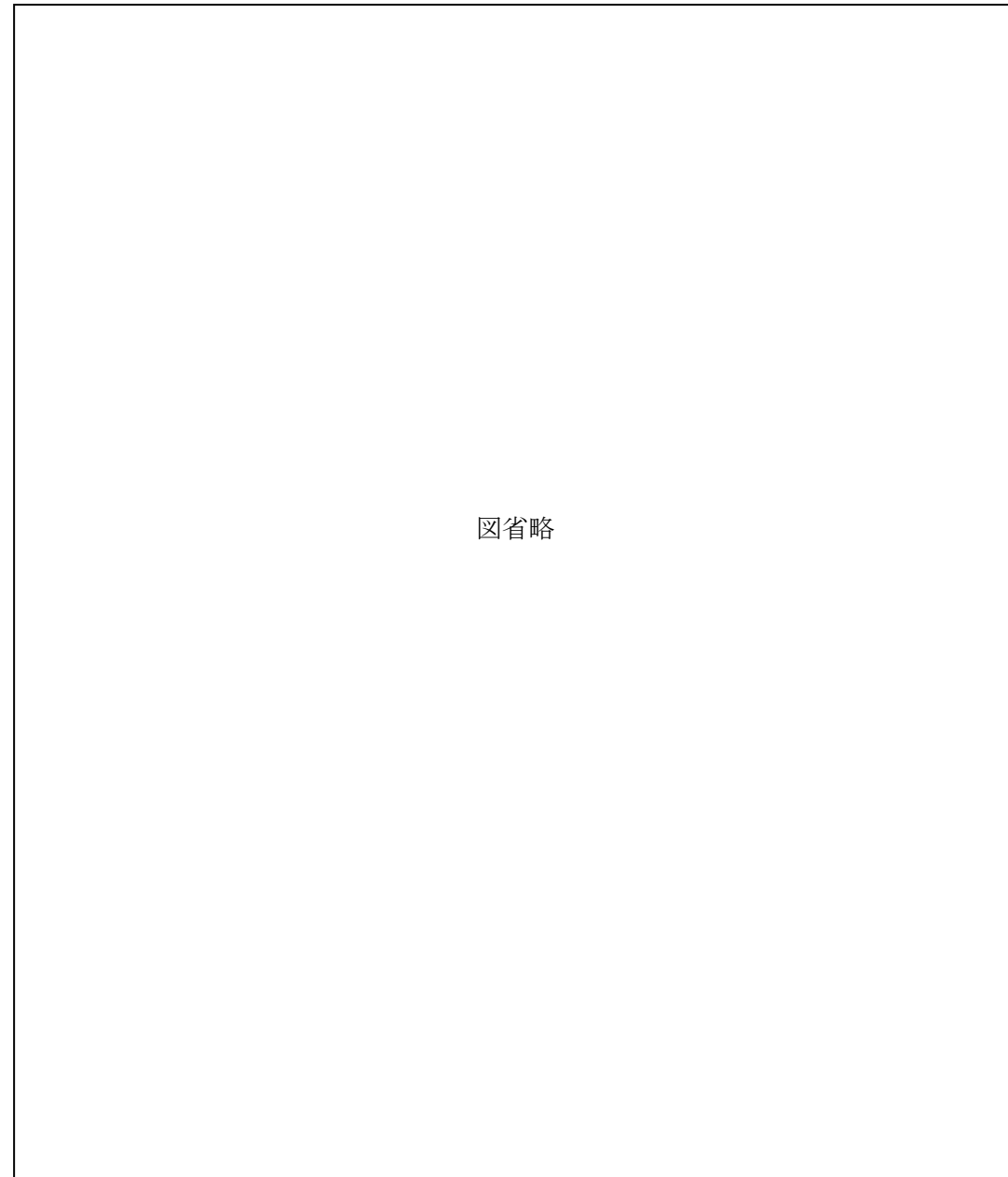


図 1-11 延宝・元禄期を中心とした京都の様子 出典「京都の歴史5」

この時代の町の暮らしは、町単位を基本として営まれていた。その町では、自らの生活環境を守り、快適に暮らすために町人同士で「町式目」と呼ばれる町独自の規則を定めた。

社会の安定が続くと、経済も順調に成長し、都市住民の生活が豊かになるとともに、様々な技術の進歩に伴い建築技術も発達した。そして、今日の京町家の原型が形成され、この京町家は、京都の文化の伝播とともに全国各地に広がり、全国の町家建築に

旧 (P32)

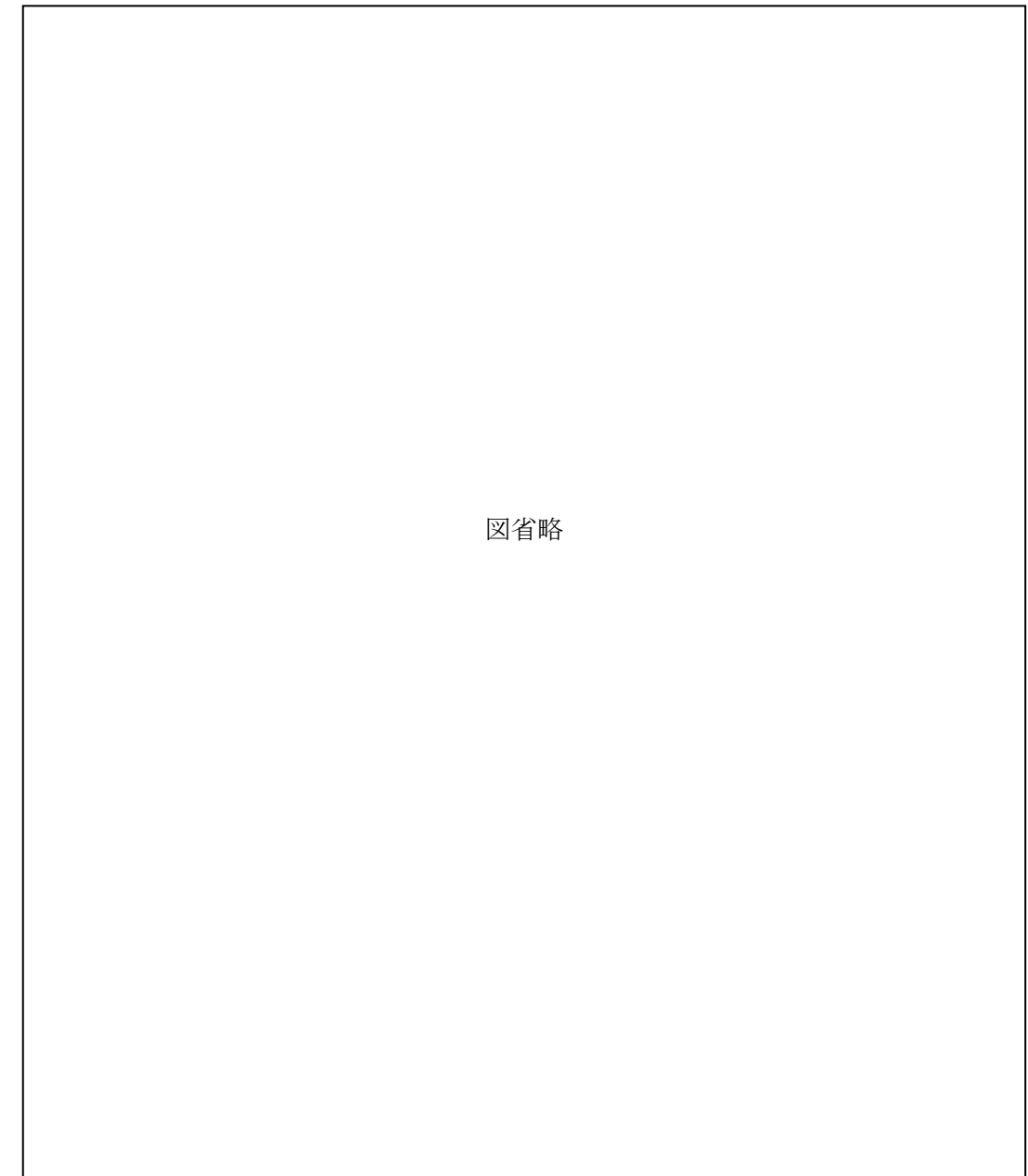


図 1-11 延宝・元禄期を中心とした京都の様子 出典「京都の歴史5」

この時代の町の暮らしは、町単位を基本として営まれていた。その町では、自らの生活環境を守り、快適に暮らすために町人同士で「町式目」と呼ばれる町独自の規則を定めた。

社会の安定が続くと、経済も順調に成長し、都市住民の生活が豊かになるとともに、様々な技術の進歩に伴い建築技術も発達した。そして、今日の京町家の原型が形成され、この京町家は、京都の文化の伝播とともに全国各地に広がり、全国の町家建築に

新 (P33)

大きな影響を与えてきた。

現在も市内に多数残っている京町家の源流は平安時代まで遡ることができるが、今

日見られるような洗練された京町家の原型が完成したのは、江戸時代の中期以降である。技術の発達は、京町家のなかで営まれる都市住民の暮らしにも大きな影響を与えていった。奥の庭を前にした畳敷きの広い座敷では、お茶・お花・句会などが営まれ、ここでの情報交換を大切にした大店の暮らしが、庶民の暮らしにも徐々に広がっていった。こうした暮らしの文化を背景として生産された京都の産品は、全国

各地で、「**下**りもの」として珍重され、

京都の活性化に大きく貢献した。

また、戦乱から開放された市民は、古代・中世以来受け継がれてきた遊山・遊楽といった屋外の遊びを、庶民の遊びのパターンとして創りはじめ

た。この遊びの有様は、「洛中洛外図屏風」などに描かれているが、四季折々の名所、参詣する寺社の「京内まいり」が、京の庶民ばかりでなく、他国の人々にまで及んで京の価値を生み、「京風」を認識させていった。

この遊山・遊楽の盛行は江戸中期に入って、全国的な旅行ブームが招来されてくると、いっそう拍車をかけられることになり、観光名所・観光寺院・観光土産といったものがつくりだされ、さらにこれが各種の京都観光案内書などの出版物を通じて広く宣伝された。



三十三間堂



豊国廟

図 1-12 洛中洛外図屏風(舟木本)

(重要文化財)部分 東京国立博物館 所蔵
Image:TNM Image Archives

旧 (P33)

大きな影響を与えてきた。

現在も市内に多数残っている京町家の源流は平安時代まで遡ることができるが、今

日見られるような洗練された京町家の原型が完成したのは、江戸時代の中期以降である。技術の発達は、京町家のなかで営まれる都市住民の暮らしにも大きな影響を与えていった。奥の庭を前にした畳敷きの広い座敷では、お茶・お花・句会などが営まれ、ここでの情報交換を大切にした大店の暮らしが、庶民の暮らしにも徐々に広がっていった。こうした暮らしの文化を背景として生産された京都の産品は、全国各地で、「**下**りもの」として珍重され、京都の活性化に大きく貢献した。

また、戦乱から開放された市民は、古代・中世以来受け継がれてきた遊山・遊楽といった屋外の遊びを、庶民の遊びのパターンとして創りはじめた。この遊びの有様は、「洛中洛外図屏風」などに描かれているが、四季折々の名所、参詣する寺社の「京内まいり」が、京の庶民ばかりでなく、他国の人々にまで及んで京の価値を生み、「京風」を認識させていった。

この遊山・遊楽の盛行は江戸中期に入って、全国的な旅行ブームが招来されてくると、いっそう拍車をかけられることになり、観光名所・観光寺院・観光土産といったものがつくりだされ、さらにこれが各種の京都観光案内書などの出版物を通じて広く宣伝された。



三十三間堂



豊国廟

図 1-12 洛中洛外図屏風(舟木本)

(重要文化財)部分 東京国立博物館 所蔵
Image:TNM Image Archives

新 (P35)

(6) 明治時代

明治になって東京遷都が行われると、京都は首都としての機能を失い、空洞化していった。この危機的な状況を打開するため、積極的に近代化への事業や政策が実施された。

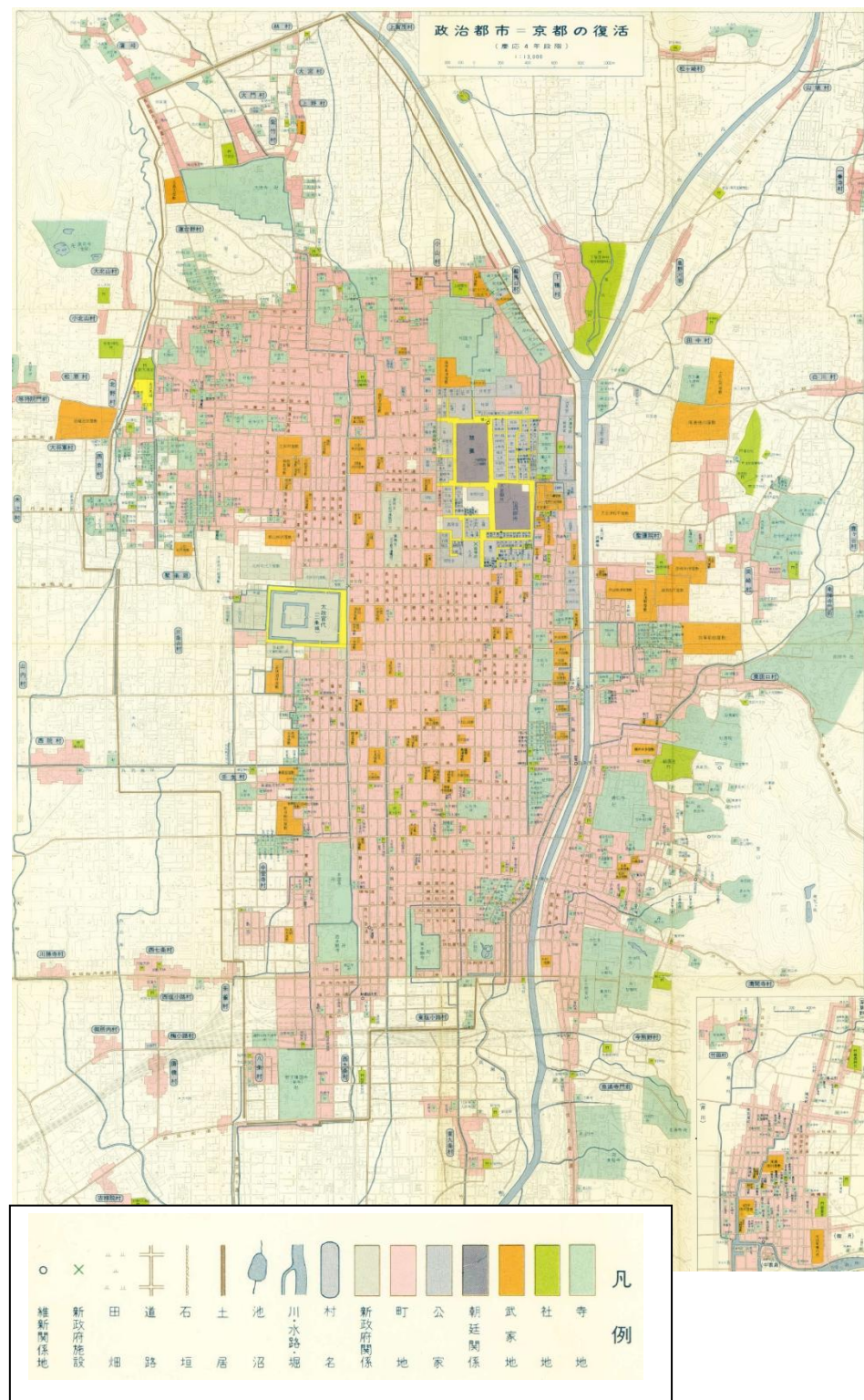


図 1-14 慶応 4 年 (1868) 頃の様子 出典「京都の歴史7」

旧 (P35)

(6) 明治時代

明治になって東京遷都が行われると、京都は首都としての機能を失い、空洞化していった。この危機的な状況を打開するため、積極的に近代化への事業や政策が実施された。

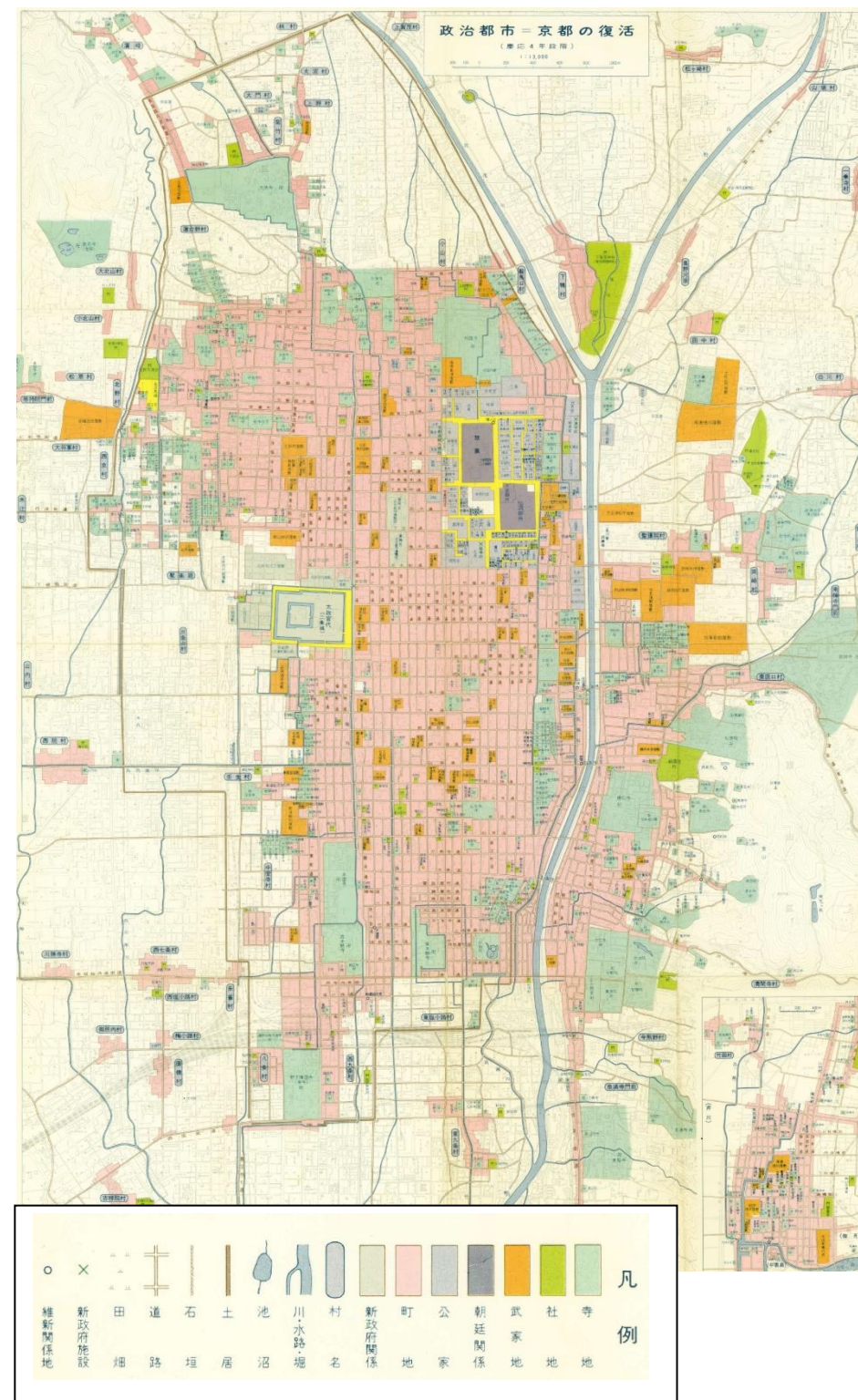


図 1-14 慶応 4 年頃の様子 出典「京都の歴史7」

新 (P36)

第3代京都府知事の北垣国道が推進した琵琶湖疏水事業は、明治23年(1890)に竣工し、翌年には疏水を利用した日本発の一般供給用発電所(蹴上発電所)が完成し、京都の町に電力が供給されるようになり、疏水は京都の近代化を一身に担うものになった。

一方、疏水運河の完成は、直ちに高瀬川の船運に影響を及ぼすことはなく、鴨川運河は開かれても、高瀬川は薪炭肥料など日用品、新運河は山陰・北陸方面の石材・石炭・木材などの諸物資の輸送と、水路の機能が分化された。

明治28年(1895)には、この電力を利用して日本初の市街電車が開通した。

明治31年(1898)に、市政特例(東京・大阪とともに府知事が市長を兼務する)が廃止され、京都に初代市長・内貴甚三郎が就任すると、明治41年(1908)から第二疏水の建設、上水道の建設、道路拡張の三大事業が着手されるなど、近代都市としての都市基盤整備が行われていった。日露戦争中には、深草に陸軍第十六師団が設置され、兵舎、兵器^{ししょう}支廠などができ、京都駅と師団を結ぶ軍用道路として師団街道が敷設された。



写真 1-14 現在の蹴上発電所(非公開)



図 1-15 京都町組みの新編成 (上下京両組一覽之図) 京都府立総合資料館 所蔵

旧 (P36)

第3代京都府知事の北垣国道が推進した琵琶湖疏水事業は、明治23年(1890)に竣工し、翌年には疏水を利用した日本発の一般供給用発電所(蹴上発電所)が完成し、京都の町に電力が供給されるようになり、疏水は京都の近代化を一身に担うものになった。

一方、疏水運河の完成は、直ちに高瀬川の船運に影響を及ぼすことはなく、鴨川運河は開かれても、高瀬川は薪炭肥料など日用品、新運河は山陰・北陸方面の石材・石炭・木材などの諸物資の輸送と、水路の機能が分化された。

明治28年(1895)には、この電力を利用して日本初の市街電車が開通した。

明治31年(1898)に、市政特例(東京・大阪とともに府知事が市長を兼務する)が廃止され、京都に初代市長・内貴甚三郎が就任すると、明治41年(1908)から第二疏水の建設、上水道の建設、道路拡張の三大事業が着手されるなど、近代都市としての都市基盤整備が行われていった。日露戦争中には、深草に陸軍第十六師団が設置され、兵舎、兵器^{ししょう}支廠などができ、京都駅と師団を結ぶ軍用道路として師団街道が敷設された。



写真 1-14 現在の蹴上発電所(非公開)



図 1-15 京都町組みの新編成 (上下京両組一覽之図) 京都府立総合資料館 所蔵

新 (P37)

一方、室町時代から受け継がれてきた町組は、京都府により上京・下京各33組に組み替えられた。各番組では小学校の建営を決定し、明治2年(1869)に64校の小学校が開校した。この小学校は町組の会所兼小学校として発足し、「番組小学校」と呼ばれる。

また、慶応3年(1867)には、すでに幕府領の収公が始まり、明治2年には他の藩領も新政府に奉還されたが、明治4年、最後に残された寺社領の整理がおこなわ

れ、境内を除く寺社領が、続く8年には、宗教活動や祭礼に用いられる境内地、**社叢**などごく周辺の山林および寺社の買収地などを除くすべての土地が、収公された。この上知令は、各地に点在する広大な寺社領に加え、京都周辺に多くの境内地を有していた大寺社にとって、経済的基盤を根底から覆すこととなった。

こうして上知された土地の一部は、京都の近代化に欠かせぬ諸施設の用地として活かされた。その代表的なものは学校で、妙法院境内を払い下げられた修道小学校などがその例である。また、京都の中心部に集中していた寺町の寺院街の一部が、上知の末に歓楽街として生まれ変わった。これが、現在の新京極である。

山林については、旧藩及び寺社所有の山林はことごとく官有林となったが、京都府はこの官林について明治3年に官林掛を設けて植林や維持管理に努めるとともに、民間に対しても明治4年「稚松伐採取禁止」を布達したのを始め、翌5年には目通りの周囲3尺以上の樹木の伐採及び山林1反以上の伐採を許可制とした。さらに明治10年代に入ると共有林の養成などの植林の奨励や濫伐禁止、火入れ取締りなどの山林保護、育成の施策を打ち出した。これは維新当時の戦乱と明治10年代に入ってからインフレによる木材需要の増大に伴う山林の荒廃に対処しようとしたものである。そしてこれらの山林保護の施策は自然環境保全の大きな力となった。



写真 1-15 平安神宮 (建設当時)

出典 「平安神宮百年史 (平安神宮)」京都府総合資料館 所蔵

明治28年(1895)には、平安神宮が建てられ、「平安京遷都千百年祭」が盛大に行われた。平安神宮(市指定文化財)には桓武天皇が祀られることとなる。また、平安時代から幕末維新までの時代を現す行列を行う時代祭が始まった。

三条通りは東海道の西の起点であり、高瀬川の船着場に隣接していたこともあり、諸国問屋や飛脚問屋、両替商、旅籠等が集積し、近世京都のにぎわいの中心の一つであった。明治になって郵便局や電信局、その他運輸、出版などの業種が立地し、また銀行、保険会社も集まるなど、都心的機能がさらに強化された。

まず三条東洞院に集書院や西京郵便役所、さらに三条東洞院通りの向かいに電信分局が、それぞれ洋風木造2階建てで建てられ、新しい景観が出現した。

旧 (P37)

一方、室町時代から受け継がれてきた町組は、京都府により上京・下京各33組に組み替えられた。各番組では小学校の建営を決定し、明治2年(1869)に64校の小学校が開校した。この小学校は町組の会所兼小学校として発足し、「番組小学校」と呼ばれる。

また、慶応3年には、すでに幕府領の収公が始まり、明治2年には他の藩領も新政府に奉還されたが、明治4年、最後に残された寺社領の整理がおこなわ

れ、境内を除く寺社領が、続く8年には、宗教活動や祭礼に用いられる境内地、**社叢**などごく周辺の山林および寺社の買収地などを除くすべての土地が、収公された。この上知令は、各地に点在する広大な寺社領に加え、京都周辺に多くの境内地を有していた大寺社にとって、経済的基盤を根底から覆すこととなった。

こうして上知された土地の一部は、京都の近代化に欠かせぬ諸施設の用地として活かされた。その代表的なものは学校で、妙法院境内を払い下げられた修道小学校などがその例である。また、京都の中心部に集中していた寺町の寺院街の一部が、上知の末に歓楽街として生まれ変わった。これが、現在の新京極である。

山林については、旧藩及び寺社所有の山林はことごとく官有林となったが、京都府はこの官林について明治3年に官林掛を設けて植林や維持管理に努めるとともに、民間に対しても明治4年「稚松伐採取禁止」を布達したのを始め、翌5年には目通りの周囲3尺以上の樹木の伐採及び山林1反以上の伐採を許可制とした。さらに明治10年代に入ると共有林の養成などの植林の奨励や濫伐禁止、火入れ取締りなどの山林保護、育成の施策を打ち出した。これは維新当時の戦乱と明治10年代に入ってからインフレによる木材需要の増大に伴う山林の荒廃に対処しようとしたものである。そしてこれらの山林保護の施策は自然環境保全の大きな力となった。



写真 1-15 平安神宮 (建設当時)

出典 「平安神宮百年史 (平安神宮)」京都府総合資料館 所蔵

明治28年(1895)には、平安神宮が建てられ、「平安京遷都千百年祭」が盛大に行われた。平安神宮(市指定文化財)には桓武天皇が祀られることとなる。また、平安時代から幕末維新までの時代を現す行列を行う時代祭が始まった。

三条通りは東海道の西の起点であり、高瀬川の船着場に隣接していたこともあり、諸国問屋や飛脚問屋、両替商、旅籠等が集積し、近世京都のにぎわいの中心の一つであった。明治になって郵便局や電信局、その他運輸、出版などの業種が立地し、また銀行、保険会社も集まるなど、都心的機能がさらに強化された。

まず三条東洞院に集書院や西京郵便役所、さらに三条東洞院通りの向かいに電信分局が、それぞれ洋風木造2階建てで建てられ、新しい景観が出現した。

新 (P44)	旧 (P44)
<p>条約の人類の無形文化遺産の「代表一覧表」に統合された。</p> <p>(I) 歌舞伎</p> <p>今から400年前、出雲阿国が北野天満宮の境内で「かぶき踊り」を踊ったのが始まりとされる。時代に傾いた服装や大胆な踊りが京都の町の人々の間で人気を呼び、阿国が都から姿を消してからも、多くの模倣者が現れ、遊女が演じる遊女歌舞伎（女歌舞伎）や、前髪を切り落としていない少年の役者が演じる若衆歌舞伎が行われていたが、風紀を乱すとの理由から前者は寛永6年（1629）に禁止され、後者も売色の目的を兼ねる歌舞伎集団が横行したことなどから慶安5年（1652）に禁止され、現代に連なる野郎歌舞伎となった。</p> <p>江戸時代、能が武家社会の厚い保護を受けたのとは対照的に、歌舞伎はずっと庶民の娯楽として発展してきた。平成17年（2005）には、能楽と同じく「人類の口承及び無形遺産の傑作」として宣言された。</p> <p>四条大橋東詰めにある南座は、建築物としては何度も建て替えられているが、江戸時代初期からずっとこの場所にあったという意味で、日本最古の劇場とも言える。現在でも毎年12月に顔見世興行が開かれ、大層なにぎわいとなっている。</p> <p>ウ 食文化</p> <p>(7) 京料理</p> <p>京料理は、四季それぞれの材料を用いて季節感を出し、淡い味付けで素材を生かしながら洗練された京焼・京漆器などの器と調和させ、盛付けの意匠にも工夫をこらし、味覚と視角の両方で楽しめるのが特徴。根本は平安期の貴族社会の饗宴に見られる。</p> <p>一方、仏教寺院での精進物は、鎌倉期に請来した禅宗の食礼によって精進料理へと発展、その後、南北朝期から室町期にかけて儀礼料理としての本膳が成立した。近世初頭には南蛮料理も受け止め、江戸期に入ると本膳料理にかわる新しい会席料理が起り、茶道の発展に従って形式が整った。元禄頃に料理茶屋が発達する一方で大衆化が進み、仕出し料理も定着。また文化・文政期に京焼の繁栄期があり、食器も多彩になった。</p> <p>江戸後期の料理屋は高瀬川や鴨川に沿って生洲・川魚料理、社寺門前の豆腐料理、寺院の精進料理、街道口での即席料理などが主なものだった。今日、京都名物として伝わるいもぼうや、鯨そば、鯖鮓、ハモ料理等を見ると、海から遠いことによる魚介類の乏しさを干物や一塩もの、川魚などで補う工夫が伺える。</p> <p>この知恵と工夫が作り上げた京料理の例として、ハモがあげられる。ハモは小骨が多く、調理しにくいいため、昔はほかの地域でほとんど見向きもされない魚だったと言われている。しかし、生命力が強く、海から遠い京都でも生きてまま手に入ったため、京都では独特の骨切りという調理技術が発達し、上品で洗練されたハモ料理を作り上げた。魚介類を食するのに条件が良いとは決して言えない京</p>	<p>条約の人類の無形文化遺産の「代表一覧表」に統合された。</p> <p>(I) 歌舞伎</p> <p>今から400年前、出雲阿国が北野天満宮の境内で「かぶき踊り」を踊ったのが始まりとされる。時代に傾いた服装や大胆な踊りが京都の町の人々の間で人気を呼び、阿国が都から姿を消してからも、多くの模倣者が現れ、遊女が演じる遊女歌舞伎（女歌舞伎）や、前髪を切り落としていない少年の役者が演じる若衆歌舞伎が行われていたが、風紀を乱すとの理由から前者は寛永6年（1629）に禁止され、後者も売色の目的を兼ねる歌舞伎集団が横行したことなどから慶安5年（1652）に禁止され、現代に連なる野郎歌舞伎となった。</p> <p>江戸時代、能が武家社会の厚い保護を受けたのとは対照的に、歌舞伎はずっと庶民の娯楽として発展してきた。平成17年（2005）には、能楽と同じく「人類の口承及び無形遺産の傑作」として宣言された。</p> <p>四条大橋東詰めにある南座は、建築物としては何度も建て替えられているが、江戸時代初期からずっとこの場所にあったという意味で、日本最古の劇場とも言える。現在でも毎年12月に顔見世興行が開かれ、大層なにぎわいとなっている。</p> <p>ウ 食文化</p> <p>(7) 京料理</p> <p>京料理は、四季それぞれの材料を用いて季節感を出し、淡い味付けで素材を生かしながら洗練された京焼・京漆器などの器と調和させ、盛付けの意匠にも工夫をこらし、味覚と視角の両方で楽しめるのが特徴。根本は平安期の貴族社会の饗宴に見られる。</p> <p>一方、仏教寺院での精進物は、鎌倉期に請来した禅宗の食礼によって精進料理へと発展、その後、南北朝期から室町期にかけて儀礼料理としての本膳が成立した。近世初頭には南蛮料理も受け止め、江戸期に入ると本膳料理にかわる新しい会席料理が起り、茶道の発展に従って形式が整った。元禄頃に料理茶屋が発達する一方で大衆化が進み、仕出し料理も定着。また文化・文政期に京焼の繁栄期があり、食器も多彩になった。</p> <p>江戸後期の料理屋は高瀬川や鴨川に沿って生洲・川魚料理、社寺門前の豆腐料理、寺院の精進料理、街道口での即席料理などが主なものだった。今日、京都名物として伝わるいもぼうや、鯨そば、鯖鮓、ハモ料理等を見ると、海から遠いことによる魚介類の乏しさを干物や一塩もの、川魚などで補う工夫が伺える。</p> <p>この知恵と工夫が作り上げた京料理の例として、ハモがあげられる。ハモは小骨が多く、調理しにくいいため、昔はほかの地域でほとんど見向きもされない魚だったと言われている。しかし、生命力が強く、海から遠い京都でも生きてまま手に入ったため、京都では独特の骨切りという調理技術が発達し、上品で洗練されたハモ料理を作り上げた。魚介類を食するのに条件が良いとは決して言えない京</p>

新 (P51)	旧 (P51)
<p>冬季の閑散期対策として京都の歴史的文化遺産や町並みなどを「行灯」でつなぎ、京都ならではの雅を醸し出す夜の風物詩「京都・花灯路」事業を平成15年3月から開催している。</p> <p>京都の観光客像をモデル的に表せば、日帰り・宿泊が3：1、中高年女性、リピーターということが出来る。特に10回以上のリピーターが約6割を占めていることは、京都観光の質の高さを示している。</p> <p>外国からも多くの観光客が訪れ、平成20年、京都に宿泊した外国人は約94万人と、5年前と比べて2倍以上に増えている。国別で見るとアメリカが最も多く、次いで台湾、オーストラリア、フランス、中国の順となっている。伝統的な日本文化の原点である京都は、世界の中でも魅力あふれ、訪れてみたい代表的な観光地であることから、観光立国・日本の先導的な役割を期待されている。</p> <p>(5) 文化財の分布</p> <p>ア 京都市の重要文化財建造物等の概要（別表1）（平成26年1月現在）</p> <p>京都市内には、206件の建造物が国指定重要文化財（建造物）として指定され、そのうち40件が国宝に指定されている。重要文化財（建造物）の約85%を占める171件が社寺建築であり、平安時代から江戸時代までの各時代における、日本の代表的な建造物を見ることができる。これらの多くは、旧市街地の外に位置していたため、天明や元治の大火などの災害を逃れた遺構であり、殊に東山地区には国指定の社寺建造物が集積している。</p> <p>一方、旧市街地には、二条城や本願寺といった代表的な近世の社寺、城郭建築が現存する他、近代以降の質の高い建造物（近代洋風建築7件、近代和風建築4件）が指定されている。</p> <p>記念物では、54件の史跡（うち3件が特別史跡）、37件の名勝（うち12件が特別名勝）、7件の天然記念物が指定されている。名勝には、日本を代表する庭園が数多く含まれている。また、6件の重要無形民俗文化財が指定されている。そのうち、京都の代表的な祭礼である祇園祭については、祭礼が重要無形文化財に指定されているほか、山鉦29基が重要有形民俗文化財に指定されており、総合的な保護措置が図られている点が注記されよう。</p> <p>また、昭和51年に産寧坂地区、祇園新橋地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。その後、嵯峨鳥居本地区、上賀茂地区が更に選定され、現在、京都市内には合計4地区の重要伝統的建造物群保存地区がある。</p>	<p>冬季の閑散期対策として京都の歴史的文化遺産や町並みなどを「行灯」でつなぎ、京都ならではの雅を醸し出す夜の風物詩「京都・花灯路」事業を平成15年3月から開催している。</p> <p>京都の観光客像をモデル的に表せば、日帰り・宿泊が3：1、中高年女性、リピーターということが出来る。特に10回以上のリピーターが約6割を占めていることは、京都観光の質の高さを示している。</p> <p>外国からも多くの観光客が訪れ、平成20年、京都に宿泊した外国人は約94万人と、5年前と比べて2倍以上に増えている。国別で見るとアメリカが最も多く、次いで台湾、オーストラリア、フランス、中国の順となっている。伝統的な日本文化の原点である京都は、世界の中でも魅力あふれ、訪れてみたい代表的な観光地であることから、観光立国・日本の先導的な役割を期待されている。</p> <p>(5) 文化財の分布</p> <p>ア 京都市の重要文化財建造物等の概要（別表1）（平成24年10月現在）</p> <p>京都市内には、206件の建造物が国指定重要文化財（建造物）として指定され、そのうち40件が国宝に指定されている。重要文化財（建造物）の約85%を占める171件が社寺建築であり、平安時代から江戸時代までの各時代における、日本の代表的な建造物を見ることができる。これらの多くは、旧市街地の外に位置していたため、天明や元治の大火などの災害を逃れた遺構であり、殊に東山地区には国指定の社寺建造物が集積している。</p> <p>一方、旧市街地には、二条城や本願寺といった代表的な近世の社寺、城郭建築が現存する他、近代以降の質の高い建造物（近代洋風建築7件、近代和風建築4件）が指定されている。</p> <p>記念物では、54件の史跡（うち3件が特別史跡）、37件の名勝（うち12件が特別名勝）、7件の天然記念物が指定されている。名勝には、日本を代表する庭園が数多く含まれている。また、6件の重要無形民俗文化財が指定されている。そのうち、京都の代表的な祭礼である祇園祭については、祭礼が重要無形文化財に指定されているほか、山鉦29基が重要有形民俗文化財に指定されており、総合的な保護措置が図られている点が注記されよう。</p> <p>また、昭和51年に産寧坂地区、祇園新橋地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。その後、嵯峨鳥居本地区、上賀茂地区が更に選定され、現在、京都市内には合計4地区の重要伝統的建造物群保存地区がある。</p>

新 (P53)	旧 (P53)
<p>イ 京都市の重要文化財建造物等以外の文化財の概要（別表2）（平成26年1月現在）</p> <p>昭和56年（1981），京都府及び京都市は，京都府文化財保護条例，京都市文化財保護条例をそれぞれ制定した。同条例に基づき，国指定文化財に指定されていない文化財的価値の高い歴史遺産について指定・登録を行い，保護措置を図っている。</p> <p>京都府文化財保護条例に基づき，京都市内において，府指定有形文化財（建造物）<u>48</u>件，府登録文化財（建造物）<u>7</u>件，府指定史跡<u>4</u>件，府指定名勝1件，府指定天然記念物2件，文化財環境保全地区1件，府指定無形民俗文化財<u>4</u>件，府登録文化財（無形民俗文化財）2件が指定・登録されている。</p> <p>また，京都市文化財保護条例に基づき，市指定有形文化財（建造物）<u>70</u>件，市登録文化財（建造物）25件，市指定史跡16件，市登録文化財（史跡）12件，市指定名勝28件，市登録文化財（名勝地）3件，市指定天然記念物25件，市登録文化財（動物，植物，地質鉱物）10件，市指定有形民俗文化財7件，市登録有形民俗文化財3件，文化財環境保全地区10件，市登録無形民俗文化財52件が指定・登録されている。</p> <p>この他，平成8年（1996）に施行された国の文化財登録制度に基づき，市内において登録有形文化財（建造物）<u>317</u>件※が登録されている。</p> <p>京都市内には上記の指定・登録文化財等の他にも，文化財的価値を有する歴史遺産が多数残されており，近代化遺産調査，近代和風建築調査，町家調査などを実施して，積極的に保護措置を進めることを行っている。</p> <p>※国の登録有形文化財（建造物）の件数は原則として1棟1件という国の考え方により計上している。</p>	<p>イ 京都市の重要文化財建造物等以外の文化財の概要（別表2）（平成24年10月現在）</p> <p>昭和56年（1981），京都府及び京都市は，京都府文化財保護条例，京都市文化財保護条例をそれぞれ制定した。同条例に基づき，国指定文化財に指定されていない文化財的価値の高い歴史遺産について指定・登録を行い，保護措置を図っている。</p> <p>京都府文化財保護条例に基づき，京都市内において，府指定有形文化財（建造物）45件，府登録文化財（建造物）<u>6</u>件，府指定史跡<u>3</u>件，府指定名勝1件，府指定天然記念物2件，文化財環境保全地区1件，府指定無形民俗文化財<u>1</u>件，府登録文化財（無形民俗文化財）2件が指定・登録されている。</p> <p>また，京都市文化財保護条例に基づき，市指定有形文化財（建造物）68件，市登録文化財（建造物）25件，市指定史跡16件，市登録文化財（史跡）12件，市指定名勝28件，市登録文化財（名勝地）3件，市指定天然記念物25件，市登録文化財（動物，植物，地質鉱物）10件，市指定有形民俗文化財7件，市登録有形民俗文化財3件，文化財環境保全地区10件，市登録無形民俗文化財52件が指定・登録されている。</p> <p>この他，平成8年（1996）に施行された国の文化財登録制度に基づき，市内において登録有形文化財（建造物）<u>296</u>件※が登録されている。</p> <p>京都市内には上記の指定・登録文化財等の他にも，文化財的価値を有する歴史遺産が多数残されており，近代化遺産調査，近代和風建築調査，町家調査などを実施して，積極的に保護措置を進めることを行っている。</p> <p>※国の登録有形文化財（建造物）の件数は原則として1棟1件という国の考え方により計上している。</p>

新 (P54)

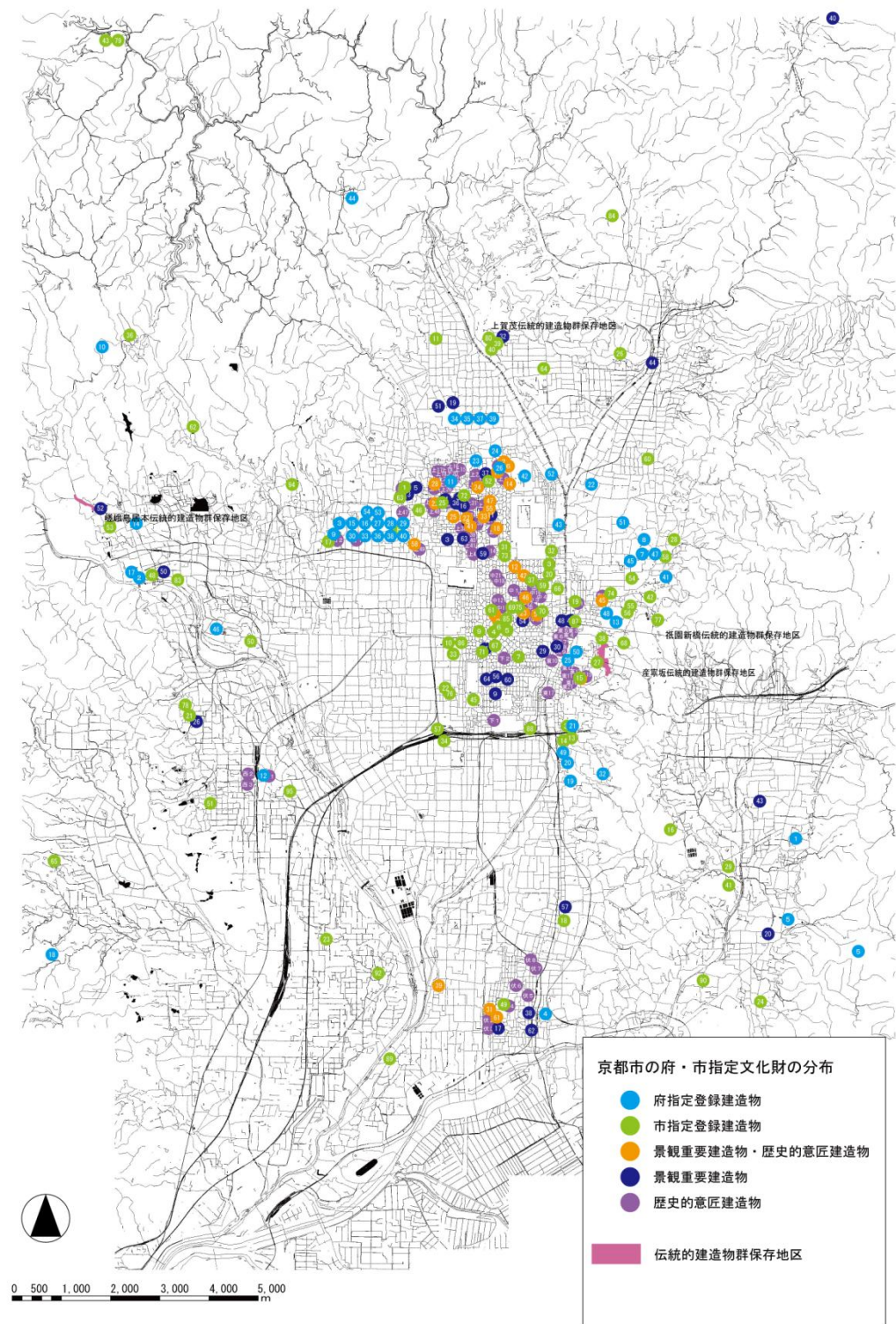


図 1-19 京都市の府・市指定文化財の分布

旧 (P54)

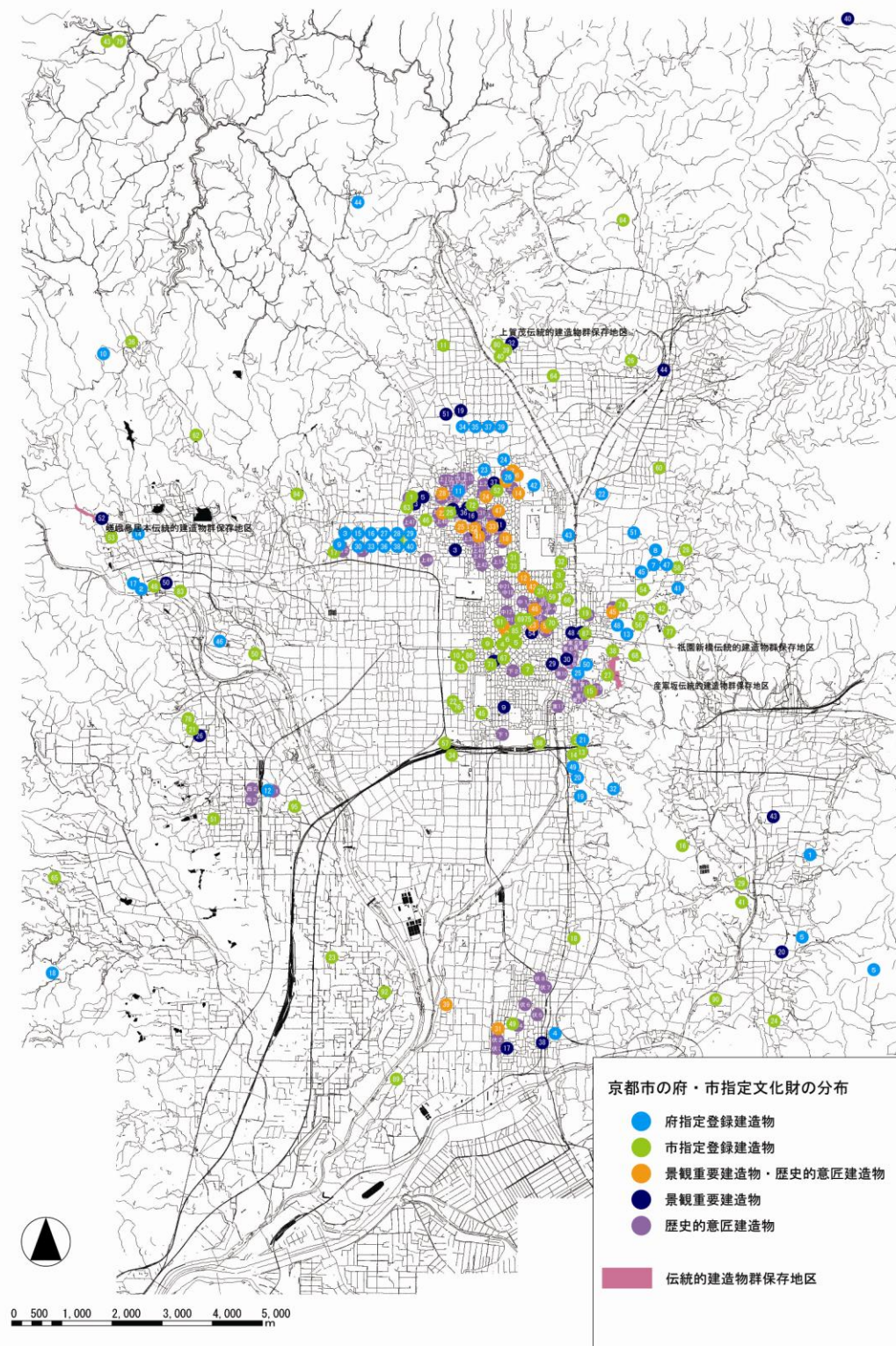


図 1-19 京都市の府・市指定文化財の分布

新 (P55)

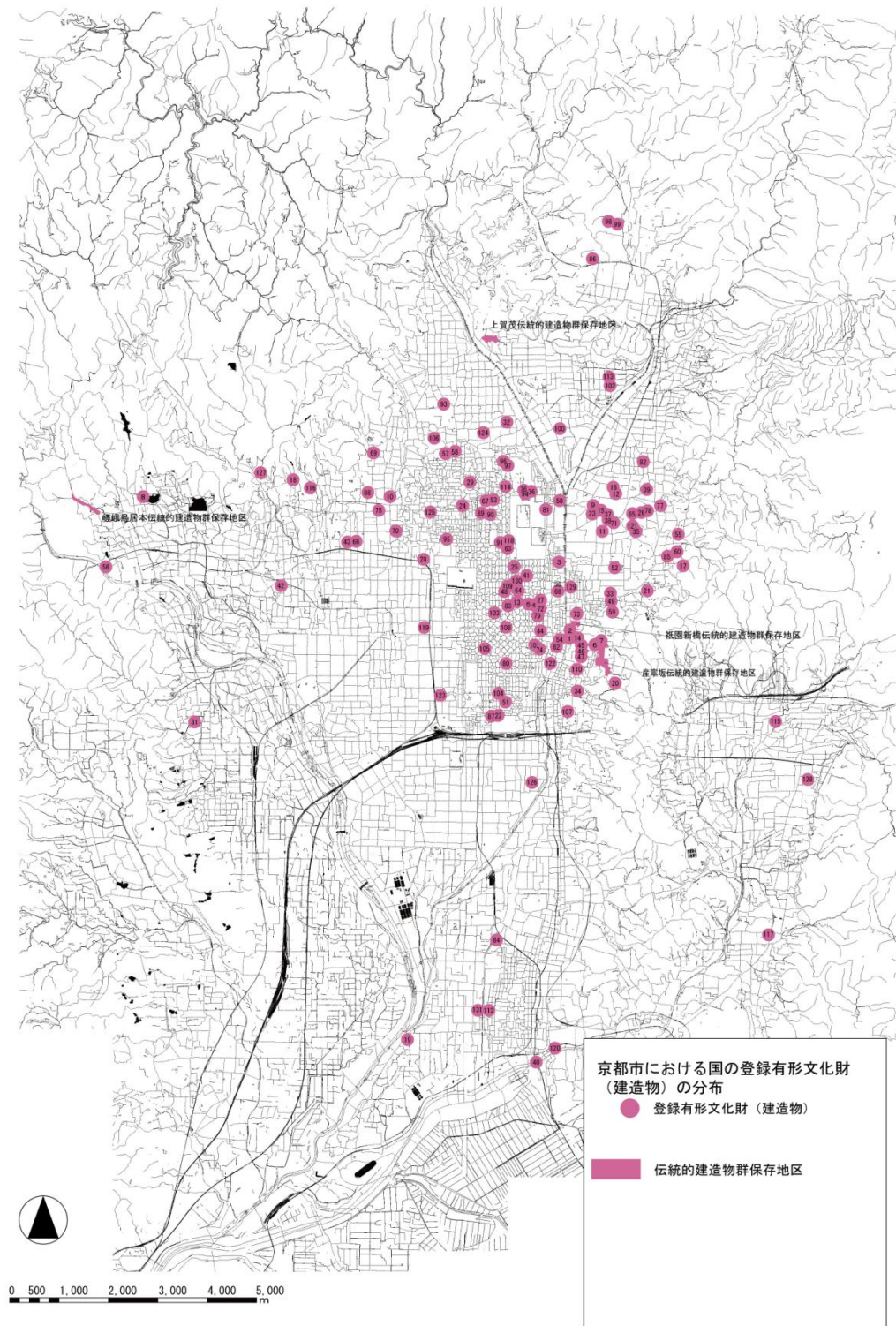


図 1-20 京都市における国の登録有形文化財 (建造物) の分布

旧 (P55)

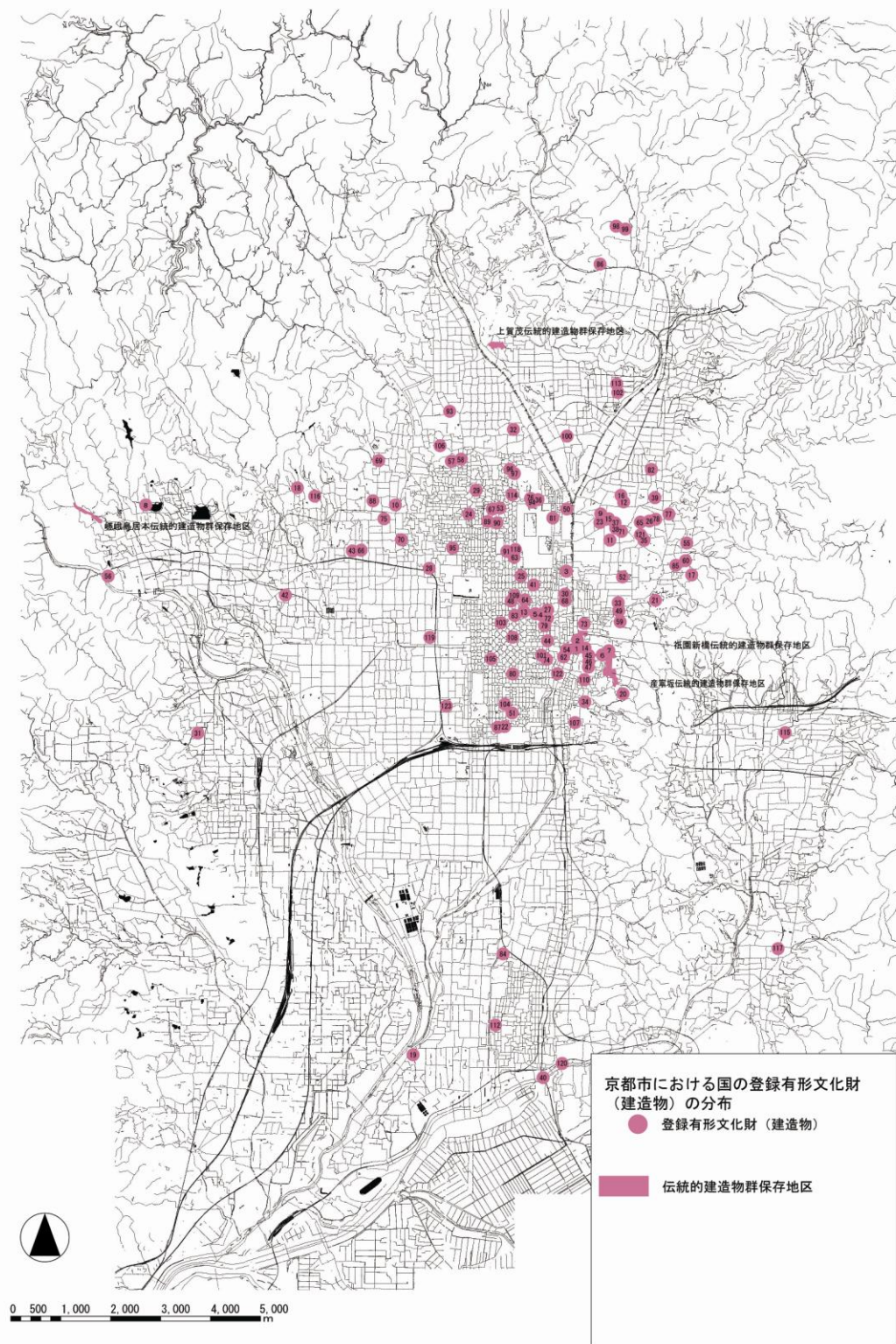


図 1-20 京都市における国の登録有形文化財 (建造物) の分布

新 (P56)

1 京都市の全体像

(1) 概要

京都市の維持向上すべき歴史的風致は、京都を育んだ豊かな自然と、千年をこえる首都の歴史と文化が織りなす都市空間および歴史文化遺産群、伝統を受けつぎ革新を求める人々が営む文化や行事、芸術が一体となって形成している、日本はもとより世界にも類を見ない市街地の環境である。

(2) 京都と自然

平安京遷都に際して、「山川もうるわしく」と詔にあるなど、京都盆地の自然の美しさがくり返し強調されている。立地の理由には、もちろん政治的・軍事的な要因や呪術的なものもあったが、しかし東に鴨川、西に山陰道、北に船岡、南に巨椋池があり、「四神相応」の地形となっていること、さらには北の船岡、東の神楽岡、

西の双ヶ岡の「平安京の三山」が都の地の「鎮め」をなしていたことなど、古代的な世界観のもとで、山々とは特に大切な意味をもっていた。

世界文化遺産「古都・京都の文化財」のほとんどが周りの山河と深くかかわり、自然とともに豊かな歴史と文化を育んできたが、平安京を京都たらしめたもの、また現在でも京都を京都たらしめているものは、京都を包みこむ美しい自然なのである。京都とその自然は、日本を代表する景観であり、日本の原風景といってよい。

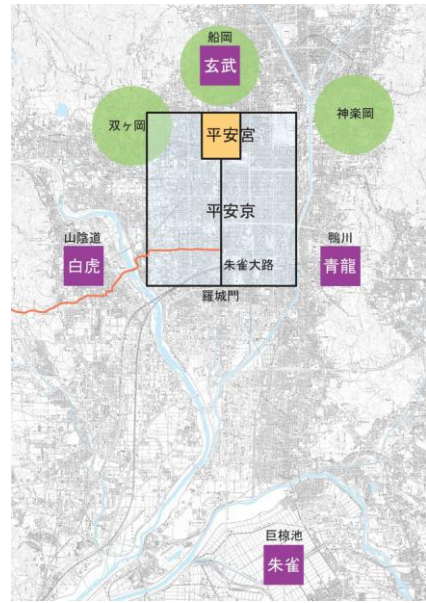


図 2-1 京都と自然

(3) 京都の都市構造

平安京以前から京都盆地には田畑が広がり、村々が点在していた。八坂神社のように、地域の人々の信仰を集める社もあった。

平安京は、律令国家の首都構想のもと、美しい山並みに囲まれた要害の地に建設された日本的な都城であった。その条坊制の都市システムは、藤原京から平城京、長岡京、平安京へと百年にわたって経験を積み重ね、工夫を加えてきた都市計画技術の精華といってよい。平安京そしてその都市理念は時代を越えて生きつづけ、鎌倉や江戸などの都市の理想像となったことも注目される。

旧 (P56)

1 京都市の全体像

(1) 概要

京都市の維持向上すべき歴史的風致は、京都を育んだ豊かな自然と、千年をこえる首都の歴史と文化が織りなす都市空間および歴史文化遺産群、伝統を受けつぎ革新を求める人々が営む文化や行事、芸術が一体となって形成している、日本はもとより世界にも類を見ない市街地の環境である。

(2) 京都と自然

平安京遷都に際して、「山川もうるわしく」と詔にあるなど、京都盆地の自然の美しさがくり返し強調されている。立地の理由には、もちろん政治的・軍事的な要因や呪術的なものもあったが、しかし東に鴨川、西に山陰道、北に船岡、南に巨椋池があり、「四神相応」の地形となっていること、さらには北の船岡、東の神楽岡、

西の双ヶ岡の「平安京の三山」が都の地の「鎮め」をなしていたことなど、古代的な世界観のもとで、山々とは特に大切な意味をもっていた。

世界文化遺産「古都・京都の文化財」のほとんどが周りの山河と深くかかわり、自然とともに豊かな歴史と文化を育んできたが、平安京を京都たらしめたもの、また現在でも京都を京都たらしめているものは、京都を包みこむ美しい自然なのである。京都とその自然は、日本を代表する景観であり、日本の原風景といってよい。

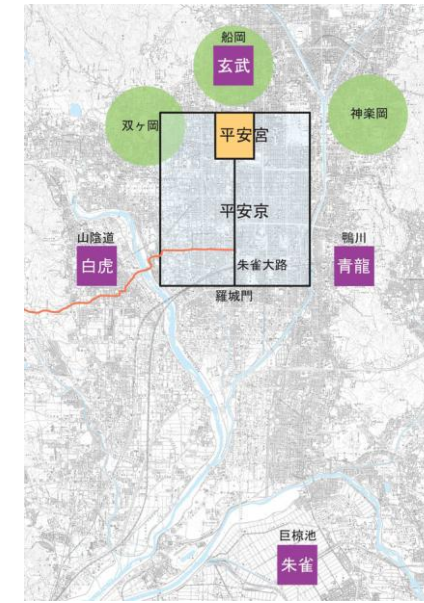


図 2-1 京都と自然

(3) 京都の都市構造

平安京以前から京都盆地には田畑が広がり、村々が点在していた。八坂神社のように、地域の人々の信仰を集める社もあった。

平安京は、律令国家の首都構想のもと、美しい山並みに囲まれた要害の地に建設された日本的な都城であった。その条坊制の都市システムは、藤原京から平城京、長岡京、平安京へと百年にわたって経験を積み重ね、工夫を加えてきた都市計画技術の精華といってよい。平安京そしてその都市理念は時代を越えて生きつづけ、鎌倉や江戸などの都市の理想像となったことも注目される。

新 (P58)	旧 (P58)
<p>歴史的市街地には、京都の町の歴史と文化の象徴ともいえる京町家が生き続けており、今日もなお多くの市民のくらしの場、生業の場として重要な意味をもつとともに、4箇所の重要伝統的建造物群保存地区をはじめ、繊細で風情のある町並み景観を形成している。</p> <p>(5) 京都の文化</p> <p>千年以上にわたって日本の首都であり続けた京都は、人とモノと情報が集中する場であった。京都は、東アジアはもとより広く世界の文化をおおらかに受けいれるとともに、新たな文化を創出し、また伝統文化を守り伝えてきた。そうしたなかで、おのずから特色ある京都のこころをはぐくみ、生活や産業、また政治や宗教、芸術、学術などにおけるさまざまな相異を尊重し、それらを対比しつつ調和、共存させ、さらに大きく展開させる、広く豊かな「融和の文化」をつくりあげた。</p> <p>また、京都文化の基層には公家・寺社・武家・町衆の文化、あるいは貴族・王朝文化と大衆・都市文化が混在しているが、それらもたがいに交流・刺激しあって、能・茶の湯・生け花、数寄屋建築などの芸術を創造した。</p> <p>洛外の村々も、京都の文化に深いかかわりがある。洛中の糞尿と洛外の^{そさい}蔬菜のエコロジカル・サイクルが成りたっていたことは、日本ではじめての「エコ社会」の実現として高く評価されるし、また京都の夏を飾る五山送り火も、洛外の村々が洛中に向けて行ったお盆の一大イベントとすることができる。</p> <p>京都は、昔も今も、貴族と大衆、都市と田舎、唐風と国風、洋風と和風、古典と数奇などさまざまな特色をもつ文化が混在、共存する場所である。多彩な文化を受けいれ、育て、発信する京都の核をなしているのは、伝統と革新、その均衡を尊ぶころであろう。</p> <p>茶の湯や生け花は、くらしのなかに年中行事として、また社交として深く組みこまれ、京のくらしや京町家の魅力ともなっている。「立花」の伝統を伝える六角堂が、かつて下京の惣堂として町衆の寄りあいの場であり、またその鐘が下京の人々に時を知らせる鐘、町衆決起の鐘であったことや、世界無形文化遺産への登録を目指す祇園祭が、八坂神社の祭礼であるとともに、戦国時代から都市民衆の祭礼となっており、コミュニティや町の空間と深いかかわりをもってきたことは、くらしと生活文化と町が一体であることを端的に示している。</p> <p>いつの時代にも伝統文化と現代文化を合わせもつ京都では、さまざまな工芸品が、京都のみならず日本全国、さらには東アジアに向けて生産・販売された。西陣織や扇などのように、京都ブランドというべき産業も生まれ、早くから同業者の集住する地域（同業者町、工業団地）が発達する。これもまたくらしと生活文化と町の一体化といえよう。</p> <p>芸術や芸能、工芸、祭礼行事、くらしを支える基盤は、都市民衆自身がたがいに助</p>	<p>歴史的市街地には、京都の町の歴史と文化の象徴ともいえる京町家が生き続けており、今日もなお多くの市民のくらしの場、生業の場として重要な意味をもつとともに、4箇所の重要伝統的建造物群保存地区をはじめ、繊細で風情のある町並み景観を形成している。</p> <p>(5) 京都の文化</p> <p>千年以上にわたって日本の首都であり続けた京都は、人とモノと情報が集中する場であった。京都は、東アジアはもとより広く世界の文化をおおらかに受けいれるとともに、新たな文化を創出し、また伝統文化を守り伝えてきた。そうしたなかで、おのずから特色ある京都のこころをはぐくみ、生活や産業、また政治や宗教、芸術、学術などにおけるさまざまな相異を尊重し、それらを対比しつつ調和、共存させ、さらに大きく展開させる、広く豊かな「融和の文化」をつくりあげた。</p> <p>また、京都文化の基層には公家・寺社・武家・町衆の文化、あるいは貴族・王朝文化と大衆・都市文化が混在しているが、それらもたがいに交流・刺激しあって、能・茶の湯・生け花、数寄屋建築などの芸術を創造した。</p> <p>洛外の村々も、京都の文化に深いかかわりがある。洛中の糞尿と洛外の^{そさい}蔬菜のエコロジカル・サイクルが成りたっていたことは、日本ではじめての「エコ社会」の実現として高く評価されるし、また京都の夏を飾る五山送り火も、洛外の村々が洛中に向けて行ったお盆の一大イベントとすることができる。</p> <p>京都は、昔も今も、貴族と大衆、都市と田舎、唐風と国風、洋風と和風、古典と数奇などさまざまな特色をもつ文化が混在、共存する場所である。多彩な文化を受けいれ、育て、発信する京都の核をなしているのは、伝統と革新、その均衡を尊ぶころであろう。</p> <p>茶の湯や生け花は、くらしのなかに年中行事として、また社交として深く組みこまれ、京のくらしや京町家の魅力ともなっている。「立花」の伝統を伝える六角堂が、かつて下京の惣堂として町衆の寄りあいの場であり、またその鐘が下京の人々に時を知らせる鐘、町衆決起の鐘であったことや、世界無形文化遺産への登録を目指す祇園祭が、八坂神社の祭礼であるとともに、戦国時代から都市民衆の祭礼となっており、コミュニティや町の空間と深いかかわりをもってきたことは、くらしと生活文化と町が一体であることを端的に示している。</p> <p>いつの時代にも伝統文化と現代文化を合わせもつ京都では、さまざまな工芸品が、京都のみならず日本全国、さらには東アジアに向けて生産・販売された。西陣織や扇などのように、京都ブランドというべき産業も生まれ、早くから同業者の集住する地域（同業者町、工業団地）が発達する。これもまたくらしと生活文化と町の一体化といえよう。</p> <p>芸術や芸能、工芸、祭礼行事、くらしを支える基盤は、都市民衆自身がたがいに助</p>

新 (P59)

けあい、連携・協働して創りあげた町（地縁生活共同体）であった。そしてまちづくりも、住民と町が主体となって推進し、統一感のある京町家とその町並みを形成した。コミュニティ主体のまちづくりは、近代における日本最初の小学校建設や、現代のまちづくり、京町家再生の活動などへ、^{れんめん} **連続**と受け継がれ、これもまた京都の伝統となっている。

このように京都の町々では、1200年をこえる長い歴史に培われた多彩な文化が歴史的風致の背景となり、日々の暮らしや生業などの営みをとおして京都にしかみられない品格と風情を醸し出している。

それぞれの時代の特色を帯びた情趣豊かな町々と歴史的建造物が、ともに山紫水明の自然に包まれて「重ね」（重層）と「合わせ」（対比）の模様を描いている融和の姿こそ、日本にも、また世界にも類を見ない京都らしい歴史的風致である。

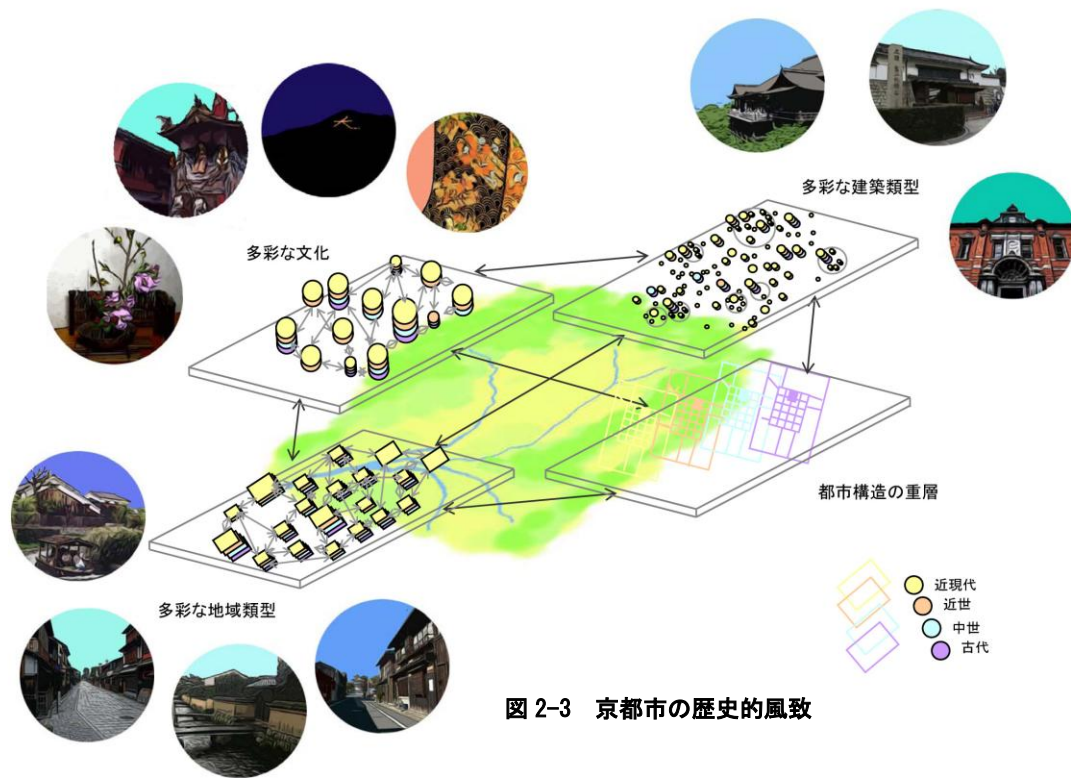


図 2-3 京都市の歴史的風致

旧 (P59)

けあい、連携・協働して創りあげた町（地縁生活共同体）であった。そしてまちづくりも、住民と町が主体となって推進し、統一感のある京町家とその町並みを形成した。コミュニティ主体のまちづくりは、近代における日本最初の小学校建設や、現代のまちづくり、京町家再生の活動などへ、**連続**と受け継がれ、これもまた京都の伝統となっている。

このように京都の町々では、1200年をこえる長い歴史に培われた多彩な文化が歴史的風致の背景となり、日々の暮らしや生業などの営みをとおして京都にしかみられない品格と風情を醸し出している。

それぞれの時代の特色を帯びた情趣豊かな町々と歴史的建造物が、ともに山紫水明の自然に包まれて「重ね」（重層）と「合わせ」（対比）の模様を描いている融和の姿こそ、日本にも、また世界にも類を見ない京都らしい歴史的風致である。

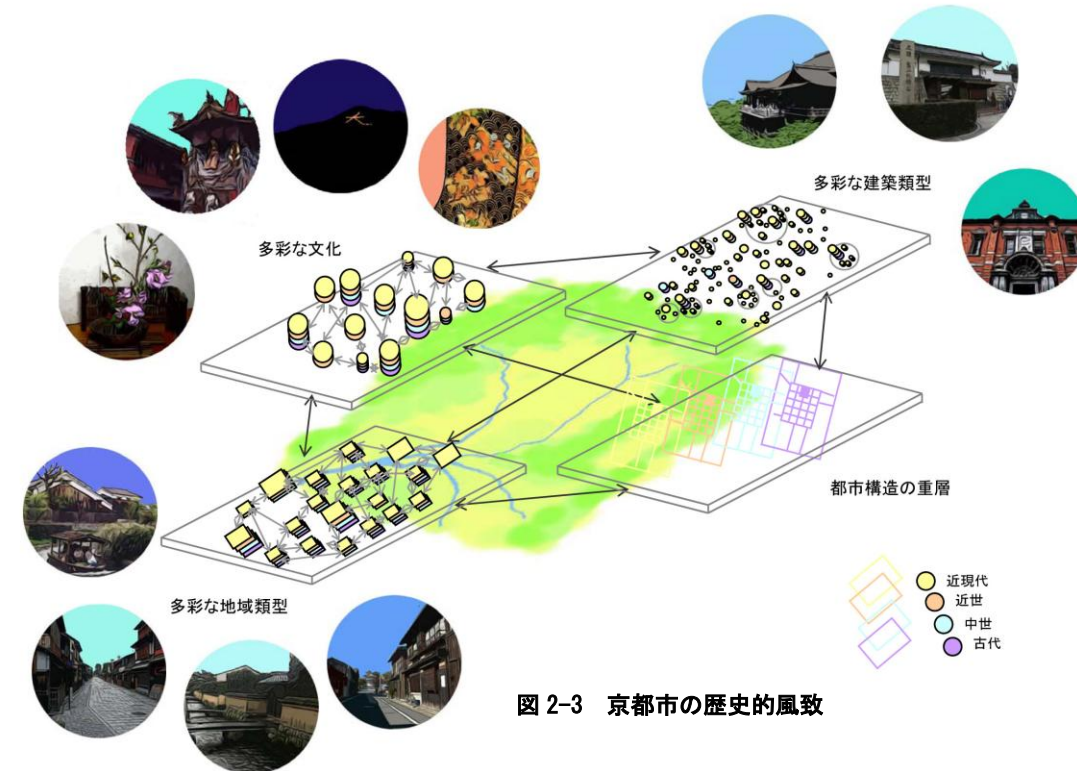


図 2-3 京都市の歴史的風致

新 (P61)	旧 (P61)
<p data-bbox="62 216 433 247">—祈りと信仰のまち京都—</p> <p data-bbox="83 260 284 291">(1) 本山と聖地</p> <p data-bbox="112 304 1130 611">京都は、延暦13年(794)の平安遷都より、明治になって東京遷都が行われるまでの間、首都機能を有していたため、仏教の各宗派の総本山や大本山が多く、寺格が高く威厳にみち、荘厳かつ壮麗な寺観を誇ってきた。清水寺や教王護国寺(通称、東寺)、本願寺(通称、西本願寺)、天龍寺などの世界遺産をはじめとして、南禅寺や知恩院などがその代表として知られている。他にも、「西国三十三所」に代表されるような霊場などもあり、京都はそれらの聖地を目指して来訪する多くの人々を迎えてきた。</p> <p data-bbox="112 623 1130 793">また、古来より京都に存在する上賀茂神社や下鴨神社、全国の多くの稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社など、日本を代表する神社が多く存在する。これらの神社は、「神山(こうやま)」や「糺(ただす)の森」といった、人々の信仰の対象や社叢としての豊かな自然環境とともに、古くから人々の信仰を集めてきた。</p> <p data-bbox="112 806 1130 884">これらの本山などの聖地への参詣は、名所見物も兼ねており、「宗教の総本山」としての機能を歴史的に培ってきた京都の歴史を示す一つの側面と言える。</p> <p data-bbox="112 896 1130 974">ここでは、京都が持つ「宗教の総本山」としての位置付けによって形成されている歴史的風致について、その背景と、代表的な例を示していく。</p> <p data-bbox="112 1035 228 1066">ア 背景</p> <p data-bbox="112 1100 1130 1430">幕藩体制下に成立した檀家制度とそれを受けた^{しゅうもんあらため}宗門改は、当時の日本の人々のほぼ全てを仏教徒と化した。それらの人々が信仰する本山のあるところが京都であった。さらに、常日頃は拝むことのできない秘仏として、本尊や^{じゅうほう}仕宝の開帳が行われるようになり、人々がこれに参詣するという制度が定着していき、「本山まいり」に拍車をかけた。これにより、東西本願寺をはじめ諸本山の近辺や、街道筋の誓願寺周辺、清水寺に連なる寺院付近には、旅人のための宿が建ち並ぶようになった。</p> <p data-bbox="112 1442 1130 1703">また、「巡礼」という信仰があり、最も歴史のあるものに「西国三十三所観音霊場」と呼ばれる、近畿2府4県他に点在する観音霊場を巡るものがある。そのうち京都には番外を含めて8箇所があり、多くの善男善女が訪れた。これになぞらえて、近世から盛んになった「洛陽三十三所観音」や「弁才天まいり」などもあり、近世に入って成立した「四十八願寺」は、名釈迦、名薬師、名弥陀、名不動、名地藏などを巡るものとして、18世紀ごろから頻繁に行われた信仰である。</p> <p data-bbox="112 1715 1130 1885">京都市内には、平安遷都より形成されてきた名所や旧跡が数多くあり、また四季折々の自然を楽しむことができる多くの景勝地があったこともあり、「都名所図会」等の出版によって、京都への旅に多くの人々を駆り立て、本山まいりや巡礼は、名所見物という娯楽を兼ねた信仰の旅として定着していった。</p>	<p data-bbox="1501 216 1872 247">—祈りと信仰のまち京都—</p> <p data-bbox="1522 260 1724 291">(1) 本山と聖地</p> <p data-bbox="1552 304 2570 611">京都は、延暦13年(794)の平安遷都より、明治になって東京遷都が行われるまでの間、首都機能を有していたため、仏教の各宗派の総本山や大本山が多く、寺格が高く威厳にみち、荘厳かつ壮麗な寺観を誇ってきた。清水寺や教王護国寺(通称、東寺)、本願寺(通称、西本願寺)、天龍寺などの世界遺産をはじめとして、南禅寺や知恩院などがその代表として知られている。他にも、「西国三十三所」に代表されるような霊場などもあり、京都はそれらの聖地を目指して来訪する多くの人々を迎えてきた。</p> <p data-bbox="1552 623 2570 793">また、古来より京都に存在する上賀茂神社や下鴨神社、全国の多くの稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社など、日本を代表する神社が多く存在する。これらの神社は、「神山(こうやま)」や「糺(ただす)の森」といった、人々の信仰の対象や社叢としての豊かな自然環境とともに、古くから人々の信仰を集めてきた。</p> <p data-bbox="1552 806 2570 884">これらの本山などの聖地への参詣は、名所見物も兼ねており、「宗教の総本山」としての機能を歴史的に培ってきた京都の歴史を示す一つの側面と言える。</p> <p data-bbox="1552 896 2570 974">ここでは、京都が持つ「宗教の総本山」としての位置付けによって形成されている歴史的風致について、その背景と、代表的な例を示していく。</p> <p data-bbox="1552 1035 1668 1066">ア 背景</p> <p data-bbox="1552 1079 2570 1339">幕藩体制下に成立した檀家制度とそれを受けた宗門改は、当時の日本の人々のほぼ全てを仏教徒と化した。それらの人々が信仰する本山のあるところが京都であった。さらに、常日頃は拝むことのできない秘仏として、本尊や仕宝の開帳が行われるようになり、人々がこれに参詣するという制度が定着していき、「本山まいり」に拍車をかけた。これにより、東西本願寺をはじめ諸本山の近辺や、街道筋の誓願寺周辺、清水寺に連なる寺院付近には、旅人のための宿が建ち並ぶようになった。</p> <p data-bbox="1552 1352 2570 1612">また、「巡礼」という信仰があり、最も歴史のあるものに「西国三十三所観音霊場」と呼ばれる、近畿2府4県他に点在する観音霊場を巡るものがある。そのうち京都には番外を含めて8箇所があり、多くの善男善女が訪れた。これになぞらえて、近世から盛んになった「洛陽三十三所観音」や「弁才天まいり」などもあり、近世に入って成立した「四十八願寺」は、名釈迦、名薬師、名弥陀、名不動、名地藏などを巡るものとして、18世紀ごろから頻繁に行われた信仰である。</p> <p data-bbox="1552 1625 2570 1795">京都市内には、平安遷都より形成されてきた名所や旧跡が数多くあり、また四季折々の自然を楽しむことができる多くの景勝地があったこともあり、「都名所図会」等の出版によって、京都への旅に多くの人々を駆り立て、本山まいりや巡礼は、名所見物という娯楽を兼ねた信仰の旅として定着していった。</p> <p data-bbox="1552 1856 1724 1887">イ 具体事例</p>

新 (P62)

(7) 本願寺への本山まいりと本願寺界限

東西本願寺への「本山まいり」は江戸時代から行われており、現在でも両本願寺は「本山まいり」の盛んな寺院として有名である。

特に^{ほうおんこう}報恩講^{みしよく}（御正忌報恩講）は、東西本願寺で行われる年中行事の中でも最も重要で荘厳な法要である。報恩講とは、浄土真宗の宗祖親鸞の年忌法要で、没後33年後の永仁2年（1294）に、本願寺三世覚如が「報恩講式」を^{せんじゆつ}撰述したことを起源とし、それより現在に至るまでもっとも重要な法会として、本山及び末寺で厳修されている。東本願寺（真宗大谷派本山）では11月21日～28日、西本願寺（浄土真宗本願寺派本山）では1月9日～16日の間に行われ、東西本願寺やその界限では、溢れんばかりの参拝者を迎える。

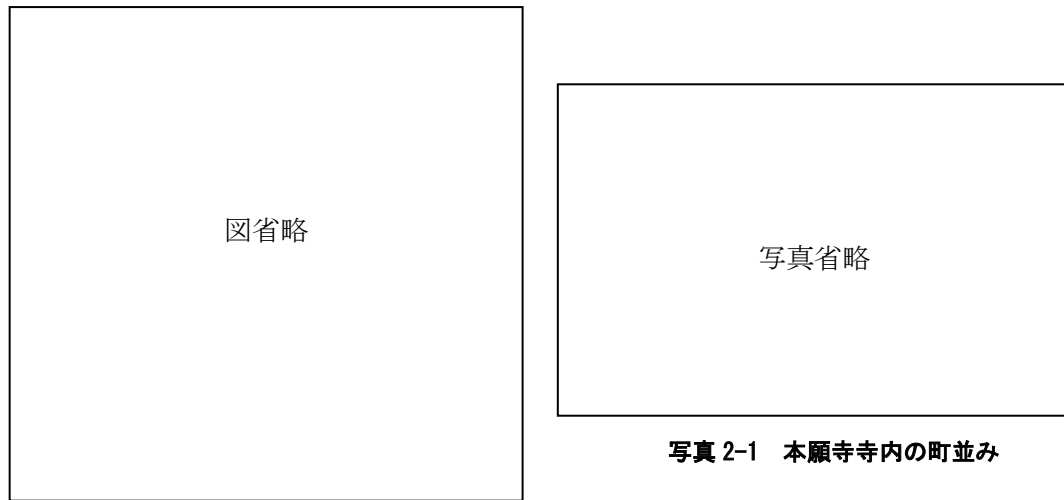


図 2-4 本願寺と本願寺界限

天正19年（1591）、豊臣秀吉の命により京都六条堀川へ本願寺が移転し、周辺には、坊官や商工業者が移住し、寺内町（西寺内）の町並みが形成されていた。なお、本願寺の歴史は、弘長2年（1262）に没した親鸞の遺骨を改葬し廟堂を建立したことから始まる。その後、豊臣秀吉に保護され、現在の地に移転するまで、いくつかの地を巡った。

慶長7年（1602）、徳川家康により烏丸七条の地を与えられ、東本願寺が建立され、西本願寺、東本願寺に分派することになった。また、寛永18年（1641）の幕府の寄進によって東本願寺寺内町（東寺内）が形成され、西本願寺寺内町（西寺内）とともに寺内町として発展していった。

この界限には、諸国から参詣する多くの信者のために、古くから多数の宿が設けられており、現在でも旅館が多数集まった町並みの姿を見せている。また、本願寺の寺内町である特徴として、仏具（仏壇、法衣、数珠、表具）を扱う見世造

旧 (P62)

(7) 本願寺への本山まいりと本願寺界限

東西本願寺への「本山まいり」は江戸時代から行われており、現在でも両本願寺は「本山まいり」の盛んな寺院として有名である。

特に^{ほうおんこう}報恩講^{みしよく}（御正忌報恩講）は、東西本願寺で行われる年中行事の中でも最も重要で荘厳な法要である。報恩講とは、浄土真宗の宗祖親鸞の年忌法要で、没後33年後の永仁2年（1294）に、本願寺三世覚如が「報恩講式」を撰述したことを起源とし、それより現在に至るまでもっとも重要な法会として、本山及び末寺で厳修されている。東本願寺（真宗大谷派本山）では11月21日～28日、西本願寺（浄土真宗本願寺派本山）では1月9日～16日の間に行われ、東西本願寺やその界限では、溢れんばかりの参拝者を迎える。

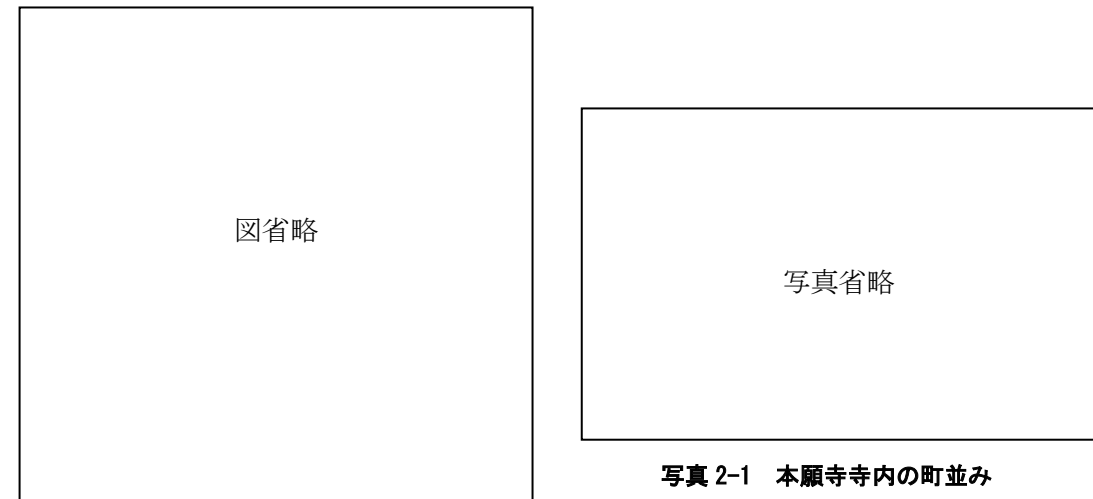


図 2-4 本願寺と本願寺界限

天正19年（1591）、豊臣秀吉の命により京都六条堀川へ本願寺が移転し、周辺には、坊官や商工業者が移住し、寺内町（西寺内）の町並みが形成されていた。なお、本願寺の歴史は、弘長2年（1262）に没した親鸞の遺骨を改葬し廟堂を建立したことから始まる。その後、豊臣秀吉に保護され、現在の地に移転するまで、いくつかの地を巡った。

慶長7年（1602）、徳川家康により烏丸七条の地を与えられ、東本願寺が建立され、西本願寺、東本願寺に分派することになった。また、寛永18年（1641）の幕府の寄進によって東本願寺寺内町（東寺内）が形成され、西本願寺寺内町（西寺内）とともに寺内町として発展していった。

この界限には、諸国から参詣する多くの信者のために、古くから多数の宿が設けられており、現在でも旅館が多数集まった町並みの姿を見せている。また、本願寺の寺内町である特徴として、仏具（仏壇、法衣、数珠、表具）を扱う見世造

新 (P63)

りの商店も多数集まっており、天保元年（1830）創業の若林仏具店（国・登録有形文化財）などは、昭和2年（1927）の建造物を今に残しており、その代表的なものといえる。京仏具は京都の伝統産業の一つであるが、同地区はその中心となっている。通りに並ぶ仏具店の店頭には、きらびやかな仏具や数珠等が並べられ、お香の香りが界わいに漂っており、寺内町の雰囲気より一層醸し出している。

仏具店や旅館は同じ業種が集中することによって、寺院を中心とした独特の町並み景観を形成している。他にも、仕舞屋造の家々や中小寺院の表構え、大寺院の薨などにより形成された町並みは地区に固有のもので、その中で僧侶や人々は日々の生活を行い、これらの寺内町の営みによって醸し出される風情の中で、訪れる本山まいるの信者達は、仏具店等の歴史的な町並みを行き交いながら、本願寺の雄大な建造物への参拝を通じて、信仰を深めていく。

(イ) 八坂神社から清水寺へ

東山山麓の八坂神社や法観寺、清水寺は、古くから信仰の地として、そして都を代表する風光明媚な名所として、数多くの参詣客や見物人を集めてきた。今も国内外からたくさんの老若男女が訪れる京都第一の名所である。



図 2-5 八坂神社から清水寺へ

そのなかで、人々から親しみを込めて「祇園さん」と呼ばれている八坂神社は、創立年代及び由緒には諸説あるが、社伝では高麗より

来朝した八坂氏祖が、齊明天皇2年（656）に、新羅国牛頭山に坐す素戔鳴尊を祀ったのが始まりとされている。盛夏に行われる祇園祭で広く知られているが、後の「京都の祭礼」でも示すとおり、大晦日から元旦にかけて境内で焚かれるおけら火を火縄に移して家に持ち帰りその火で雑煮を炊いて無病息災を祈る「おけらまいり」でも知られている。

また、境内に続く円山公園（国指定名勝）は明治6年（1873）に^{ぎおんかんしんいん}祇園感神院の坊舎の跡地、円山一帯の寺社境内地、安養寺六坊の地などを公園地に指定したことに始まり、枝垂桜が有名な桜の名所である。この枝垂桜は、江戸時代に宝寿院に植えられたもので、廃寺となってからも祇園の夜桜として有名であった。現在の桜は二代目である。

旧 (P63)

りの商店も多数集まっており、天保元年（1830）創業の若林仏具店（国・登録有形文化財）などは、昭和2年（1927）の建造物を今に残しており、その代表的なものといえる。京仏具は京都の伝統産業の一つであるが、同地区はその中心となっている。通りに並ぶ仏具店の店頭には、きらびやかな仏具や数珠等が並べられ、お香の香りが界わいに漂っており、寺内町の雰囲気より一層醸し出している。

仏具店や旅館は同じ業種が集中することによって、寺院を中心とした独特の町並み景観を形成している。他にも、仕舞屋造の家々や中小寺院の表構え、大寺院の薨などにより形成された町並みは地区に固有のもので、その中で僧侶や人々は日々の生活を行い、これらの寺内町の営みによって醸し出される風情の中で、訪れる本山まいるの信者達は、仏具店等の歴史的な町並みを行き交いながら、本願寺の雄大な建造物への参拝を通じて、信仰を深めていく。

(イ) 八坂神社から清水寺へ

東山山麓の八坂神社や法観寺、清水寺は、古くから信仰の地として、そして都を代表する風光明媚な名所として、数多くの参詣客や見物人を集めてきた。今も国内外からたくさんの老若男女が訪れる京都第一の名所である。

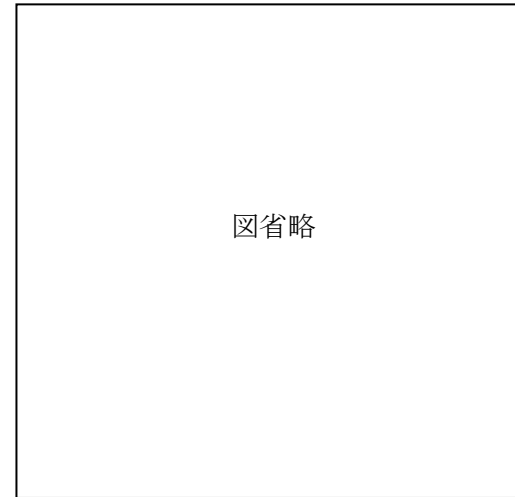


図 2-5 八坂神社から清水寺へ

そのなかで、人々から親しみを込めて「祇園さん」と呼ばれている八坂神社は、創立年代及び由緒には諸説あるが、社伝では高麗より

来朝した八坂氏祖が、齊明天皇2年（656）に、新羅国牛頭山に坐す素戔鳴尊を祀ったのが始まりとされている。盛夏に行われる祇園祭で広く知られているが、後の「京都の祭礼」でも示すとおり、大晦日から元旦にかけて境内で焚かれるおけら火を火縄に移して家に持ち帰りその火で雑煮を炊いて無病息災を祈る「おけらまいり」でも知られている。

また、境内に続く円山公園（国指定名勝）は明治6年に祇園感神院の坊舎の跡地、円山一帯の寺社境内地、安養寺六坊の地などを公園地に指定したことに始まり、枝垂桜が有名な桜の名所である。この枝垂桜は、江戸時代に宝寿院に植えられたもので、廃寺となってからも祇園の夜桜として有名であった。現在の桜は二代目である。

新 (P64)

八坂の塔で知られる法観寺は、平安京以前の創建と伝えられる寺院で、寺伝では、聖徳太子が五重塔を建て仏舎利を納めて法観寺と号したという。創建には渡来系豪族の^{やさかのみやつこ}八坂造が関わったという。

町家の屋根越しから見え隠れする八坂の塔の力強い姿は、この地域のシンボルとして重要な歴史的風致の構成要素となっている。

^{けんがいつくり}懸崖造の本堂（国宝）で有名な清水寺は、「清水寺縁起絵巻」によると、鹿狩りにきた坂上田村麻呂が、この地で修行中の延鎮に殺生を戒められ、延暦17年（798）二人で千手観音の像をつくり、一堂を創建したのが始まりとされる。幾度もの焼失と再建を繰り返したため、室町後期に遡る仁王門、馬駐が最古の遺構である。現在の伽藍は、寛永期に徳川家光の援助により再建された本堂、三重塔などが中心となっている。北法相宗の本山であり、また、観音信仰の盛隆にともない、近世には西国三十三所札所となった。線香の煙が漂う本堂の中で手を合わせる巡礼者も多い。他にもこの地域には、名所や旧跡が数多く存在する。

清水寺の表参道は、昔から清水坂とされており、都からの参詣者は、五条通（現松原通）から五条橋を渡り、清水坂を上る道であった。近世になると、八坂神社から産寧坂に至る参詣道が、東山めぐりの主要な道の一つとなり、道の賑わいは、洛中洛外図や東山遊楽図にも取り上げられた。その後二年坂が登場し、現在の参詣道へとつながっていった。これらの参詣道には茶屋などが多く立ち並んでいたが、天保14年（1843）の記録「諸商売人別御改書」には、清水門前町において茶碗商売や茶店、人形屋などがあったことが示されており、この頃既に参詣客目当ての土産屋などが形成されていた様子が分かる。



写真 2-2 産寧坂の町並み

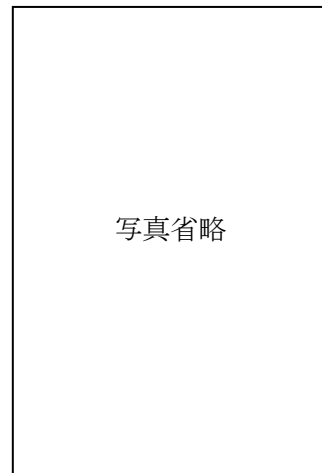


写真 2-3 八坂の塔

現在、この参詣道に当たる産寧坂や二年坂付近は、江戸時代から昭和初期までの伝統的な建造物が立ち並び、歴史的な町並みを形成している。それらの伝統的

旧 (P64)

八坂の塔で知られる法観寺は、平安京以前の創建と伝えられる寺院で、寺伝では、聖徳太子が五重塔を建て仏舎利を納めて法観寺と号したという。創建には渡来系豪族の八坂造（やさかのみやつこ）が関わったという。

町家の屋根越しから見え隠れする八坂の塔の力強い姿は、この地域のシンボルとして重要な歴史的風致の構成要素となっている。

懸崖造の本堂（国宝）で有名な清水寺は、「清水寺縁起絵巻」によると、鹿狩りにきた坂上田村麻呂が、この地で修行中の延鎮に殺生を戒められ、延暦17年（798）二人で千手観音の像をつくり、一堂を創建したのが始まりとされる。幾度もの焼失と再建を繰り返したため、室町後期に遡る仁王門、馬駐が最古の遺構である。現在の伽藍は、寛永期に徳川家光の援助により再建された本堂、三重塔などが中心となっている。北法相宗の本山であり、また、観音信仰の盛隆にともない、近世には西国三十三所札所となった。線香の煙が漂う本堂の中で手を合わせる巡礼者も多い。他にもこの地域には、名所や旧跡が数多く存在する。

清水寺の表参道は、昔から清水坂とされており、都からの参詣者は、五条通（現松原通）から五条橋を渡り、清水坂を上る道であった。近世になると、八坂神社から産寧坂に至る参詣道が、東山めぐりの主要な道の一つとなり、道の賑わいは、洛中洛外図や東山遊楽図にも取り上げられた。その後二年坂が登場し、現在の参詣道へとつながっていった。これらの参詣道には茶屋などが多く立ち並んでいたが、天保14年（1843）の記録「諸商売人別御改書」には、清水門前町において茶碗商売や茶店、人形屋などがあったことが示されており、この頃既に参詣客目当ての土産屋などが形成されていた様子が分かる。



写真 2-2 産寧坂の町並み

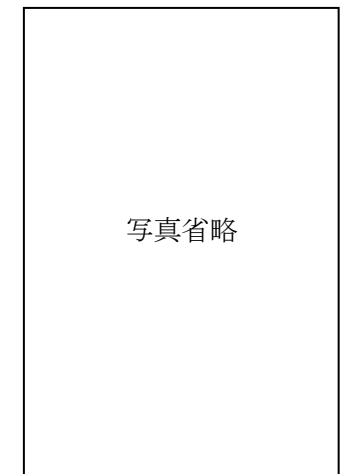


写真 2-3 八坂の塔

現在、この参詣道に当たる産寧坂や二年坂付近は、江戸時代から昭和初期までの伝統的な建造物が立ち並び、歴史的な町並みを形成している。それらの伝統的な建築物の店先で、京人形や清水焼等の伝統工芸品を販売する土産物の店舗が営まれている。中には、今なお店の奥で伝統工芸品を生産しているところもある。

新 (P65)	旧 (P65)
<p>な建築物の店先で、京人形や清水焼等の伝統工芸品を販売する土産物の店舗が営まれている。中には、今なお店の奥で伝統工芸品を生産しているところもある。</p> <p>このように、一帯は寺社をはじめとしたいくつもの名所があり、それをつなぐように参詣道が形成されている。そこには、土産物の店舗の店先に工芸品が並べられている風景があり、歴史的な町並みに彩りをもたらし、参詣道を行き交う参詣者や見物客等の人々に、古都の風情と心の安らぎを感じさせている。</p> <p>(ウ) 下鴨神社と糺の森</p> <p>下鴨神社は、鴨川と高野川にはさまれた、二つの川が合流する場所にある。上賀茂神社とともに、この地を占有していた古代の賀茂氏の氏神を祀る神社であり、両社をもって一社のような扱いをされてきた。わが国最古の神社の一つである。</p> <p>糺の森は、下鴨神社の境内にあり、社叢としての役割を果たし、自然崇拜の場となっている。下鴨神社本殿から南へ、河合神社に至る境内の12ヘクタールにおよぶ森で、古代山城北部が森林地帯であった頃の植生と同じ生態が保たれている貴重な森林であり、国の史跡（賀茂御祖神社境内）に指定され保護されている。樹林の間には奈良の小川、瀬見の小川、泉川、御手洗川の清流があって四季を織り成し、源氏物語、枕草子をはじめ数々の物語や詩歌管弦にうたわれている。そして新緑の5月には、糺の森の豊かな森は両賀茂社の祭事である葵祭の舞台となる。葵祭に先立ち行われる流鏝馬神事や御蔭祭、葵祭当日の路頭の儀では、豊かな新緑の中、ゆるゆると牛車が進む。他にもここでは様々な祭事が行われる。</p> <p>また、糺の森は、神聖な信仰の場であると同時に、古くから市民の遊興の場でもあり、現在も日常の生活と密接に関係し、市民に親しまれる憩いの場でもあり、「茶会」や「納涼」などが行われていた。</p> <p>糺の森の御手洗川や泉川での納涼は江戸時代から有名で、寛政11年（1799）に発行された「都林泉名勝図会」にもその様子が描かれており、また明治期の納涼茶会の様子が記録の中に残されている。</p> <p>その後、時代の経過とともに、市民の行事は一時衰退していたが、それを平成3年より約100年ぶりに再興したのが、「螢火の茶会」である。</p> <p>糺の森に螢が飛び交う雅な恒例行事、「螢火の茶会」は、初夏の夕暮れの六月初旬に開催される。楼門前には「糺の森納涼市」として、京の老舗が昼過ぎより開店し、所狭しと軒を並べながら20店舗余りが出店される。夕方になると、中門前において奉告祭が斎行され、橋殿・細殿にて「茶席」も開かれる。午後6時頃には、神服殿において十二単の着付けと王朝舞や箏曲の演奏が行われ、午後8時頃には、約600匹の螢が大籠より御手洗川に放たれる。</p> <p>かつては清流に螢の姿がたくさん見られたようだが、その後の時代の変化により茶会も行われなくなり、螢の姿もなくなった。しかし、地元の農会や氏子の方々の協力で泉川流域の清掃を繰り返し、螢の幼虫を放ったところ、糺の森のあちらこちらに螢火の飛び交うのが見られるようになり、「螢火の茶会」として再興することができるようになった。</p>	<p>このように、一帯は寺社をはじめとしたいくつもの名所があり、それをつなぐように参詣道が形成されている。そこには、土産物の店舗の店先に工芸品が並べられている風景があり、歴史的な町並みに彩りをもたらし、参詣道を行き交う参詣者や見物客等の人々に、古都の風情と心の安らぎを感じさせている。</p> <p>(ウ) 下鴨神社と糺の森</p> <p>下鴨神社は、鴨川と高野川にはさまれた、二つの川が合流する場所にある。上賀茂神社とともに、この地を占有していた古代の賀茂氏の氏神を祀る神社であり、両社をもって一社のような扱いをされてきた。わが国最古の神社の一つである。</p> <p>糺の森は、下鴨神社の境内にあり、社叢としての役割を果たし、自然崇拜の場となっている。下鴨神社本殿から南へ、河合神社に至る境内の12ヘクタールにおよぶ森で、古代山城北部が森林地帯であった頃の植生と同じ生態が保たれている貴重な森林であり、国の史跡（賀茂御祖神社境内）に指定され保護されている。樹林の間には奈良の小川、瀬見の小川、泉川、御手洗川の清流があって四季を織り成し、源氏物語、枕草子をはじめ数々の物語や詩歌管弦にうたわれている。そして新緑の5月には、糺の森の豊かな森は両賀茂社の祭事である葵祭の舞台となる。葵祭に先立ち行われる流鏝馬神事や御蔭祭、葵祭当日の路頭の儀では、豊かな新緑の中、ゆるゆると牛車が進む。他にもここでは様々な祭事が行われる。</p> <p>また、糺の森は、神聖な信仰の場であると同時に、古くから市民の遊興の場でもあり、現在も日常の生活と密接に関係し、市民に親しまれる憩いの場でもあり、「茶会」や「納涼」などが行われていた。</p> <p>糺の森の御手洗川や泉川での納涼は江戸時代から有名で、寛政11年（1799）に発行された「都林泉名勝図会」にもその様子が描かれており、また明治期の納涼茶会の様子が記録の中に残されている。</p> <p>その後、時代の経過とともに、市民の行事は一時衰退していたが、それを平成3年より約100年ぶりに再興したのが、「螢火の茶会」である。</p> <p>糺の森に螢が飛び交う雅な恒例行事、「螢火の茶会」は、初夏の夕暮れの六月初旬に開催される。楼門前には「糺の森納涼市」として、京の老舗が昼過ぎより開店し、所狭しと軒を並べながら20店舗余りが出店される。夕方になると、中門前において奉告祭が斎行され、橋殿・細殿にて「茶席」も開かれる。午後6時頃には、神服殿において十二単の着付けと王朝舞や箏曲の演奏が行われ、午後8時頃には、約600匹の螢が大籠より御手洗川に放たれる。</p> <p>かつては清流に螢の姿がたくさん見られたようだが、その後の時代の変化により茶会も行われなくなり、螢の姿もなくなった。しかし、地元の農会や氏子の方々の協力で泉川流域の清掃を繰り返し、螢の幼虫を放ったところ、糺の森のあちらこちらに螢火の飛び交うのが見られるようになり、「螢火の茶会」として再興することができるようになった。</p>

新 (P67)

また、納涼市についても、江戸時代から、京の夏の避暑地として糺の森を流れる川の辺に茶店が建ち並び、庶民の納涼場として船を浮かべた茶会のほか、能（糺能）や相撲の催しがあった。その後の時代の変化により、納涼市も一時衰退したが、懐かしい風情が「糺の森納涼市」として再興された。

この他にも「糺の森」では、葵祭、御手洗祭、成人祭など、その豊かな自然を舞台とした年中行事が行われる。また、日常においても、森林浴や子供の水遊び、早朝の散歩など、市民の生活と密着する活動が行われている。さらに、糺の森は、神官の他にも、人々の活動によって守られていることが、「蛍火の茶会」からも分かる。

これまでに示したような、信仰と歴史に培われた様々な活動は、古くから人々の信仰の対象となっている糺の森の、今なお「崇拜」される豊かな自然環境、木漏れ日の柔らかい光や澄んだ空気、小川のせせらぎの音色など自然の美しさのなか、下鴨神社を訪れる人々は、原生林の息づく糺の森を歩きつつ、信仰と歴史の深さを感じるのである。

ウ 本山と聖地に見る歴史的風致

このように京都において行われてきた「本山まいり」や「巡礼」は、今なお人々の心のよりどころと安らぎを求める活動として残り、その核となる寺社や名所とその周囲に形成されてきた門前町の営み、信仰の対象として守られてきた森林とそこで行われる人々の活動がそれぞれ固有の世界を形成している。

そして、それぞれの地域は名所見物を兼ねた信仰の旅により、都市構造として結びつき、また、参詣という営みを行う人や修行のため京都を訪れる人々の営みが宗教関連の工芸品をはじめ、参詣客が求める伝統工芸品の販売、それらを作る人々の生業に結びつき、様々な道をたどって京都のまち全体に還元されるといういわゆる宗教都市としての様相を形成している。

今日でも京都の歴史的な町並みのどこかで、どこからともなく現れた^{たくはつそう}托鉢僧の読経の声を聞くことができ、行き交う袈裟姿のお坊さんを見かけることができる。また、門前で造られている伝統工芸品の中に、京都で培われてきた伝統の技を見る。

信仰の場である寺院やそれを取り巻く地域、そしてこれらに関連する伝統産業が、京都の歴史の中で重要な地位をしめ、現在も文化の担い手の一つとして京都が代表的な宗教都市としての位置づけを持つ都市であることを日々感じる事ができる。

(2) 祈りの場

京都には、(1)で示したような寺社の他にも商売繁盛のご利益で有名な毘沙門堂や神経痛・腰痛^{へいゆ}平癒の善峰寺、方除けの城南宮をはじめ、^{かんしゃでんしゃ}冠者殿社、大報恩寺（千本釈迦堂）などのように、古くから市民生活と密接な関係を持ち、町の人々の信仰を集めた庶民の寺社ともいえる地域の寺社がある。ここでは、これらの生活に

旧 (P67)

また、納涼市についても、江戸時代から、京の夏の避暑地として糺の森を流れる川の辺に茶店が建ち並び、庶民の納涼場として船を浮かべた茶会のほか、能（糺能）や相撲の催しがあった。その後の時代の変化により、納涼市も一時衰退したが、懐かしい風情が「糺の森納涼市」として再興された。

この他にも「糺の森」では、葵祭、御手洗祭、成人祭など、その豊かな自然を舞台とした年中行事が行われる。また、日常においても、森林浴や子供の水遊び、早朝の散歩など、市民の生活と密着する活動が行われている。さらに、糺の森は、神官の他にも、人々の活動によって守られていることが、「蛍火の茶会」からも分かる。

これまでに示したような、信仰と歴史に培われた様々な活動は、古くから人々の信仰の対象となっている糺の森の、今なお「崇拜」される豊かな自然環境、木漏れ日の柔らかい光や澄んだ空気、小川のせせらぎの音色など自然の美しさのなか、下鴨神社を訪れる人々は、原生林の息づく糺の森を歩きつつ、信仰と歴史の深さを感じるのである。

ウ 本山と聖地に見る歴史的風致

このように京都において行われてきた「本山まいり」や「巡礼」は、今なお人々の心のよりどころと安らぎを求める活動として残り、その核となる寺社や名所とその周囲に形成されてきた門前町の営み、信仰の対象として守られてきた森林とそこで行われる人々の活動がそれぞれ固有の世界を形成している。

そして、それぞれの地域は名所見物を兼ねた信仰の旅により、都市構造として結びつき、また、参詣という営みを行う人や修行のため京都を訪れる人々の営みが宗教関連の工芸品をはじめ、参詣客が求める伝統工芸品の販売、それらを作る人々の生業に結びつき、様々な道をたどって京都のまち全体に還元されるといういわゆる宗教都市としての様相を形成している。

今日でも京都の歴史的な町並みのどこかで、どこからともなく現れた^{たくはつそう}托鉢僧の読経の声を聞くことができ、行き交う袈裟姿のお坊さんを見かけることができる。また、門前で造られている伝統工芸品の中に、京都で培われてきた伝統の技を見る。

信仰の場である寺院やそれを取り巻く地域、そしてこれらに関連する伝統産業が、京都の歴史の中で重要な地位をしめ、現在も文化の担い手の一つとして京都が代表的な宗教都市としての位置づけを持つ都市であることを日々感じる事ができる。

(2) 祈りの場

京都には、(1)で示したような寺社の他にも商売繁盛のご利益で有名な毘沙門堂

や神経痛・腰痛^{へいゆ}平癒の善峰寺、方除けの城南宮をはじめ、^{かんしゃでんしゃ}冠者殿社、大報恩寺（千本釈迦堂）などのように、古くから市民生活と密接な関係を持ち、町の人々の信仰を集めた庶民の寺社ともいえる地域の寺社がある。ここでは、これらの生活に

新 (P68)

溶け込んだ寺社で行われる信仰活動によって形成される歴史的風致を、生業や日々の暮らしという視点を例として示していく。

ア 具体事例



図 2-7 祈りの場(例示)

祇園祭の際に神輿が渡御し、^{かんこう}還幸まで留まる場所で知られる祇園八坂神社の御旅所の横に並んで、小さな祠が鎮座している。その祠が冠者殿社と言われ、商売の神様として信仰を集めてきた。かつては烏丸高辻にあった八坂神社大政所御旅所に鎮座していたが、天正年間に、万寿寺通り高倉で今は地名として残る官社殿町に遷され、さらに慶長年間に今の地に遷されたと言われている。

江戸時代には、陰暦10月20日に「誓文払い」とか「えびす講」と称し、商人や芸妓がここに参詣するのがならわしであったようで、近世の資料(日次紀事)に冠者殿が信仰を集めるに至ったわけが記されている。すなわち、「源頼朝の家臣であった土佐坊昌俊が頼朝の命を受け、義経成敗のため入京する。義経は土佐坊昌俊を招いて、何のための入京か問いただしたところ、頼朝の代参へ熊野詣の途中立ち寄ったと答え、嘘偽りのない証として熊野牛王の裏に誓文まで記して義経に渡した。しかしその夜、義経が滞在していた堀川御所に夜討ちをかけたところ、待ち構えていた義経にあえなく返り討ちにあった。」この土佐坊昌俊を祀ったのが冠者殿であ

旧 (P68)

溶け込んだ寺社で行われる信仰活動によって形成される歴史的風致を、生業や日々の暮らしという視点を例として示していく。

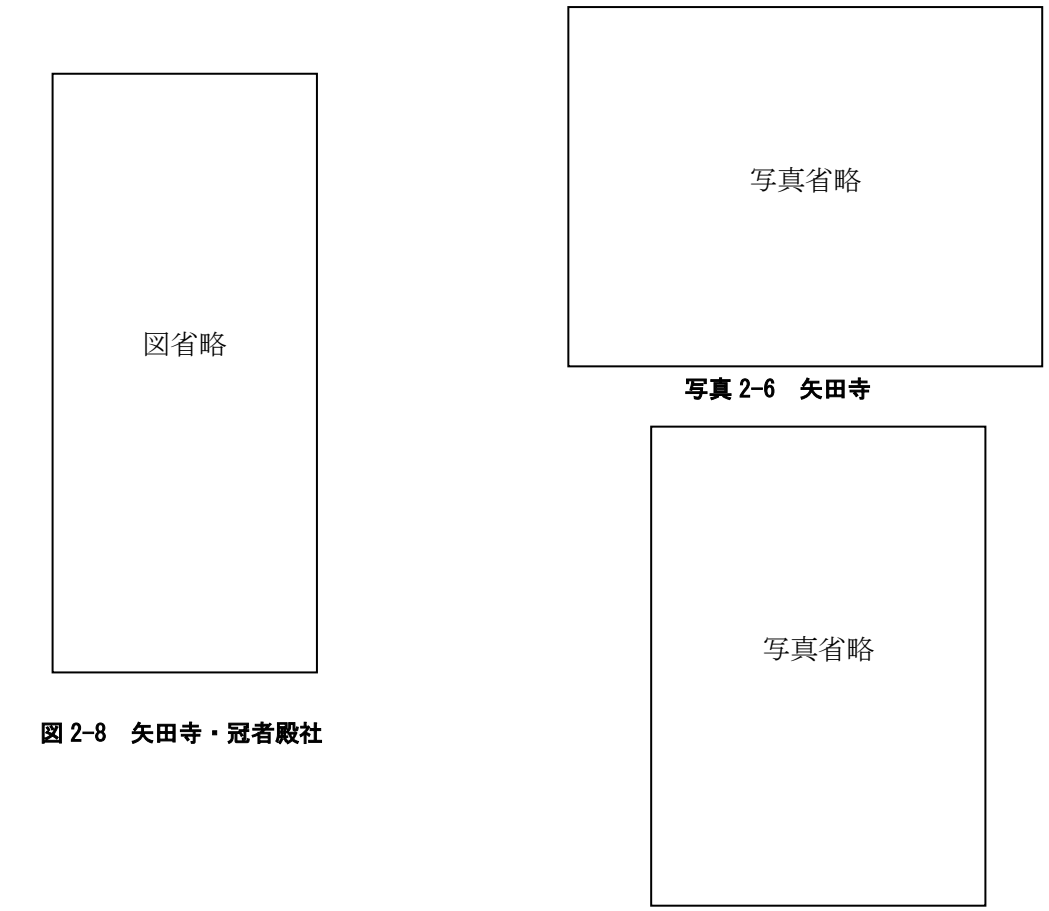
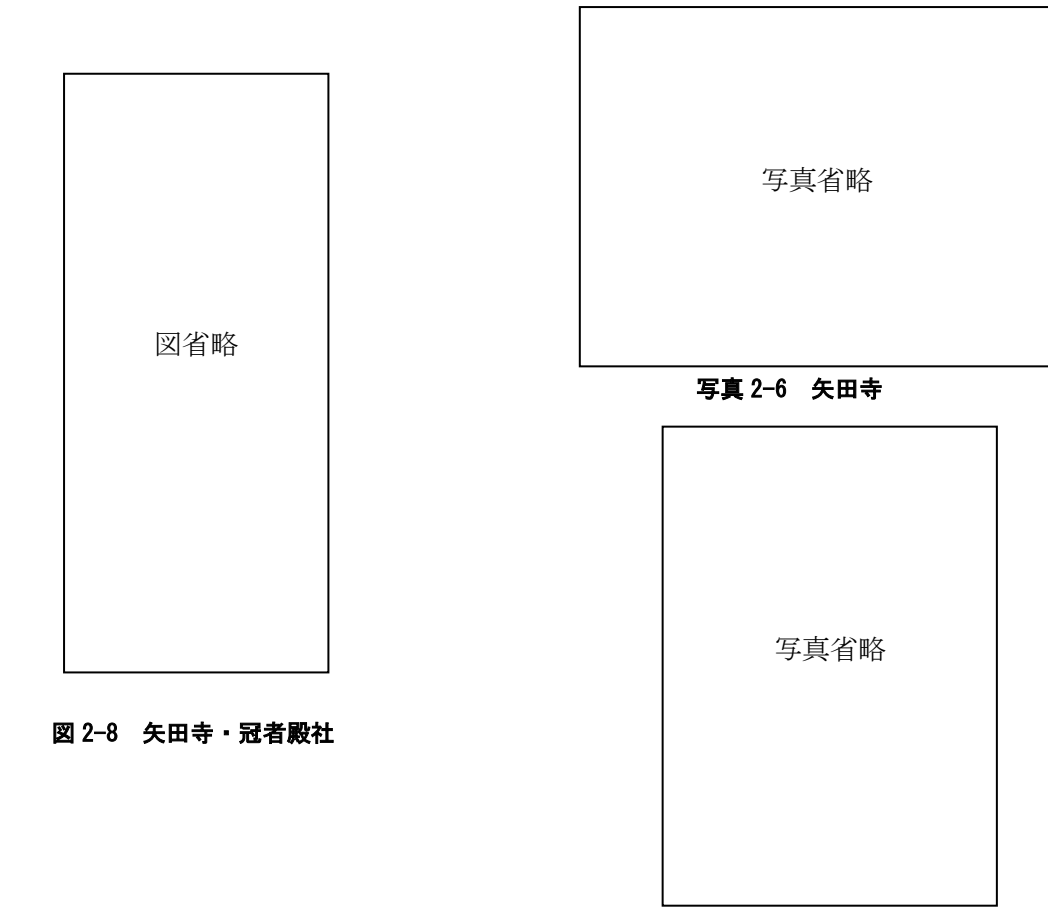
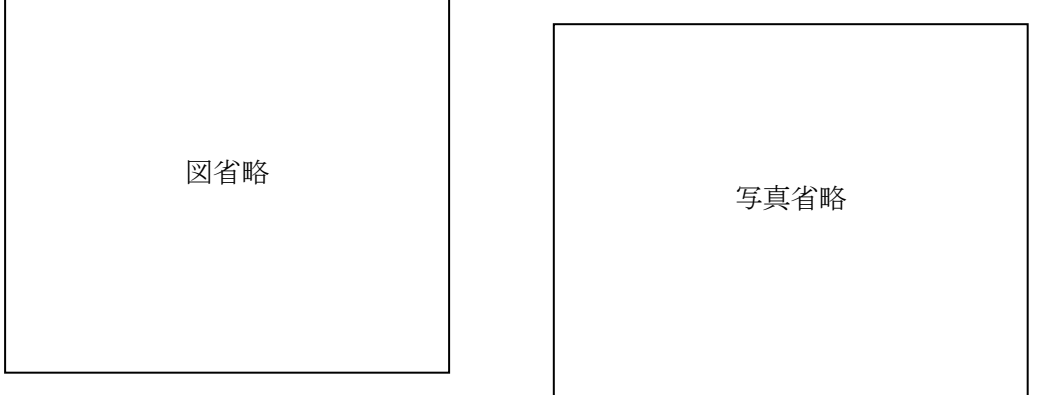
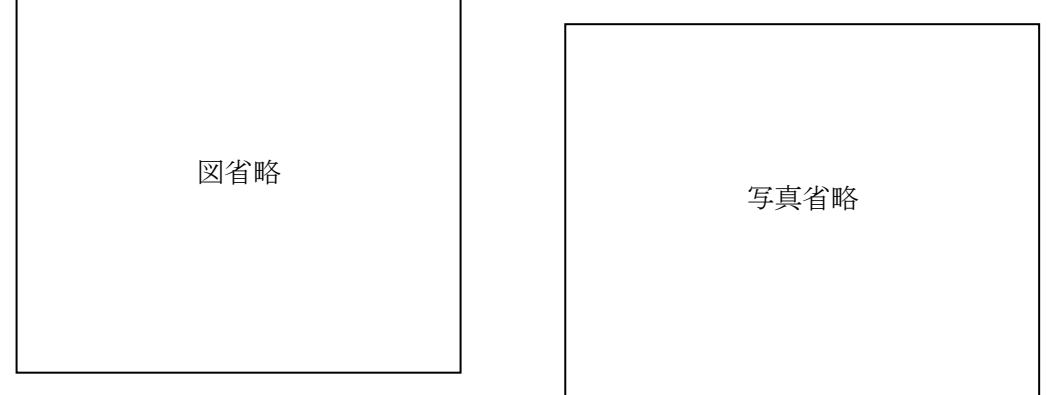
ア 具体事例



図 2-7 祈りの場(例示)

祇園祭の際に神輿が渡御し、還幸まで留まる場所で知られる祇園八坂神社の御旅所の横に並んで、小さな祠が鎮座している。その祠が冠者殿(「かんじゃでん」)社と言われ、商売の神様として信仰を集めてきた。かつては烏丸高辻にあった八坂神社大政所御旅所に鎮座していたが、天正年間に、万寿寺通り高倉で今は地名として残る官社殿町に遷され、さらに慶長年間に今の地に遷されたと言われている。

江戸時代には、陰暦10月20日に「誓文払い」とか「えびす講」と称し、商人や芸妓がここに参詣するのがならわしであったようで、近世の資料(日次紀事)に冠者殿が信仰を集めるに至ったわけが記されている。すなわち、「源頼朝の家臣であった土佐坊昌俊が頼朝の命を受け、義経成敗のため入京する。義経は土佐坊昌俊を招いて、何のための入京か問いただしたところ、頼朝の代参へ熊野詣の途中立ち寄ったと答え、嘘偽りのない証として熊野牛王の裏に誓文まで記して義経に渡した。しかしその夜、義経が滞在していた堀川御所に夜討ちをかけたところ、待ち構えていた義経にあえなく返り討ちにあった。」この土佐坊昌俊を祀ったのが冠者殿であ

新 (P70)	旧 (P70)
 <p>図 2-8 矢田寺・冠者殿社</p> <p>写真 2-6 矢田寺</p> <p>写真 2-7 冠者殿社</p>	 <p>図 2-8 矢田寺・冠者殿社</p> <p>写真 2-6 矢田寺</p> <p>写真 2-7 冠者殿社</p>
 <p>図 2-9 千本釈迦堂詳細</p> <p>写真 2-8 大報恩寺(千本釈迦堂)</p> <p>中京区の寺町通りや新京極通りには、いくつかの寺社が存在している。中京区寺町に位置する矢田寺もその一つであり、人々が気軽に訪れることができる。</p> <p>矢田寺は、紫陽花で有名な奈良県（大和郡山市）にある矢田寺の別院として、承和12年（845）満米上人と小野^{たかむら}篁により五条坊門に建立され、天正18年（1590）、豊臣秀吉の命により現在地へ移転した。</p>	 <p>図 2-9 千本釈迦堂詳細</p> <p>写真 2-8 大報恩寺(千本釈迦堂)</p> <p>中京区の寺町通りや新京極通りには、いくつかの寺社が存在している。中京区寺町に位置する矢田寺もその一つであり、人々が気軽に訪れることができる。</p> <p>矢田寺は、紫陽花で有名な奈良県（大和郡山市）にある矢田寺の別院として、承和12年（845）満米上人と小野^{たかむら}篁により五条坊門に建立され、天正18年（1590）、豊臣秀吉の命により現在地へ移転した。</p>

新 (P73)

様子が示されている。なお、ゑびす信仰の最たる象徴とも言える笹の歴史はさらに長く、現在から約400年程前の慶長年間に考案されたといわれている。

参拝の最後に忘れてはならないのが、念押しのお参りである。耳が御不自由な「ゑびすさん」に声が届くよう、本殿横の板を叩いて注意をひき、もう一度願いを込める。境内は、人々の喧騒とともに笛や太鼓のお囃子が流れ、拍手や参拝者がトントンと板を叩く音が混じりあい、活気に満ちた独特の空気に包まれる。

また、東映太秦映画村の女優さんによる宝恵かごに乗っての社参や福笹の授与、宮川町・祇園町の舞妓さんの奉仕による福笹や福もち授与の行事などもあり、新年を祝う雰囲気是一段と華やかに彩られる。四条通から恵美須神社までの参道には露店がずらりと立ち並び、伝統産業など中小企業の経営者が多い京都の1月の風物詩となっている。参詣する人々は、商売繁盛を祈願しつつ、一年無事に過ごせることを感じている。

b 節分祭・節分会

2月3日(4日の年も)、市内各寺社で節分行事が行われる。

節分は、春夏秋冬の節目のことであったが、特に新しい年を迎える意味をもつ立春の前日の儀礼は、大晦日に宮中でおこなわれた追儺の儀礼と結びつき、現在のような豆で鬼を追う形式に変化した。文武天皇の慶

雲3年(706)にはすでに行われていたという宮中の追儺は、方相氏が発する声と群臣の弓などで儺(疫鬼の意味)を追い払うものであった。平安時代末期になると方相氏の仮面や装束が異様であることから、鬼と取り違えられるようになった。節分に豆をまく行事は、京都では室町時代に始まり、「鬼は外」の唱え事も既に行われていた。

節分詣り発祥の社とされる左京区の吉田神社で行われる節分祭は、最も有名な節分行事の一つであり、吉田兼見により記された「兼見卿記」の元龜3年(1572)の記事の中に、記載を見ることができる。室町時代に始まったとされる疫神祭、追儺式、火焔祭などの祭事は、現在も古式にのっとり執行され、期間中50万人を超える参拝客で賑わう。

旧暦の節分に鯛と柊を門口に指し、年男が厄を避け、福よ来いと炒った豆を蒔く風習は江戸初期には一般の家で行われていることが文献に記載されている



図 2-11 節分祭の例 (吉田神社)

旧 (P73)

様子が示されている。なお、ゑびす信仰の最たる象徴とも言える笹の歴史はさらに長く、現在から約400年程前の慶長年間に考案されたといわれている。

参拝の最後に忘れてはならないのが、念押しのお参りである。耳が御不自由な「ゑびすさん」に声が届くよう、本殿横の板を叩いて注意をひき、もう一度願いを込める。境内は、人々の喧騒とともに笛や太鼓のお囃子が流れ、拍手や参拝者がトントンと板を叩く音が混じりあい、活気に満ちた独特の空気に包まれる。

また、東映太秦映画村の女優さんによる宝恵かごに乗っての社参や福笹の授与、宮川町・祇園町の舞妓さんの奉仕による福笹や福もち授与の行事などもあり、新年を祝う雰囲気是一段と華やかに彩られる。四条通から恵美須神社までの参道には露店がずらりと立ち並び、伝統産業など中小企業の経営者が多い京都の1月の風物詩となっている。参詣する人々は、商売繁盛を祈願しつつ、一年無事に過ごせることを感じている。

b 節分祭・節分会

2月3日(4日の年も)、市内各寺社で節分行事が行われる。

節分は、春夏秋冬の節目のことであったが、特に新しい年を迎える意味をもつ立春の前日の儀礼は、大晦日に宮中でおこなわれた追儺の儀礼と結びつき、現在のような豆で鬼を追う形式に変化した。文武天皇の慶

雲3年(706)にはすでに行われていたという宮中の追儺は、方相氏が発する声と群臣の弓などで儺(疫鬼の意味)を追い払うものであった。平安時代末期になると方相氏の仮面や装束が異様であることから、鬼と取り違えられるようになった。節分に豆をまく行事は、京都では室町時代に始まり、「鬼は外」の唱え事も既に行われていた。

節分詣り発祥の社とされる左京区の吉田神社で行われる節分祭は、最も有名な節分行事の一つであり、吉田兼見により記された「兼見卿記」の元龜3年(1572)の記事の中に、記載を見ることができる。室町時代に始まったとされる疫神祭、追儺式、火焔祭などの祭事は、現在も古式にのっとり執行され、期間中50万人を超える参拝客で賑わう。

旧暦の節分に鯛と柊を門口に指し、年男が厄を避け、福よ来いと炒った豆を蒔く風習は江戸初期には一般の家で行われていることが文献に記載されている



図 2-11 節分祭の例 (吉田神社)

新 (P74)

が、鬼の姿をした鬼を追い払う風習は明治以降であると推測される。

吉田神社は、貞観元年（859年）、藤原山蔭が春日の四神を勧請し、平安京の鎮守神にしたのが起こりで、重要文化財の斎場所太元宮をはじめ、境内には、多くの摂社、末社がある。

2日に執り行われる追儺式では、主役の^{ほうそうし}方相氏、赤・青・黄の三鬼、^{しんし}俵士の

子供、^{しょうけい}上卿などが参道を下り始め、やがて方相氏と鬼が戦い、次第に鬼の力が弱くなり、最後に上卿が桃の弓で葦の矢を射って鬼は追い払われる。大変に迫力のある祭事であり、参拝客の喧騒に交じって、鬼の迫力に恐れた子供の泣き声が聞こえる。3日の火炉祭では、

境内に据え付けた巨大な金網式の炉の中にいた旧年のお札や神矢などを燃やす火柱があがり、夜を通して燃え続ける。その炎は参拝者に無病息災をもたらし、新春の幸運を授けると言われる。

この、節分祭の期間中、参道には800を超える多くの露店が立ち並ぶ。ここで授かった豆は大切に家に持ち帰り、家族と一緒に、年の数を数えて厄除けを祈念して食する。

(イ) 春（3月～6月）

a やすらい祭

今宮神社等のやすらい祭は、別名「やすらい花」（重要無形民俗文化財）ともいい、地域に根差した民俗行事として、鞍馬の火祭、太秦の牛祭とともに京都の三大奇祭の一つに数えられている。

今宮神社は、長和4年（1015）洛中に疫病が流行した際、疫神の^{たくせん}託宣に

より^{そうし}創祀したと伝えられ、社伝によると、平安後期、桜の散り始める陰暦3月の頃疫病が流行したので、花の霊を鎮め無病息災を祈願したのがやすらい祭の起こりという。鎌倉時代後期に成立したとされる「百練抄」には、仁平4年（1152）の内容に、紫野社（今宮社）の夜須礼についての記載がある。また、安永9年（1780）発行の「都名所図会」には、当時の祭の様子が描かれている。

旧 (P74)

が、鬼の姿をした鬼を追い払う風習は明治以降であると推測される。

吉田神社は、貞観元年（859年）、藤原山蔭が春日の四神を勧請し、平安京の鎮守神にしたのが起こりで、重要文化財の斎場所太元宮をはじめ、境内には、多くの摂社、末社がある。

2日に執り行われる追儺式では、主役の方相氏（ほうそうし）、赤・青・黄の三鬼、俵士（しんし）

の子供、上卿などが参道を下り始め、やがて方相氏と鬼が戦い、次第に鬼の力が弱くなり、最後に上卿が桃の弓で葦の矢を射って鬼は追い払われる。大変に迫力のある祭事であり、参拝客の喧騒に交じって、鬼の迫力に恐れた子供の泣き声が聞こえる。3日の火炉祭では、

境内に据え付けた巨大な金網式の炉の中にいた旧年のお札や神矢などを燃やす火柱があがり、夜を通して燃え続ける。その炎は参拝者に無病息災をもたらし、新春の幸運を授けると言われる。

この、節分祭の期間中、参道には800を超える多くの露店が立ち並ぶ。ここで授かった豆は大切に家に持ち帰り、家族と一緒に、年の数を数えて厄除けを祈念して食する。

(イ) 春（3月～6月）

a やすらい祭

今宮神社等のやすらい祭は、別名「やすらい花」（重要無形民俗文化財）ともいい、地域に根差した民俗行事として、鞍馬の火祭、太秦の牛祭とともに京都の三大奇祭の一つに数えられている。

今宮神社は、長和4年（1015）洛中に疫病が流行した際、疫神の託宣により創祀したと伝えられ、社伝によると、平安後期、桜の散り始める陰暦3月

の頃疫病が流行したので、花の霊を鎮め無病息災を祈願したのがやすらい祭の起こりという。鎌倉時代後期に成立したとされる「百練抄」には、仁平4年（1152）の内容に、紫野社（今宮社）の夜須礼についての記載がある。また、安永9年（1780）発行の「都名所図会」には、当時の祭の様子が描かれている。

写真省略

写真 2-10 節分祭（吉田神社）

提供 吉田神社

写真省略

写真 2-10 節分祭（吉田神社）

提供 吉田神社

新 (P76)	旧 (P76)
<p>た踊りの<u>一団</u>の労をねぎらう。</p> <p>b 葵祭</p> <p>葵祭は、かつて勅使（天皇の使者）が派遣された由緒ある祭で、数少ない王朝風俗の伝統が現在も受け継がれており、わが国で最も優雅で古趣に富んだ祭として知られている。また、長い歴史の中で、幾度か行列の実施が中断していた時期もあったが、その間も社家の人々が、社頭の儀などの神社内の祭を変わることなく大切に脈々と守り続けている伝統行事である。</p> <p>(a) 祭の歴史</p> <p>葵祭は、平安京ができる遙か以前、風水害で作物ができなかったときに、鈴をつけた馬を走らせ、五穀豊穡を祈ったのが始まりとされ、平安時代以降、国家的な行事として行われてきた賀茂社の祭であり、毎年5月に行われる約1ヵ月間の祭礼行事のうち一日が葵祭である。源氏物語の中で描かれる車争いのシーンは、この祭の歴史を物語っている。</p> <p>その呼び名は、祭に関わる人や牛車などに葵の葉をつけたことに由来し、元禄年間（1688～1704）の再興以後、葵祭と呼称されるようになった。</p> <p>また、賀茂社は、<u>賀茂別雷</u>神社（<u>通称、上賀茂神社</u>）と<u>賀茂御祖</u>神社（<u>通称、下鴨神社</u>）をあわせた呼称で、賀茂社の名が文献上に初見するのは「続日本紀」文武天皇2年（698）3月辛巳条で「山城の国の賀茂祭の日に衆の会して騎射するを禁ず」と記している。社殿は天武天皇6年（677）に初めて社殿を造営と記されている。</p> <p>天平元年（729）頃までの文献にみえる賀茂社は上賀茂神社をさし、下鴨神社の成立は天平勝宝2年（750）頃。</p> <p>(b) 葵祭と一連の祭事</p> <p>葵祭に先駆けて、上賀茂神社（賀茂別雷神社）では、競馬会神事（賀茂競馬、市登録無形民俗文化財）や、祭祀の中でも最も古く荘厳な神事である御霊迎いの神事、<u>御阿礼</u>神事などが行われる。また、下鴨神社（<u>賀茂御祖</u>神社、国宝他）でも、神霊迎いの神事である御蔭祭が行われる他、両社が隔年交代で行う斎王代御禊など、葵祭を中心とした賀茂祭の行事が多数執り行われる。</p> <p>競馬会神事は、寛治7年（1093）の5月5日の節句に催されていた宮中武徳殿の式を上賀茂神社に移し奉納されたことに由来する、天下泰平・五穀豊穡を祈願する神事である。</p>	<p>た踊りの<u>一段</u>の労をねぎらう。</p> <p>b 葵祭</p> <p>葵祭は、かつて勅使（天皇の使者）が派遣された由緒ある祭で、数少ない王朝風俗の伝統が現在も受け継がれており、わが国で最も優雅で古趣に富んだ祭として知られている。また、長い歴史の中で、幾度か行列の実施が中断していた時期もあったが、その間も社家の人々が、社頭の儀などの神社内の祭を変わることなく大切に脈々と守り続けている伝統行事である。</p> <p>(a) 祭の歴史</p> <p>葵祭は、平安京ができる遙か以前、風水害で作物ができなかったときに、鈴をつけた馬を走らせ、五穀豊穡を祈ったのが始まりとされ、平安時代以降、国家的な行事として行われてきた賀茂社の祭であり、毎年5月に行われる約1ヵ月間の祭礼行事のうち一日が葵祭である。源氏物語の中で描かれる車争いのシーンは、この祭の歴史を物語っている。</p> <p>その呼び名は、祭に関わる人や牛車などに葵の葉をつけたことに由来し、元禄年間（1688～1704）の再興以後、葵祭と呼称されるようになった。</p> <p>また、賀茂社は、<u>賀茂別雷</u>神社（<u>かもわけいかづちじんじゃ、通称、上賀茂神社</u>）と<u>賀茂御祖</u>神社（<u>かもみおやじんじゃ、通称、下鴨神社</u>）をあわせた呼称で、賀茂社の名が文献上に初見するのは「続日本紀」文武天皇2年（698）3月辛巳条で「山城の国の賀茂祭の日に衆の会して騎射するを禁ず」と記している。社殿は天武天皇6年（677）に初めて社殿を造営と記されている。</p> <p>天平元年（729）頃までの文献にみえる賀茂社は上賀茂神社をさし、下鴨神社の成立は天平勝宝2年（750）頃。</p> <p>(b) 葵祭と一連の祭事</p> <p>葵祭に先駆けて、上賀茂神社（賀茂別雷神社）では、競馬会神事（賀茂競馬、市登録無形民俗文化財）や、祭祀の中でも最も古く荘厳な神事である御霊迎いの神事、<u>御阿礼</u>（<u>みあれ</u>）神事などが行われる。また、下鴨神社（<u>賀茂御祖</u>（<u>かもみおや</u>）神社、国宝他）でも、神霊迎いの神事である御蔭祭が行われる他、両社が隔年交代で行う斎王代御禊など、葵祭を中心とした賀茂祭の行事が多数執り行われる。</p> <p>競馬会神事は、寛治7年（1093）の5月5日の節句に催されていた宮中武徳殿の式を上賀茂神社に移し奉納されたことに由来する、天下泰平・五穀豊穡を祈願する神事である。</p>

新 (P77)

旧 (P77)

御霊迎いの神事は、御蔭神社から葵祭の神霊を迎える神事で、社伝では人皇第二代綏靖天皇の3年に始まった、わが国最古の神幸列といわれる。室町後期に中断したが、元禄年間（1688～1704）葵祭とともに復興した。

御阿礼神事は、上賀茂神社の神事で、当社最古の神事といわれる。

葵祭の祭儀は、宮中の儀、路頭の儀、社頭の儀の三つからなるが、現在は路頭の儀と社頭の儀が行われている。

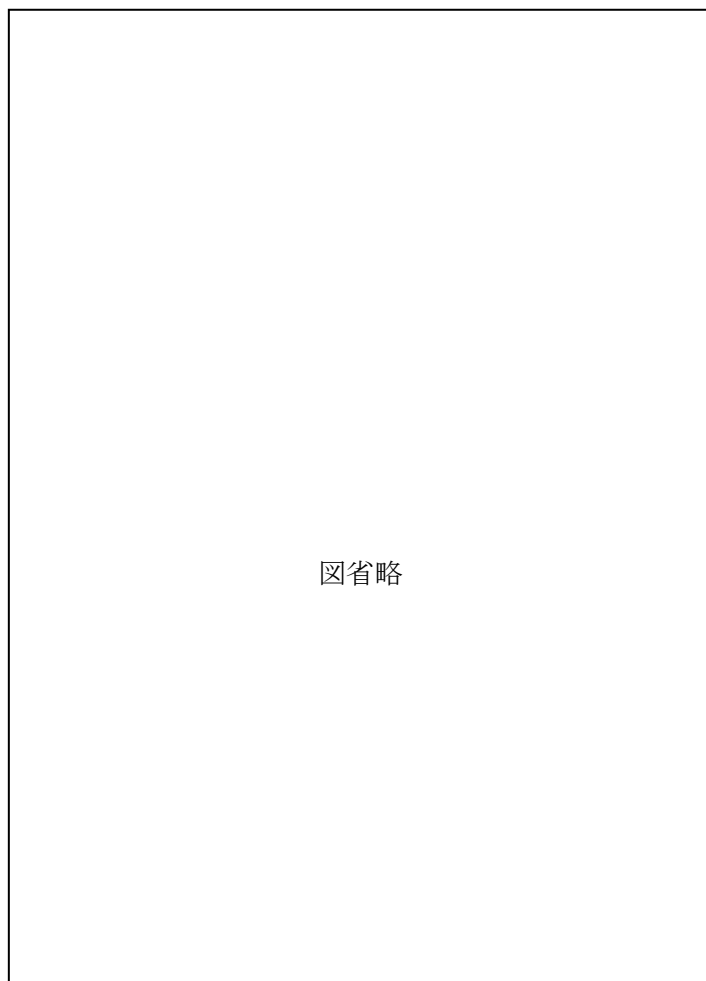
路頭の儀は、5つのグループから構成された総勢512名(馬36頭、牛4頭、牛車2台、腰輿1基)、約700メートルの行列である。

それぞれに平安時代の装束に身



図省略

図 2-13 上賀茂神社



図省略

図 2-14 下鴨神社

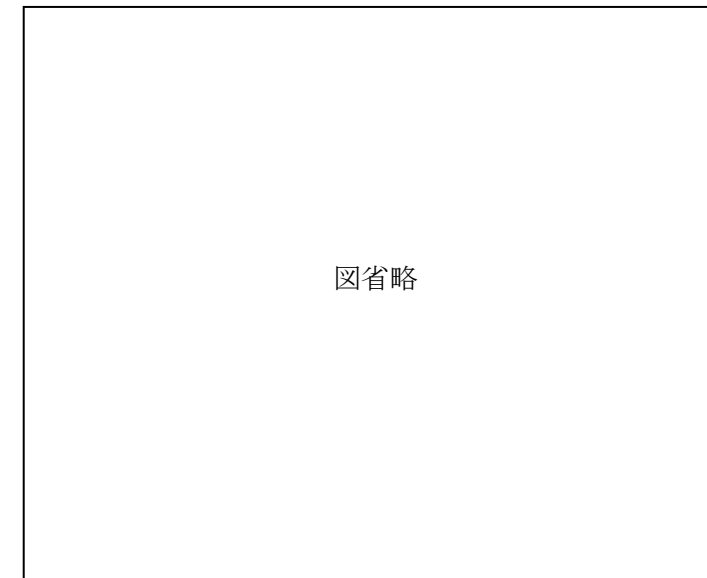
御霊迎いの神事は、御蔭神社から葵祭の神霊を迎える神事で、社伝では人皇第二代綏靖（すいぜい）天皇の3年に始まった、わが国最古の神幸列といわれる。室町後期に中断したが、元禄年間（1688～1704）葵祭とともに復興した。

御阿礼（みあれ）神事は、上賀茂神社の神事で、当社最古の神事といわれる。

葵祭の祭儀は、宮中の儀、路頭の儀、社頭の儀の三つからなるが、現在は路頭の儀と社頭の儀が行われている。

路頭の儀は、5つのグループから構成された総勢512名(馬36頭、牛4頭、牛車2台、腰輿（およよ）1基)、約700メートルの行列である。

それぞれに平安時代の装束に身



図省略

図 2-13 上賀茂神社



図省略

図 2-14 下鴨神社

新 (P80)

蔵遣・山城遣を務める「八瀬童子」として現在も受け継がれている。

また、祭の用具の手入れ、新調などにより、それらの伝統工芸を扱う若い担い手づくりに役立っている。華やかな祭の継続は、伝統技能の継承に大きな役割を果たしているのである。

(ウ) 夏 (7月～8月)

a 祇園祭

京都において^{かみにぎわい}神賑の風流※1は、都市祭礼の華といわれる祇園祭の山鉾とその行事に端的に見ることができる。

中でも、祭のハイライトである山鉾巡行は、動く美術館とも称される豪華絢爛な山鉾（重要有形民俗文化財）の姿が多くの人々を魅了し、長い伝統を継承してきた京都の「町衆」の心意気を伝えている。

※1 神賑の風流

平安遷都以来、時期によってその都市域を伸縮させてきた京都であるが、およその都心域に住まう人々の氏神は、今宮、北野、上御霊、祇園、伏見稻荷、松尾、藤森といった郊外に鎮座する神々であった。社は郊外に鎮座するものの、祭りの際には、神は輿に乗り氏子の間を巡り、氏子の居住地内のお旅所に滞在する。神輿が駐する御旅所での祭事が祭礼の中核となるのは全国共通のことであるが、京都においては神輿を迎え、あるいは送る際の神賑の風流が早くから発達した。それは都市ゆえ、不特定多数の人々の目線に答えようとした結果であり、豊かな祭礼文化を生むに至るのである。

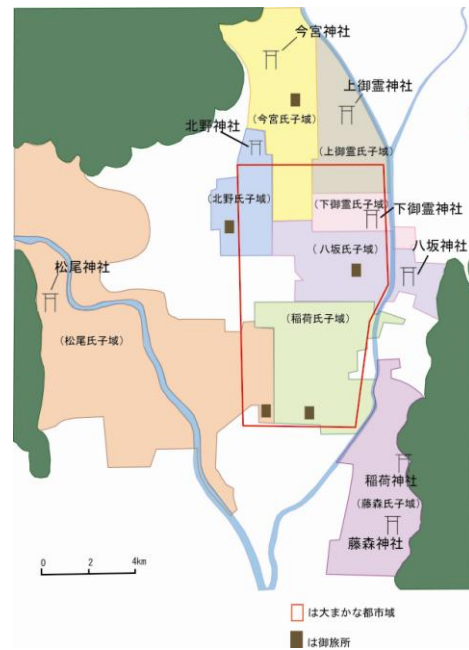


図 2-15 氏子域

(a) 祭の歴史

毎年7月に行われる祇園祭は、古くは祇園御霊会（祇園会）といわれ、平安時代より続く東山区祇園町の八坂神社（重要文化財：本殿、楼門他）の祭礼であり、その歴史の長さやその豪華さ、祭事が1ヶ月の長きにわたるものであることで広く知られている。

旧 (P80)

蔵遣・山城遣を務める「八瀬童子」として現在も受け継がれている。

また、祭の用具の手入れ、新調などにより、それらの伝統工芸を扱う若い担い手づくりに役立っている。華やかな祭の継続は、伝統技能の継承に大きな役割を果たしているのである。

(ウ) 夏 (7月～8月)

a 祇園祭

京都において神賑の風流※1は、都市祭礼の華といわれる祇園祭の山鉾とその行事に端的に見ることができる。

中でも、祭のハイライトである山鉾巡行は、動く美術館とも称される豪華絢爛な山鉾（重要有形民俗文化財）の姿が多くの人々を魅了し、長い伝統を継承してきた京都の「町衆」の心意気を伝えている。

※1 神賑の風流

平安遷都以来、時期によってその都市域を伸縮させてきた京都であるが、およその都心域に住まう人々の氏神は、今宮、北野、上御霊、祇園、伏見稻荷、松尾、藤森といった郊外に鎮座する神々であった。社は郊外に鎮座するものの、祭りの際には、神は輿に乗り氏子の間を巡り、氏子の居住地内のお旅所に滞在する。神輿が駐する御旅所での祭事が祭礼の中核となるのは全国共通のことであるが、京都においては神輿を迎え、あるいは送る際の神賑の風流が早くから発達した。それは都市ゆえ、不特定多数の人々の目線に答えようとした結果であり、豊かな祭礼文化を生むに至るのである。



図 2-15 氏子域

(a) 祭の歴史

毎年7月に行われる祇園祭は、古くは祇園御霊会（祇園会）といわれ、平安時代より続く東山区祇園町の八坂神社（重要文化財：本殿、楼門他）の祭礼であり、その歴史の長さやその豪華さ、祭事が1ヶ月の長きにわたるものであることで広く知られている。

新 (P81)

旧 (P81)

祭の起源は、貞観11年(869)にさかのぼる。その年、疫病が流行し、卜部日良麻呂が勅を奉じ、神泉苑に66本の鉦を立て、祇園社の神輿を送って御霊会を行ったといわれる。その後、八坂の地に牛頭天王を祀る祠堂が整備され、安和3年(970)からは、祇園御霊会は毎年恒例の行事となった。南北朝時代に入ると、京都の町衆による風流として山鉦巡行が加わり、華やかさは一層増していった。応仁の乱で山鉦巡行は途絶えたが、明応9年(1500年)に再興された。以後、中国やペルシャ、ベルギーなどからもたらされたタペストリーなどが各山鉦に懸装品として飾られるようになった。江戸時代に入っても大火に見舞われたが、その都度、町衆の力によって再興され今日まで祭の伝統が守られている。なお、安永9年(1780)に発行された「都名所図会」には、山鉦の様子が描かれている。現在、巡行に参加している山鉦は32基であり、各町毎に山鉦保存会が組織され、維持管理や祭の運営に携わっている。このうち、29基が重要有形民俗文化財に指定されている。一般に山鉦は、その形態から鉦、^{かきやま}昇山、^{ひきやま}曳山、屋台、傘鉦の5つの型に分類できるが、祇園祭ではこの5つ全ての型が登場する点が特徴である。

江戸時代には、山鉦町の多くは町家^{ちょういえ}という町会所と土蔵(山鉦の収蔵庫)を持つようになり、現在でも多くの山鉦町で町家が維持され、使用されている。

(b) 祇園祭の一箇月

一箇月もの間、祭の舞台となるのは、人々の信仰の深い八坂神社や御旅所を中心に、京都の伝統的な自治組織「町組」のコミュニティの場である「町会所」、京町家などの歴史的建造物群、そしてこれらの建造物群が構成する京都の歴史的な町並みである。

祇園祭は7月1日の「吉符入」から始まる。

これは神事始めの意で、各山鉦町ではそれぞれの町会所に八坂の大神をお迎えし、その年の神事以下役員の選定を行うほか、山鉦の組み立てや^{えいこう}曳行に当たる大工手伝い並びに車方の人びとと打合せを行う。その後、山鉦各



図 2-16 都名所図会(祇園会) 国際日本文化研究センター 所蔵

祭の起源は、貞観11年(869)にさかのぼる。その年、疫病が流行し、卜部日良麻呂が勅を奉じ、神泉苑に66本の鉦を立て、祇園社の神輿を送って御霊会を行ったといわれる。その後、八坂の地に牛頭天王を祀る祠堂が整備され、安和3年(970)からは、祇園御霊会は毎年恒例の行事となった。南北朝時代に入ると、京都の町衆による風流として山鉦巡行が加わり、華やかさは一層増していった。応仁の乱で山鉦巡行は途絶えたが、明応9年(1500年)に再興された。以後、中国やペルシャ、ベルギーなどからもたらされたタペストリーなどが各山鉦に懸装品として飾られるようになった。江戸時代に入っても大火に見舞われたが、その都度、町衆の力によって再興され今日まで祭の伝統が守られている。なお、安永9年(1780)に発行された「都名所図会」には、山鉦の様子が描かれている。現在、巡行に参加している山鉦は32基であり、各町毎に山鉦保存会が組織され、維持管理や祭の運営に携わっている。このうち、29基が重要有形民俗文化財に指定されている。一般に山鉦は、その形態から鉦、^{かきやま}昇山、^{ひきやま}曳山、屋台、傘鉦の5つの型に分類できるが、祇園祭ではこの5つ全ての型が登場する点が特徴である。

江戸時代には、山鉦町の多くは町家^{ちょういえ}(ちょういえ)という町会所と土蔵(山鉦の収蔵庫)を持つようになり、現在でも多くの山鉦町で町家が維持され、使用されている。

(b) 祇園祭の一箇月

一箇月もの間、祭の舞台となるのは、人々の信仰の深い八坂神社や御旅所を中心に、京都の伝統的な自治組織「町組」のコミュニティの場である「町会所」、京町家などの歴史的建造物群、そしてこれらの建造物群が構成する京都の歴史的な町並みである。

祇園祭は7月1日の「吉符入」から始まる。

これは神事始めの意で、各山鉦町ではそれぞれの町会所に八坂の大神をお迎えし、その年の神事以下役員の選定を行うほか、山鉦の組み立てや^{えいこう}曳行に当たる大工手伝い並びに車方の人びとと打合せを行う。その後、山鉦各



図 2-16 都名所図会(祇園会) 国際日本文化研究センター 所蔵

新 (P82)	旧 (P82)
<p>町からの招きを受けた八坂神社の神職が、山鉾各町の会所に出向き、お祓いを行う。</p> <p>2日には、京都市役所でくじ取り式が行われ、「くじ取らず」を除いた山鉾の巡行の順番が決まる。</p> <p>10日頃になると、巡行の山鉾が収蔵庫から出されて組み建てが始まる。この作業が始まると、一気に祭ムードが高まる。</p> <p>13日には、長刀鉾の稚児社参が行われる。これは、長刀鉾にのる稚児が、午前11時、立烏帽子水干姿で八坂神社に詣でるもので、俗にお位もらいともいい、多くの見物客で賑わう。</p> <p>14日から16日までは宵山である。</p> <p>各山鉾町では、駒形提灯に灯がとり、祇園囃子がにぎやかに奏でられ、その音色と、厄除けとされる粽やお守り、ろうそくなどを売る子供たちの「ちまきどうですか～」といったわらべ歌の響きとがあいまって、宵山情緒を盛り上げている。</p> <p>そして、17日には、祭りのハイライトである山鉾巡行が行われる。</p> <p>巡行は午前9時、四条烏丸から長刀鉾を先頭に河原町通を経て御池通へ向う。途中、「<u>注連縄</u>切り」「くじ改め」や、豪快な「辻廻し」などで見せ場を作り、豪華絢爛な一大ページェントが繰り広げられる。</p> <p>巡行する山鉾は、疫神を集めるための装置であるといわれる。そのため、神の耳を楽しませる歌舞音曲、目を楽しませる豪華な懸装品によって荘厳な姿とされる必要があった。これは祭りを見物する人たちを驚かせるとともに、祭りに参加する人々の誇りともなったのである。</p> <p>一方、八坂神社では、7月10日の神輿洗式、御神霊を移す15日の宵宮祭の後、17日の夕刻に氏子域を巡行する神幸祭<small>しんこうさい</small>が行われる。</p> <p>午後4時からの神事後、<small>なかござ ひがしござ にしござ</small>中御座、東御座、西御座の3基が八坂神社を出発する。八坂神社の石段下では、朱色の映える西楼門を背に、神輿がそれぞれ差し上げを披露する。神輿は「ホイットホイット」という舁き手の掛け声と飾り金具を響かせ、氏子域を巡行し、夜遅くに四条寺町の御旅所へ到着、奉安される。</p> <p>24日の還幸祭で氏子域を巡行して八坂神社に戻り御神霊を八坂神社に還し、28日の神輿洗式の後、神輿は神輿庫に収められる。</p> <p>保存会の役員たちは、7月の1箇月間は、麻の<u>桂</u><small>かみし</small>を身にまとい、祭の準備に走り回る。そして、京町家は通りと一体となって祭の舞台となり、主人や家族、そこに訪れるお客さんや通りがかりの人々などが参加し、ハレの日を演出する。</p>	<p>町からの招きを受けた八坂神社の神職が、山鉾各町の会所に出向き、お祓いを行う。</p> <p>2日には、京都市役所でくじ取り式が行われ、「くじ取らず」を除いた山鉾の巡行の順番が決まる。</p> <p>10日頃になると、巡行の山鉾が収蔵庫から出されて組み建てが始まる。この作業が始まると、一気に祭ムードが高まる。</p> <p>13日には、長刀鉾の稚児社参が行われる。これは、長刀鉾にのる稚児が、午前11時、立烏帽子水干姿で八坂神社に詣でるもので、俗にお位もらいともいい、多くの見物客で賑わう。</p> <p>14日から16日までは宵山である。</p> <p>各山鉾町では、駒形提灯に灯がとり、祇園囃子がにぎやかに奏でられ、その音色と、厄除けとされる粽やお守り、ろうそくなどを売る子供たちの「ちまきどうですか～」といったわらべ歌の響きとがあいまって、宵山情緒を盛り上げている。</p> <p>そして、17日には、祭りのハイライトである山鉾巡行が行われる。</p> <p>巡行は午前9時、四条烏丸から長刀鉾を先頭に河原町通を経て御池通へ向う。途中、「<u>注連縄 (しめなわ)</u>切り」「くじ改め」や、豪快な「辻廻し」などで見せ場を作り、豪華絢爛な一大ページェントが繰り広げられる。</p> <p>巡行する山鉾は、疫神を集めるための装置であるといわれる。そのため、神の耳を楽しませる歌舞音曲、目を楽しませる豪華な懸装品によって荘厳な姿とされる必要があった。これは祭りを見物する人たちを驚かせるとともに、祭りに参加する人々の誇りともなったのである。</p> <p>一方、八坂神社では、7月10日の神輿洗式、御神霊を移す15日の宵宮祭の後、17日の夕刻に氏子域を巡行する神幸祭<small>しんこうさい</small>が行われる。</p> <p>午後4時からの神事後、<small>なかござ ひがしござ にしござ</small>中御座、東御座、西御座の3基が八坂神社を出発する。八坂神社の石段下では、朱色の映える西楼門を背に、神輿がそれぞれ差し上げを披露する。神輿は「ホイットホイット」という舁き手の掛け声と飾り金具を響かせ、氏子域を巡行し、夜遅くに四条寺町の御旅所へ到着、奉安される。</p> <p>24日の還幸祭で氏子域を巡行して八坂神社に戻り御神霊を八坂神社に還し、28日の神輿洗式の後、神輿は神輿庫に収められる。</p> <p>保存会の役員たちは、7月の1箇月間は、麻の<u>桂</u>を身にまとい、祭の準備に走り回る。そして、京町家は通りと一体となって祭の舞台となり、主人や家族、そこに訪れるお客さんや通りがかりの人々などが参加し、ハレの日を演出する。</p>

新 (P83)

旧 (P83)

写真省略

写真省略

写真 2-16 新町通りを通る月鉾 出典 「京町家の再生」*

写真 2-17 山鉾の組み立て

* (財)京都市景観・まちづくりセンター編、写真撮影：水野克比古・水野秀比古・水野歌夕（以上 水野克比古写真事務所）以下本文中における同文献について同じ。

(c) 技術の伝承

山鉾は、「縄がらみ」といわれる祇園祭の歴史のなかで現在まで受け継がれてきた伝統的な技法で、一本の釘も使わずに荒縄のみを使い、しっかりと固定しながら組み立てられる。高さ20数メートル、重さ10トン以上もの山鉾を動かしたときの衝撃や鉾の歪みをうまく吸収しているといわれ、熟練の大工方は、結び目の美しさにもこだわり、「祇園祭の美」を支えている。

また、山鉾は巡行終了とともに解体される。これは、鉾に吸い寄せられた疫神を解体することによって遷却^{せんきやく}するためであり、山鉾は毎年組み立てと解体を繰り返してきた。

こうした山鉾に関わる様々な技能も祭りとともに受け継がれている。

山鉾本体を組み立てる手伝い方と大工方にはじまり、車輪の横に付き添い、カブラと呼ばれる楔で車輪の方向調整を行う「車方」、鉾の屋根の上に乗り、巡行路の障害物と鉾との接触を防ぐ「屋根方」、鉾の舞台に乗り、お囃子を演奏する「囃方」、鉾の前部に立ち、車方や曳き手の動きを統括する「音頭取り」、山鉾を動かす「曳き手」「舁き手」である。大工方などは専門の技能を必要とするため、代々、町内に入り出している大工・工務店が主要な担い手となっている。

(d) 町会所と屏風祭

町会所は、町衆自治の伝統を継承し、育んできた町の核と言える。今日も

写真省略

写真省略

写真 2-16 新町通りを通る月鉾 出典 「京町家の再生」*

写真 2-17 山鉾の組み立て

* (財)京都市景観・まちづくりセンター編、写真撮影：水野克比古・水野秀比古・水野歌夕（以上 水野克比古写真事務所）以下本文中における同文献について同じ。

(c) 技術の伝承

山鉾は、「縄がらみ」といわれる祇園祭の歴史のなかで現在まで受け継がれてきた伝統的な技法で、一本の釘も使わずに荒縄のみを使い、しっかりと固定しながら組み立てられる。高さ20数メートル、重さ10トン以上もの山鉾を動かしたときの衝撃や鉾の歪みをうまく吸収しているといわれ、熟練の大工方は、結び目の美しさにもこだわり、「祇園祭の美」を支えている。

また、山鉾は巡行終了とともに解体される。これは、鉾に吸い寄せられた

疫神を解体することによって遷却^{せんきやく}するためであり、山鉾は毎年組み立てと解体を繰り返してきた。

こうした山鉾に関わる様々な技能も祭りとともに受け継がれている。

山鉾本体を組み立てる手伝い方と大工方にはじまり、車輪の横に付き添い、カブラと呼ばれる楔で車輪の方向調整を行う「車方」、鉾の屋根の上に乗り、巡行路の障害物と鉾との接触を防ぐ「屋根方」、鉾の舞台に乗り、お囃子を演奏する「囃方」、鉾の前部に立ち、車方や曳き手の動きを統括する「音頭取り」、山鉾を動かす「曳き手」「舁き手」である。大工方などは専門の技能を必要とするため、代々、町内に入り出している大工・工務店が主要な担い手となっている。

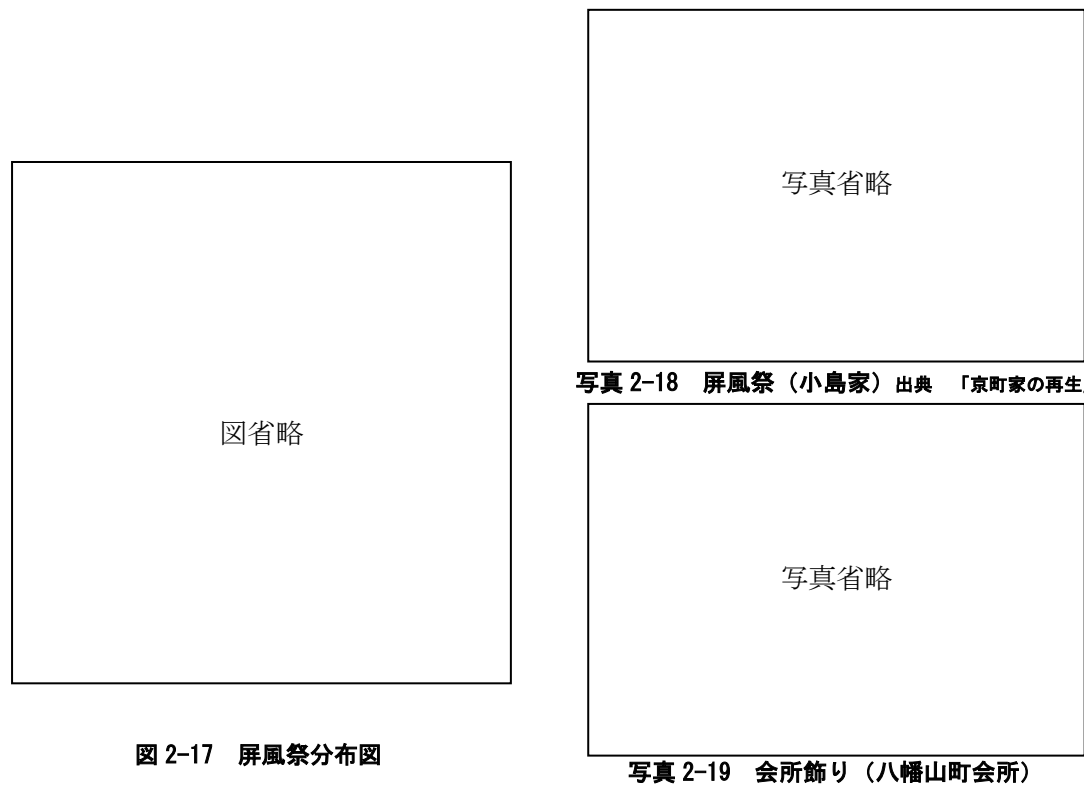
(d) 町会所と屏風祭

町会所は、町衆自治の伝統を継承し、育んできた町の核と言える。今日も

新 (P84)

なお、祭の当日はもとより、平時から囃子方の練習等、地域の寄り合いに利用されるだけでなく、事務所や店舗に貸し出して祭の管理運営の原資を得ている重要な施設である。会所の中には、市指定文化財として4件の会所（小結棚町会所、筭町会所、天神山町会所、燈籠町会所）などがある。

祭の期間中、町会所では「会所飾り」が行われ、山鉾を飾る人形・織物・装飾金具などが美しく飾られる。山鉾町は、和装関連の間屋の集積する室町通、新町通などの界限にあることから、裂類きれの装飾品が充実している。近世以前までの裂類の装飾品は1000点余に及び、そのうちの3割が海外からの渡来品である。これらの多くはもともと敷物やタペストリーとして利用された大型の織物であるが、中には世界で唯一残った絨毯もあり、年に1回、祇園祭の掛け物としてしか利用されなかったことから、大変保存状態が良いものが多い。



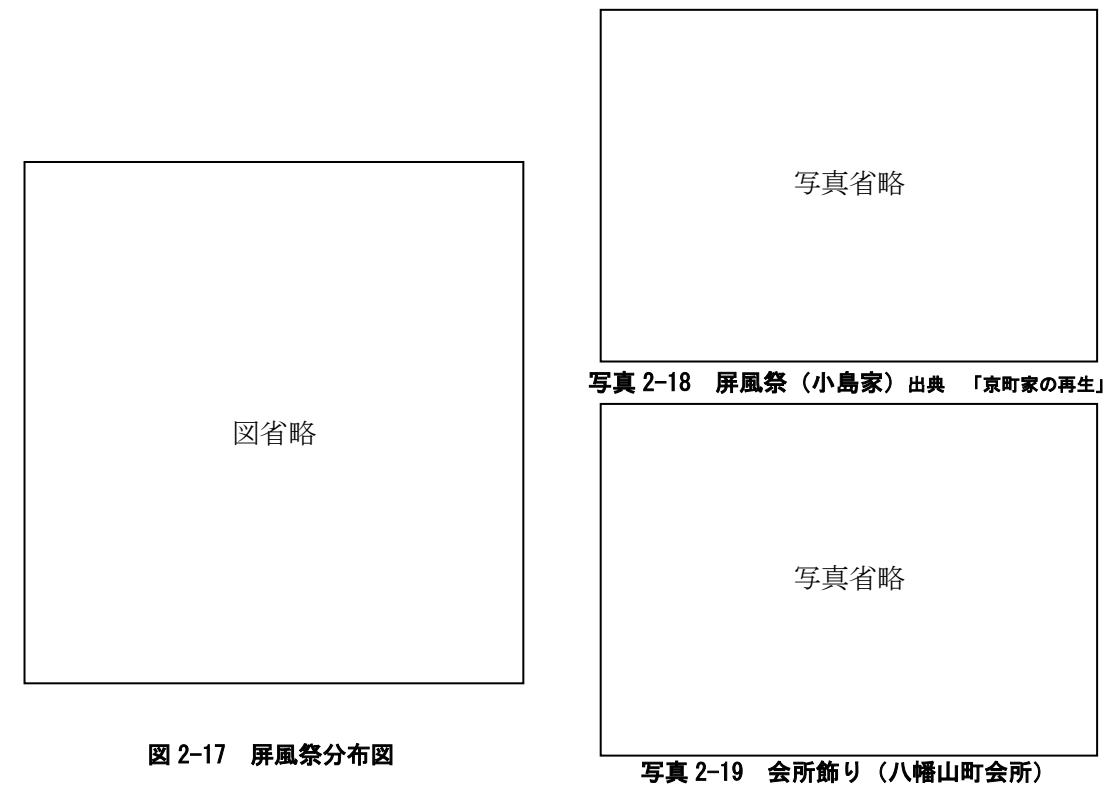
出典 「京町家の再生」

また、「会所飾り」に呼応するように、自宅や会社の京町家などでも「屏風祭」が行われる。京町家の表の格子をはずして幔幕を張り巡らせ、店から奥座敷まで障子襖類を取り払い、涼しげな御簾をかけるなど、祭りの際の座敷として「ハレ」のしつらえに整えられる。そして、床に毛氈もうせんなどを敷きつめた上に、その家の秘蔵の屏風などの美術品を公開する。特に「宵山」の夜

旧 (P84)

なお、祭の当日はもとより、平時から囃子方の練習等、地域の寄り合いに利用されるだけでなく、事務所や店舗に貸し出して祭の管理運営の原資を得ている重要な施設である。会所の中には、市指定文化財として4件の会所（小結棚町会所、筭町会所、天神山町会所、燈籠町会所）などがある。

祭の期間中、町会所では「会所飾り」が行われ、山鉾を飾る人形・織物・装飾金具などが美しく飾られる。山鉾町は、和装関連の間屋の集積する室町通、新町通などの界限にあることから、裂類きれの装飾品が充実している。近世以前までの裂類の装飾品は1000点余に及び、そのうちの3割が海外からの渡来品である。これらの多くはもともと敷物やタペストリーとして利用された大型の織物であるが、中には世界で唯一残った絨毯もあり、年に1回、祇園祭の掛け物としてしか利用されなかったことから、大変保存状態が良いものが多い。



出典 「京町家の再生」

また、「会所飾り」に呼応するように、自宅や会社の京町家などでも「屏風祭」が行われる。京町家の表の格子をはずして幔幕を張り巡らせ、店から奥座敷まで障子襖類を取り払い、涼しげな御簾をかけるなど、祭りの際の座敷として「ハレ」のしつらえに整えられる。そして、床に毛氈もうせんなどを敷きつめた上に、その家の秘蔵の屏風などの美術品を公開する。特に「宵山」の夜

新 (P85)	旧 (P85)
<p>には、表通りから家の中までよく見通せ、それらの美術品を拝見し、山鉦を愛でながらそぞろ歩くことは市民の楽しみであり、また主人の喜びでもある。その間、町内の家々では、お客様をお招きして宴が催される。表通りは、数十もの提灯に照らされた山鉦、ずらりと並んだ屋台、行きかう人の波で町中が華やかな雰囲気包まれる。</p> <p>祇園祭に向けて行われるお囃子の練習の音、山鉦の組立て、宵山を経て17日の山鉦巡行、その間に行われる町内での会所飾り、屏風祭など、7月の一ヶ月間にわたる祇園祭の様々な営みが行われ、まちを祇園祭一色に染める。</p> <p>b 京都五山送り火</p> <p>毎年8月16日の夜8時に、東山は大文字山（如意ヶ嶽）の中腹にぼつりと一つの明かりが点灯され、見る間に巨大な「大」の字にしつらえられた火床に点火される。続いて、市内を囲む北山、西山の中腹に「妙・法」の文字、「船形」「左大文字」「鳥居形」が次々と点火される。</p> <p>これらは、総称して「京都五山送り火」と呼ばれ、それぞれが京都市無形民俗文化財に登録されている。8月のお盆に個々の家で迎えた精霊(先祖)を再び^{めいふ}冥府に送り返す伝統行事である。その壮大で幻想的な行事は、市民にとって大切な夏の行事であり、京都の夏の夜空を彩る風物詩となっている。</p> <p>五山送り火のはじまりは明らかではないが、一説には、室町時代後期、当時、盛んに行われた万灯会が、次第に山腹に点火され、^{うらぼんえ}盂蘭盆会の大規模な精霊送りの火となったのが起源といわれており、洛外の村々が洛中に向けて行った宗教行事ともいえる。文献に登場するのは慶長8年（1603）の公家の日記で、お盆に鴨河原から山で焼かれた大文字や妙法の灯を見物したと書かれている。現在、点火の儀式や薪の管理などは、各山麓の町の人々が保存会を結成して維持している。</p> <p>「大文字送り火」は、銀閣寺近辺の旧浄土寺村の人々が大文字保存会を組織し、維持している。</p> <p>銀閣寺は正しくは慈照寺といい、その通称は観音堂の別称「銀閣」に由来する。文明14年（1482）、戦乱で荒廃した浄土寺跡に、足利義政が東山山荘を造営したことにはじまる。翌15年に^{つねのごしょ}常御所が完成し、後土御門天皇より「東山殿」の名を賜り、その後、銀閣（観音堂）は長享3年（1489）に上棟した。</p>	<p>には、表通りから家の中までよく見通せ、それらの美術品を拝見し、山鉦を愛でながらそぞろ歩くことは市民の楽しみであり、また主人の喜びでもある。その間、町内の家々では、お客様をお招きして宴が催される。表通りは、数十もの提灯に照らされた山鉦、ずらりと並んだ屋台、行きかう人の波で町中が華やかな雰囲気包まれる。</p> <p>祇園祭に向けて行われるお囃子の練習の音、山鉦の組立て、宵山を経て17日の山鉦巡行、その間に行われる町内での会所飾り、屏風祭など、7月の一ヶ月間にわたる祇園祭の様々な営みが行われ、まちを祇園祭一色に染める。</p> <p>b 京都五山送り火</p> <p>毎年8月16日の夜8時に、東山は大文字山（如意ヶ嶽）の中腹にぼつりと一つの明かりが点灯され、見る間に巨大な「大」の字にしつらえられた火床に点火される。続いて、市内を囲む北山、西山の中腹に「妙・法」の文字、「船形」「左大文字」「鳥居形」が次々と点火される。</p> <p>これらは、総称して「京都五山送り火」と呼ばれ、それぞれが京都市無形民俗文化財に登録されている。8月のお盆に個々の家で迎えた精霊(先祖)を再び冥府に送り返す伝統行事である。その壮大で幻想的な行事は、市民にとって大切な夏の行事であり、京都の夏の夜空を彩る風物詩となっている。</p> <p>五山送り火のはじまりは明らかではないが、一説には、室町時代後期、当時、盛んに行われた万灯会が、次第に山腹に点火され、^{うらぼんえ}盂蘭盆会の大規模な精霊送りの火となったのが起源といわれており、洛外の村々が洛中に向けて行った宗教行事ともいえる。文献に登場するのは慶長8年（1603）の公家の日記で、お盆に鴨河原から山で焼かれた大文字や妙法の灯を見物したと書かれている。現在、点火の儀式や薪の管理などは、各山麓の町の人々が保存会を結成して維持している。</p> <p>「大文字送り火」は、銀閣寺近辺の旧浄土寺村の人々が大文字保存会を組織し、維持している。</p> <p>銀閣寺は正しくは慈照寺といい、その通称は観音堂の別称「銀閣」に由来する。文明14年（1482）、戦乱で荒廃した浄土寺跡に、足利義正が東山山荘を造営したことにはじまる。翌15年に^{つねのごしょ}常御所が完成し、後土御門天皇より「東山殿」の名を賜り、その後、銀閣（観音堂）は長享3年（1489）に上棟した。</p>

新 (P88)	旧 (P88)
<p>大文字保存会では、銀閣寺（慈照寺銀閣他：国宝）山門の前で、一般市民から、先祖の供養や現存する人々の利益を願う護摩木を受け付け、集められた護摩木は、送り火の点火材料として山上にある火床へ上げられる。大の字の中心に位置する火床である^{かなわ}金尾に隣接する弘法大師堂に灯明がともされた後、大文字寺と呼ばれる麓の浄土院の住職と保存会員によって般若心経が唱えられる。午後8時になると、竹に麦わらを結びつけ、松葉を先につけた松明に灯明の火を^{かなわ}金尾にある親火をうつし、大の字の中心に点火された後、合図によって一斉に点火される。</p> <p>「松ヶ崎妙法送り火」は、松ヶ崎妙法保存会によって維持されており、日蓮宗(法華宗)の信仰に厚い地域であることと密接に関係する行事である。点火の際、「妙・法」の山では、松ヶ崎堀町にある^{ゆうせんじ}涌泉寺（市指定登録有形文化財（建造物））の住職や松ヶ崎立正会会長らが読経し、^{そらい}祖霊を送る。</p> <p>^{ゆうせんじ}涌泉寺は、大正7年、現在地にあった本涌寺と付近の妙泉寺が合併し、両寺より一字ずつ取り現寺号を定めた。妙泉寺は正暦3年（992）中納言保光が創建した天台宗松崎寺に始まり、本涌寺は天正2年（1574）、教蔵院日生が創建した日蓮宗の壇林で、松ヶ崎壇林が通称である。</p> <p>涌泉寺では、送り火が消えた午後9時ごろから境内で^{だいまくおどり}題目踊（市登録無形民俗文化財）が催される。この題目踊は、寺伝では永仁2年（1294）日像に帰依して天台宗から改宗した住職実眼が、徳治2年（1307）村民の改宗を喜び、太鼓を打って法華題目を唱えると村民も唱和して踊ったのが始まりといわれ、元禄17年（1704）に発行された「花洛細見図」には、題目踊の様子が描かれている。現在は、輪になった男女が音頭取りの太鼓の合図で「南無妙法蓮華経」という題目に節をつけて繰り返しながら踊るもので、送り火前日の夜にも行われる。また、題目踊の後には、近世になって流行った盆踊りであるさし踊（市登録無形民俗文化財）が踊られる。</p> <p>「船形万燈籠送り火」は、麓にある西方寺(浄土宗)と船形万灯籠保存会が中心になって維持している。「大文字送り火」同様に、西方寺で護摩木の受け付けを行っており、当日は午後8時15分に点火され、その後、境内では六斎念仏（国指定重要無形民俗文化財）が行われる。</p> <p>西方寺は、承和14年（847）円仁の創建と伝えられ、正和年間（1312～17）道空法如が中興して天台宗から浄土宗に改めた。</p> <p>六斎念仏は、鉦や太鼓を打って囃し、念仏を唱えながら踊る民俗芸能である。平安中期、空也が民衆教化のため始めたと言われる踊り念仏が、中世以降芸能化したもので、もとは六斎日（毎月8・14・15・23・29・30日）に行った。</p>	<p>大文字保存会では、銀閣寺（慈照寺銀閣他：国宝）山門の前で、一般市民から、先祖の供養や現存する人々の利益を願う護摩木を受け付け、集められた護摩木は、送り火の点火材料として山上にある火床へ上げられる。大の字の中心に位置する火床である^{かなわ}金尾に隣接する弘法大師堂に灯明がともされた後、大文字寺と呼ばれる麓の浄土院の住職と保存会員によって般若心経が唱えられる。午後8時になると、竹に麦わらを結びつけ、松葉を先につけた松明に灯明の火を^{かなわ}金尾にある親火をうつし、大の字の中心に点火された後、合図によって一斉に点火される。</p> <p>「松ヶ崎妙法送り火」は、松ヶ崎妙法保存会によって維持されており、日蓮宗(法華宗)の信仰に厚い地域であることと密接に関係する行事である。点火の際、「妙・法」の山では、松ヶ崎堀町にある^{ゆうせんじ}涌泉寺（市指定登録有形文化財（建造物））の住職や松ヶ崎立正会会長らが読経し、^{そらい}祖霊を送る。</p> <p>^{ゆうせんじ}涌泉寺は、大正7年、現在地にあった本涌寺と付近の妙泉寺が合併し、両寺より一字ずつ取り現寺号を定めた。妙泉寺は正暦3年（992）中納言保光が創建した天台宗松崎寺に始まり、本涌寺は天正2年、教蔵院日生が創建した日蓮宗の壇林で、松ヶ崎壇林が通称である。</p> <p>涌泉寺では、送り火が消えた午後9時ごろから境内で^{だいまくおどり}題目踊（市登録無形民俗文化財）が催される。この題目踊は、寺伝では永仁2年（1294）日像に帰依して天台宗から改宗した住職実眼が、徳治2年（1307）村民の改宗を喜び、太鼓を打って法華題目を唱えると村民も唱和して踊ったのが始まりといわれ、元禄17年（1704）に発行された「花洛細見図」には、題目踊の様子が描かれている。現在は、輪になった男女が音頭取りの太鼓の合図で「南無妙法蓮華経」という題目に節をつけて繰り返しながら踊るもので、送り火前日の夜にも行われる。また、題目踊の後には、近世になって流行った盆踊りであるさし踊（市登録無形民俗文化財）が踊られる。</p> <p>「船形万燈籠送り火」は、麓にある西方寺(浄土宗)と船形万灯籠保存会が中心になって維持している。「大文字送り火」同様に、西方寺で護摩木の受け付けを行っており、当日は午後8時15分に点火され、その後、境内では六斎念仏（国指定重要無形民俗文化財）が行われる。</p> <p>西方寺は、承和14年（847）円仁の創建と伝えられ、正和年間（1312～17）道空法如が中興して天台宗から浄土宗に改めた。</p> <p>六斎念仏は、鉦や太鼓を打って囃し、念仏を唱えながら踊る民俗芸能である。平安中期、空也が民衆教化のため始めたと言われる踊り念仏が、中世以降芸能化したもので、もとは六斎日（毎月8・14・15・23・29・30日）に行った。</p>

新 (P90)	旧 (P90)
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 180px; height: 180px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">写真 2-25 火床 (左大文字)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">写真 2-26 準備風景</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">写真 2-27 送り火の日の玄関</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 180px; height: 180px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">写真 2-25 火床 (左大文字)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">写真 2-26 準備風景</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 100px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">写真省略</div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">写真 2-27 送り火の日の玄関</p>
<p>京都の家々では、点火の 때가 近づくと、照明を落とし、家の物干し場やベランダ、あるいは河川敷や橋の上などに出かけていく。このときには、近在あるいは遠方からも親戚縁者が集い、宴を喜び、冥府に帰る祖先を偲ぶ。夜の暗さの中に、五山の灯が赤々と灯ると見物の人々の間から静かなどよめきが湧き上がる。京都の町全体をしめやかに彩る五山の送り火で、京都中の精霊を一斉に冥府に送ると、夏は終わり、町はにわか秋めく。</p> <p>(I) 秋 (9月～11月)</p> <p>a 時代祭</p> <p>明治28年(1895)、平安遷都1100年を記念して平安神宮が創建された。その時、平安神宮の大祭、建造物、神苑の保存のため、市民により平安講社が組織され、記念行事として時代祭が始まった。今日の市民祭の先駆けである。祭が行われる10月22日は、桓武天皇が平安京に都を移した日であり、いわば、京都の誕生日である。その日に行われる時代祭に「一目で京の都の歴史と文化が理解できるものを」「京都をおいて他にはまねのできないものを」という市民の心意気を感じる。</p> <p>(a) 祭の概要</p> <p>祭の場となる平安神宮は、平安京遷都千百年記念祭の一環として、岡崎で開催されることになった第4回国勸業博覧会の会場に計画された。神号を平安神宮、社格を官幣大社と位置付けられることになり、桓武天皇の神霊が遷され祀られることになった。その後、幕末の孝明天皇も合祀され、今日に</p>	<p>京都の家々では、点火の 때가 近づくと、照明を落とし、家の物干し場やベランダ、あるいは河川敷や橋の上などに出かけていく。このときには、近在あるいは遠方からも親戚縁者が集い、宴を喜び、冥府に帰る祖先を偲ぶ。夜の暗さの中に、五山の灯が赤々と灯ると見物の人々の間から静かなどよめきが湧き上がる。京都の町全体をしめやかに彩る五山の送り火で、京都中の精霊を一斉に冥府に送ると、夏は終わり、町はにわか秋めく。</p> <p>(I) 秋 (9月～11月)</p> <p>a 時代祭</p> <p>明治28年(1895)、平安遷都1100年を記念して平安神宮が創建された。その時、平安神宮の大祭、建造物、神苑の保存のため、市民により平安講社が組織され、記念行事として時代祭が始まった。今日の市民祭の先駆けである。祭が行われる10月22日は、桓武天皇が平安京に都を移した日であり、いわば、京都の誕生日である。その日に行われる時代祭に「一目で京の都の歴史と文化が理解できるものを」「京都をおいて他にはまねのできないものを」という市民の心意気を感じる。</p> <p>(a) 祭の概要</p> <p>祭の場となる平安神宮は、平安京遷都千百年記念祭の一環として、岡崎で開催されることになった第4回国勸業博覧会の会場に計画された。神号を平安神宮、社格を官幣大社と位置付けられることになり、桓武天皇の神霊が遷され祀られることになった。その後、幕末の孝明天皇も合祀され、今日に</p>

新 (P91)

至っている。

この祭りの特色は、神幸祭、還幸祭などの神儀のほかに、時代祭風俗行列（市登録無形民俗文化財）が行われることである。明治維新から遡り、延暦時代まで、順次、風俗、文物の変遷をきわめて忠実に再現する。平成19年より、天皇に謀反を起こした政権ということで行列に入っていなかった室町時代の2つの行列が加わり、20列、2000人、長さ2kmの行列となった。調度、衣装、祭具は1万2千点に及び、綿密な時代考証が重ねられ、京都が1千年の間、都として培ってきた伝統工芸の粋を集めて復元されたものである。まさにその時代にタイムスリップしたような、生きた時代絵巻が繰り広げられる。

行列は正午に京都御苑を出発し、烏丸通、御池通、三条通、神宮道を経て、平安神宮（市指定文化財・国登録有形文化財）へ向かう。

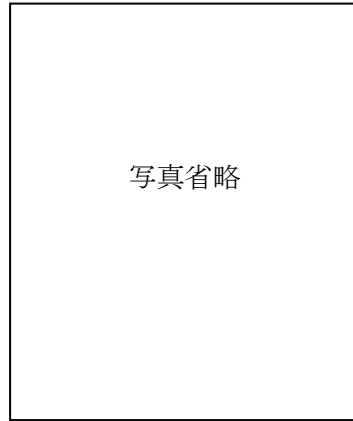


写真 2-28 時代祭 風俗行列 1

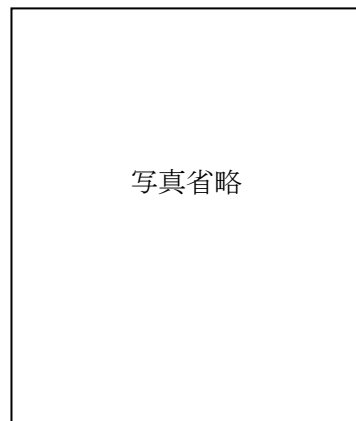


写真 2-29 時代祭 風俗行列 2

(b) 祭の運営・平安講社

この壮大な祭事を運営しているのが、市民の組織、平安講社である。

平安講社は、平安神宮と神苑、さらには時代祭の維持や崇敬者の組織化を目指して平安京遷都千百年記念祭協賛会の幹事会が設立を提案し、明治28年（1895）に発足した。当初は、市民が1日1厘の賽銭を奉納する提案であった。講社の組織は、当時の京都の行政区分に従い上京区、下京区、

おたぎくん かどのぐん
愛宕郡、葛野郡の4地区を6「社」に区分し、各社がそれぞれの行列を担当することとした。

その後、市域の拡大に伴い平安講社も大きくなり、今日では10社から成る。そして各社は、概ね20前後の元学区を単位とする「組」からなり、各組が輪番でその年の行列を担当する。したがって、各元学区は、概ね20年に一度、大役が回ってくることになる。その役が回ってくると、元学区では、当該年度の行列にかかる費用の一切を負担する必要がある。このため、多く

旧 (P91)

至っている。

この祭りの特色は、神幸祭、還幸祭などの神儀のほかに、時代祭風俗行列（市登録無形民俗文化財）が行われることである。明治維新から遡り、延暦時代まで、順次、風俗、文物の変遷をきわめて忠実に再現する。平成19年より、天皇に謀反を起こした政権ということで行列に入っていなかった室町時代の2つの行列が加わり、20列、2000人、長さ2kmの行列となった。調度、衣装、祭具は1万2千点に及び、綿密な時代考証が重ねられ、京都が1千年の間、都として培ってきた伝統工芸の粋を集めて復元されたものである。まさにその時代にタイムスリップしたような、生きた時代絵巻が繰り広げられる。

行列は正午に京都御苑を出発し、烏丸通、御池通、三条通、神宮道を経て、平安神宮（市指定文化財・国登録有形文化財）へ向かう。



写真 2-28 時代祭 風俗行列 1

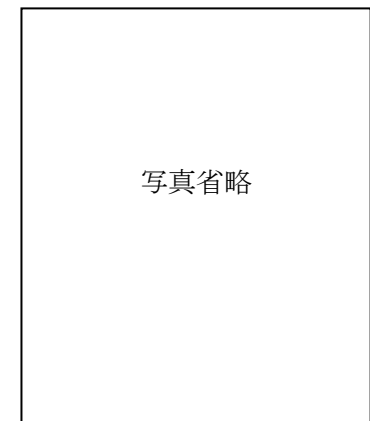


写真 2-29 時代祭 風俗行列 2

(b) 祭の運営・平安講社

この壮大な祭事を運営しているのが、市民の組織、平安講社である。

平安講社は、平安神宮と神苑、さらには時代祭の維持や崇敬者の組織化を目指して平安京遷都千百年記念祭協賛会の幹事会が設立を提案し、明治28年（1895）に発足した。当初は、市民が1日1厘の賽銭を奉納する提案であった。講社の組織は、当時の京都の行政区分に従い上京区、下京区、愛宕郡（おたぎくん）、葛野郡（かどのぐん）の4地区を6「社」に区分し、各社がそれぞれの行列を担当することとした。

その後、市域の拡大に伴い平安講社も大きくなり、今日では10社から成る。そして各社は、概ね20前後の元学区を単位とする「組」からなり、各組が輪番でその年の行列を担当する。したがって、各元学区は、概ね20年に一度、大役が回ってくることになる。その役が回ってくると、元学区では、当該年度の行列にかかる費用の一切を負担する必要がある。このため、多く

新 (P92)

旧 (P92)

の元学区では、20年に一度の経費を確保するため、元学区全体で古紙回収に取り組む。このことから、時代祭は京都市民の日常に深く意識された市民祭といえることができる。

さて、当番の前年には、時代祭の実行委員会が学区に設けられ、当番に当たっている学区の様子を逐一、見学することにより翌年の行事内容を確認していくのである。その結果を踏まえて、役員体制と業務内容を確定し、当番に備える。

各社には、専属の「お祭り屋」が存在する。彼らは、その社の装束、用具の一切を維持修理などを含めて管理する。行列に必要な馬や学生ボランティア、「奴」など特殊な技能を持つ人を手配し、装束に慣れていない人には着付けも教える。平安神宮からの帰りのバスや弁当などの手配も行う。彼らの存在なしには、時代祭は運営できないほど大切な存在である。多くは世襲のように代々、その業務を引き継いでいる。



写真 2-30 学校での準備

さて、当番の年である。自治連合会会長が運営委員長となり、女性会等、各種団体の役員が運営委員となり、当日の進行表と役割分担表を作成する。この際にも、「お祭り屋」の指導と手伝いが欠かせない。そして、何度もリハーサルを繰り返す。その時に会場となるのは、学校である。

そして、祭の1週間前、各学区の代表者は平安神宮に集まり、行列の無事を神前に祈願する時代祭宣状祭を営む。祭儀終了後に宮司から行列への参役の任命書にあたる宣状が授与される。その夜、地元の学校に行列に参役する運営委員が集まり、着付けのリハーサルを行う。「お祭り屋」のメンバーが手分けをして、手際よく^{わらじ}草鞋、傘、^{きやはん}脚絆、手甲、袴、刀などの着付けを教えていく。前日に、もう一度リハーサルをし、祭の当日には朝着付けを行い、学区に集合する。

当日、学校は大変な賑わいとなる。朝から、百名を超える学生ボランティアが集合し、女性会のメンバーが中心となって、次々と着付けをしていく。そうこうしているうちに、馬も集合する。運動場で祭の行進のリハーサルをした後、学区内を練り歩き、祭に支援をした学区民にお披露目をする。そこから、京都御所の集合場所に集まり、行列のスタートに備える。

各社が担当する行列は10列であり、残りの10列は、京都青年会議所、五花街のお茶屋組合、京都料飲組合、大原農協婦人会、白川女風俗保存会など、ゆかりの団体が担当する。

の元学区では、20年に一度の経費を確保するため、元学区全体で古紙回収に取り組む。このことから、時代祭は京都市民の日常に深く意識された市民祭といえることができる。

さて、当番の前年には、時代祭の実行委員会が学区に設けられ、当番に当たっている学区の様子を逐一、見学することにより翌年の行事内容を確認していくのである。その結果を踏まえて、役員体制と業務内容を確定し、当番に備える。

各社には、専属の「お祭り屋」が存在する。彼らは、その社の装束、用具の一切を維持修理などを含めて管理する。行列に必要な馬や学生ボランティア、「奴」など特殊な技能を持つ人を手配し、装束に慣れていない人には着付けも教える。平安神宮からの帰りのバスや弁当などの手配も行う。彼らの存在なしには、時代祭は運営できないほど大切な存在である。多くは世襲のように代々、その業務を引き継いでいる。



写真 2-30 学校での準備

さて、当番の年である。自治連合会会長が運営委員長となり、女性会等、各種団体の役員が運営委員となり、当日の進行表と役割分担表を作成する。この際にも、「お祭り屋」の指導と手伝いが欠かせない。そして、何度もリハーサルを繰り返す。その時に会場となるのは、学校である。

そして、祭の1週間前、各学区の代表者は平安神宮に集まり、行列の無事を神前に祈願する時代祭宣状祭を営む。祭儀終了後に宮司から行列への参役の任命書にあたる宣状が授与される。その夜、地元の学校に行列に参役する運営委員が集まり、着付けのリハーサルを行う。「お祭り屋」のメンバーが手分けをして、手際よく^{わらじ}草鞋、傘、^{きやはん}脚絆、手甲、袴、刀などの着付けを教えていく。前日に、もう一度リハーサルをし、祭の当日には朝着付けを行い、学区に集合する。

当日、学校は大変な賑わいとなる。朝から、百名を超える学生ボランティアが集合し、女性会のメンバーが中心となって、次々と着付けをしていく。そうこうしているうちに、馬も集合する。運動場で祭の行進のリハーサルをした後、学区内を練り歩き、祭に支援をした学区民にお披露目をする。そこから、京都御所の集合場所に集まり、行列のスタートに備える。

各社が担当する行列は10列であり、残りの10列は、京都青年会議所、五花街のお茶屋組合、京都料飲組合、大原農協婦人会、白川女風俗保存会など、ゆかりの団体が担当する。

新 (P93)

b 鞍馬の火祭

鞍馬の火祭は、鞍馬の由岐神社（重要文化財）において毎年10月に行われる祭礼で、平安末期、祭神を京都御所から鞍馬の里に迎えた時の、村人がかがり火を焚いて迎えた故事によるとされており、市の無形民俗文化財に登録されている。また、江戸時代の様子が、宝暦4年（1814）の「鞍馬村神事元旧記」に詳しく記載されており、当時の神事の模様がうかがえる。

由岐神社は、社伝では天慶3年（940）、王城の北方鎮護のため宮中より勧請したといわれ、

国家の非常時、天皇の病気の時、社前に^{ゆき}鞆を奉納

したため鞆神社と呼ばれたという。

鞍馬寺は、寺伝では、宝亀元年（770）鑑真の門弟鑑禎が、霊夢に感じて毘沙門天を安置したのに始まり、延暦15年（769）桓武天皇の勅をうけ、藤原伊勢人が伽藍を造営、北方鎮護の道場としたという。寛平年間（889～98）法相宗から真言宗へ転じ、天永年間（1110～1113）には天台宗となった。

昭和22年（1947）、天台宗から分離独立して鞍馬弘教を立教開宗し、2年後その総本山となった。

火祭の準備は何ヶ月も前から始められる。宮司・役員等による打ち合わせも早くから回を重ねて行われ、祭が支障なく進行すべく、綿密な計画が立てられていく。

祭も目前となると、各家では格子をはずし、丁寧な清掃する。屋根・壁等の傷みも祭の日に合わせて修理されるなど、鞍馬の人々の、祭を大切に

する思いが偲ばれる。祭の当日は、夕方になると各家の門口にかがり火が焚かれ、午後6時から

子供の手松明が町を練り、やがて武者わらじを履いた里人たちが大松明を担いで、「サイレイ、サイリョウ」の掛け声とともに町内を練り由岐神社に集まる。その火の中を2基の神輿が渡御し壮観を極める。



図 2-24 鞍馬の火祭



写真 2-31 鞍馬の火祭

旧 (P93)

b 鞍馬の火祭

鞍馬の火祭は、鞍馬の由岐神社（重要文化財）において毎年10月に行われる祭礼で、平安末期、祭神を京都御所から鞍馬の里に迎えた時の、村人がかがり火を焚いて迎えた故事によるとされており、市の無形民俗文化財に登録されている。また、江戸時代の様子が、宝暦4年（1814）の「鞍馬村神事元旧記」に詳しく記載されており、当時の神事の模様がうかがえる。

由岐神社は、社伝では天慶3年（940）、王城の北方鎮護のため宮中より勧請したといわれ、

国家の非常時、天皇の病気の時、社前に^{ゆき}鞆を奉納したため鞆神社と呼ばれたという。

鞍馬寺は、寺伝では、宝亀元年（770）鑑真の門弟鑑禎が、霊夢に感じて毘沙門天を安置したのに始まり、延暦15年（769）桓武天皇の勅をうけ、藤原伊勢人が伽藍を造営、北方鎮護の道場としたという。寛平年間（889～98）法相宗から真言宗へ転じ、天永年間（1110～1113）には天台宗となった。

昭和22年（1947）、天台宗から分離独立して鞍馬弘教を立教開宗し、2年後その総本山となった。

火祭の準備は何ヶ月も前から始められる。宮司・役員等による打ち合わせも早くから回を重ねて行われ、祭が支障なく進行すべく、綿密な計画が立てられていく。

祭も目前となると、各家では格子をはずし、丁寧に清掃する。屋根・壁等の傷みも祭の日に合わせて修理されるなど、鞍馬の人々の、祭を大切に

する思いが偲ばれる。祭の当日は、夕方になると各家の門口にかがり火が焚かれ、午後6時から

子供の手松明が町を練り、やがて武者わらじを履いた里人たちが大松明を担いで、「サイレイ、サイリョウ」の掛け声とともに町内を練り由岐神社に集まる。その火の中を2基の神輿が渡御し壮観を極める。



図 2-24 鞍馬の火祭



写真 2-31 鞍馬の火祭

新 (P99)

旧 (P99)

7月	1～31日	祇園祭<八坂神社・各山鉾町>	
	7日	七夕祭<北野天満宮・白峯神宮ほか>	
	土用の丑の日	きゅうり封じ<蓮華寺>	空海が病をキュウリに封じこめたという伝説にちなんだ行事
	25日	鹿ヶ谷カボチャ供養<安楽寺>	
	31日	千日詣り<愛宕神社>	
8月	1日	八朔	各花街などでは,家元や出入りのお茶屋へ芸舞妓が中元の挨拶にまわる。
	7～10日	六道まいり<六道珍皇寺>	
	15～16日	松ヶ崎題目踊<涌泉寺>	
	16日	京都五山送り火<如意ヶ嶽ほか>	
	16日	嵐山万灯流し<嵐山渡月橋>	
	16日, 25日など	六斎念仏<壬生寺・吉祥院天満宮ほか>	
	23, 24日	千灯供養<化野念仏寺>	
	15日	松上げ<花脊>	
	24日	松上げ<広河原・雲ヶ畑>	
	24日	久多花笠踊<志古淵神社>	
	9月	第1日曜日	八朔祭<松尾大社ほか>
9日		烏相撲<上賀茂神社>	
中秋の日		名月管弦祭<下鴨神社>	(旧暦の8月15日に行うもの)
中秋の日		大覚寺観月の夕べ<大覚寺>	月見を楽しむ平安貴族の優雅な遊びを再現した催し
第3土・日・月(祝)		萩まつり<梨木神社>	
9月下旬から10月初旬ごろ		神幸祭<御香宮神社>	

7月	1～31日	祇園祭<八坂神社・各山鉾町>	
	7日	七夕祭<北野天満宮・白峯神宮ほか>	
	土用の丑の日	きゅうり封じ<蓮華寺>	空海が病をキュウリに封じこめたという伝説にちなんだ行事
	25日	鹿ヶ谷カボチャ供養<安楽寺>	
	31日	千日詣り<愛宕神社>	
8月	1日	八朔	各花街などでは,家元や出入りのお茶屋へ芸舞妓が中元の挨拶にまわる
	7～10日	六道まいり<六道珍皇寺>	
	15～16日	松ヶ崎題目踊<涌泉寺>	
	16日	京都五山送り火<如意ヶ嶽ほか>	
	16日	嵐山万灯流し<嵐山渡月橋>	
	16日, 25日など	六斎念仏<壬生寺・吉祥院天満宮ほか>	
	23, 24日	千灯供養<化野念仏寺>	
	15日	松上げ<花脊>	
	24日	松上げ<広河原・雲ヶ畑>	
	24日	久多花笠踊<志古淵神社>	
	9月	第1日曜日	八朔祭<松尾大社ほか>
9日		烏相撲<上賀茂神社>	
中秋の日		名月管弦祭<下鴨神社>	(旧暦の8月15日に行うもの)
中秋の日		大覚寺観月の夕べ<大覚寺>	月見を楽しむ平安貴族の優雅な遊びを再現した催し
第3土・日・月(祝)		萩まつり<梨木神社>	
9月下旬から10月初旬ごろ		神幸祭<御香宮神社>	

新 (P100)

旧 (P100)

10月	1～5日	瑞饋祭<北野天満宮>	
	体育の日と前日・15日	粟田神社大祭<粟田神社>	
	体育の日の前日	赦免地踊<秋元神社>	
	第3日曜日	二十五菩薩お練供養<即成院>	
	22日	時代祭<京都御所・平安神宮>	
	22日	鞍馬の火祭	
11月	1日	亥子祭<護王神社>	平安時代から伝わる ^{げんちよもち} 亥猪餅の儀式を再現した神事
	5～15日	お十夜<真如堂>	
	第2日曜日	嵐山もみじ祭<嵐山・大堰川一帯>	
	23日	^{しおがま} 塩竈祭<十輪寺>	在原業平の昔のいわれにちなんだ行事
	23日	筆供養<正覚庵>	
	26日	御茶壺奉献祭<北野天満宮>	豊臣秀吉の「北野大茶の湯」にちなんで、新茶をいれた茶つぼを奉納する行事
12月	8日	針供養<針神社・法輪寺ほか>	
	7・8日	大根焚き<千本釈迦堂>	
	9・10日	鳴滝の大根焚き<了徳寺>	
	13～30日	空也踊躍念仏(かくれ念仏)<六波羅蜜寺>	
	14日	山科義士祭<大石神社ほか>	赤穂浪士47人の討ち入りを再現して行列する行事
	21日	^{しま} 終い弘法<東寺>	弘法大師の命日にあたる21日毎月行われる縁日のうち、12月は終い弘法、1月は ^{初弘法} と呼ばれ、正月準備をする大勢の参拝客でにぎわう。
	31日	おけらまいり<八坂神社>	
	31日	除夜の鐘<知恩院ほか各寺院>	

10月	1～5日	瑞饋祭<北野天満宮>	
	体育の日と前日・15日	粟田神社大祭<粟田神社>	
	体育の日の前日	赦免地踊<秋元神社>	
	第3日曜日	二十五菩薩お練供養<即成院>	
	22日	時代祭<京都御所・平安神宮>	
	22日	鞍馬の火祭	
11月	1日	亥子祭<護王神社>	平安時代から伝わる ^{げんちよもち} 亥猪餅の儀式を再現した神事
	5～15日	お十夜<真如堂>	
	第2日曜日	嵐山もみじ祭<嵐山・大堰川一帯>	
	23日	^{しおがま} 塩竈祭<十輪寺>	在原業平の昔のいわれにちなんだ行事。
	23日	筆供養<正覚庵>	
	26日	御茶壺奉献祭<北野天満宮>	豊臣秀吉の「北野大茶の湯」にちなんで、新茶をいれた茶つぼを奉納する行事
12月	8日	針供養<針神社・法輪寺ほか>	
	7・8日	大根焚き<千本釈迦堂>	
	9・10日	鳴滝の大根焚き<了徳寺>	
	13～30日	空也踊躍念仏(かくれ念仏)<六波羅蜜寺>	
	14日	山科義士祭<大石神社ほか>	赤穂浪士47人の討ち入りを再現して行列する行事
	21日	^{しま} 終い弘法<東寺>	弘法大師の命日にあたる21日毎月行われる縁日のうち、12月は終い弘法、1月は ^{初攻防} と呼ばれ、正月準備をする大勢の参拝客でにぎわう。
	31日	おけらまいり<八坂神社>	
	31日	除夜の鐘<知恩院ほか各寺院>	

新 (P106)	旧 (P106)
<p>それぞれが自主的に柵と門の「惣構」で町を囲み外敵の進入を防いだ。これが自治の始まりである。</p> <p>泰平の世が訪れた江戸時代に京都は幕府の直轄領となり、京都所司代の支配下に入ったが、町、町組による自治は大幅に認められていた。</p> <p>当時は、現代ほど移動の自由はなかったとされるが、比較的頻繁に居住者は入れ替わっていたことが記録されている。50世帯ほどの町内で、年に2世帯ほどが入れ替わっていた。このように、頻繁に人が入れ替わる状況で、町の自治を継続的に実施するためには、町の暮らしのルールを明文化する必要に迫られ、これが「町式目」「町定」として古文書に残されている。</p> <p>この「町式目」「町定」は町毎に様々な取り決めがなされており、新しく町に入ってくる人の<u>コントロール</u>に関する規定、町自治の財源、町会の開催規定などは、ほとんどの町で定められている。同業者の町では同業者、異業種が集積する町では異業種の者しか転入を認めず、しかも、若狭や近江など、地域に住まう人々の出身地から、縁故を頼って転入してくるのが一般的であったようである。お互い様で、分を守る京都の町衆ならではの知恵である。</p> <p>主要な自治の財源は、20分の1税ともいわれ、新たに町内の土地・建物を購入して転入した者が、その不動産価格の20分の1を町内に納めることとされた。そのほかに、各家から応分の負担を求めており、その額は、借家、持家によって、あるいは間口によって異なる合理的なものであったようである。</p> <p>その他にも、町内で発生した火災時の対応方策（通りの防火井戸の管理、消火活動に参加しない家への罰金）や宅地のレベル設定、隣家同士の妻面の屋根の処理方法、町内の孤児の養育に関する規定などが細かく規定されていた。</p> <p>また、通りが交わる辻には木戸門と番屋が設けられ、防犯のため夜間は閉鎖された。こうした辻の修理費用や番屋の番人の費用なども規定を設けて町が負担をしている。</p> <p>京町家の建築様式は、直接的に町式目に規定されたのではないが、こうしたお互い様で、分を守ることにより秩序を維持していくという自治のルールを背景に、建築技術の標準化、合理化が図られた結果、統一感のある建築様式が確立した。</p> <p>(ウ) 現代に生きるコミュニティ</p> <p>明治の中央集権政府もこうした自治組織を積極的に活用した。町組みを改組して番組を作らせ、町の自治に取り組みさせた。明治時代に定められた町式目にも、自治に必要な財源として独自の税を徴収することが規定されていた。</p> <p>何よりも重要な出来事として、都が東京に移ることにより京都が衰退することを懸念した町衆が、資金を工面して全国初の小学校を設立したことである。子供たちの教育に京都の将来をかけたのである。当時、66あった番組に64校が設立された（2町共立の小学校が2校あった）ことから、「番組小学校」と呼ばれて</p>	<p>それぞれが自主的に柵と門の「惣構」で町を囲み外敵の進入を防いだ。これが自治の始まりである。</p> <p>泰平の世が訪れた江戸時代に京都は幕府の直轄領となり、京都所司代の支配下に入ったが、町、町組による自治は大幅に認められていた。</p> <p>当時は、現代ほど移動の自由はなかったとされるが、比較的頻繁に居住者は入れ替わっていたことが記録されている。50世帯ほどの町内で、年に2世帯ほどが入れ替わっていた。このように、頻繁に人が入れ替わる状況で、町の自治を継続的に実施するためには、町の暮らしのルールを明文化する必要に迫られ、これが「町式目」「町定」として古文書に残されている。</p> <p>この「町式目」「町定」は町毎に様々な取り決めがなされており、新しく町に入ってくる人の<u>コントロール</u>に関する規定、町自治の財源、町会の開催規定などは、ほとんどの町で定められている。同業者の町では同業者、異業種が集積する町では異業種の者しか転入を認めず、しかも、若狭や近江など、地域に住まう人々の出身地から、縁故を頼って転入してくるのが一般的であったようである。お互い様で、分を守る京都の町衆ならではの知恵である。</p> <p>主要な自治の財源は、20分の1税ともいわれ、新たに町内の土地・建物を購入して転入した者が、その不動産価格の20分の1を町内に納めることとされた。そのほかに、各家から応分の負担を求めており、その額は、借家、持家によって、あるいは間口によって異なる合理的なものであったようである。</p> <p>その他にも、町内で発生した火災時の対応方策（通りの防火井戸の管理、消火活動に参加しない家への罰金）や宅地のレベル設定、隣家同士の妻面の屋根の処理方法、町内の孤児の養育に関する規定などが細かく規定されていた。</p> <p>また、通りが交わる辻には木戸門と番屋が設けられ、防犯のため夜間は閉鎖された。こうした辻の修理費用や番屋の番人の費用なども規定を設けて町が負担をしている。</p> <p>京町家の建築様式は、直接的に町式目に規定されたのではないが、こうしたお互い様で、分を守ることにより秩序を維持していくという自治のルールを背景に、建築技術の標準化、合理化が図られた結果、統一感のある建築様式が確立した。</p> <p>(ウ) 現代に生きるコミュニティ</p> <p>明治の中央集権政府もこうした自治組織を積極的に活用した。町組みを改組して番組を作らせ、町の自治に取り組みさせた。明治時代に定められた町式目にも、自治に必要な財源として独自の税を徴収することが規定されていた。</p> <p>何よりも重要な出来事として、都が東京に移ることにより京都が衰退することを懸念した町衆が、資金を工面して全国初の小学校を設立したことである。子供たちの教育に京都の将来をかけたのである。当時、66あった番組に64校が設立された（2町共立の小学校が2校あった）ことから、「番組小学校」と呼ばれて</p>

新 (P111)

(イ) 京町家の知恵：地域とのかかわり

格子と通り庭によって内と外を繋ぐ京町家は、扉一枚で内と外を区切っている現代建築と異なり、内と外は融通無碍で変幻自在である。

平入りの大屋根と1階に設けられた深い通り庇は、京町家の外観の特徴の一つであるが、それらは、土壁に雨が吹き付けることを防止すると同時に、夏の強い日射を遮り、冬には太陽光の恩恵を屋内に導いてきた。そして、その通り庇の下の空間は、今日でも雨宿りの場であり、ばったり床几を出して商品展示や休憩の場として、さらに、ある時は幔幕を張ってお祭りの空間として、多様に使われ、公的な通り空間と私的な居住空間をつなぐ半公共的な空間を形成している。



写真 2-46 ばったり床几
出典 「京町家の再生」

格子は機能面でも優れており、道ゆく人からは内側が見えにくいですが、家の中からは外の様子がよく見えるようにできており、柔らかい防犯装置としての機能を持っている。一方、その店の様子を知りたい人には、その前に立ち止まると中の様子がよく見えるようにショーウィンドウの役割も果たしている。

更に、通り庭は店の一部や接遇の場として、やわらかく外に開いている空間である。

通り庭のうち、屋内に入っただけの部分には誰でも入れる場所であり、どんな用事の人もまずはここまで入って来意を告げるのである。多くは立ち話であるが、少し話が込み入ってくると表の間に腰掛けて話し込み、お茶の一杯でも接遇がなされる。さらに通り庭を奥に進み、台所と一体になった空間は、家族の食事や団欒の場である中に面しており、相当に家族と親しい人が立ち入る場である。

このように通り庭は、屋内にあっても半公共的な空間であり、靴を脱ぐことなく大方の接遇はこの場でなされ、家族の多くの者が接遇を共有することにより、家族ぐるみの町内付き合いを支え、コミュニティを育んできた。

また、通り庇や格子、通り庭によって内と外との間の流動的なつながりが生まれることによって、通りもまた、暮らしと離れた場所として存在するのではなく、生活空間の一部として、更には地域の交流の場として利用される。そこは、子供の遊び場であり、大人の社交場でもある。

このように、地域とのかかわりの知恵として形成された、半公共的な空間を持つ奥行き深い京町家の構造と、そこに見ることのできる人々の暮らしや通りでの営みが京町家の町並みと一体となって、京都の長い歴史の中で培われた都市居住の文化が今でも日常として息づいていることを感じる事ができる。

旧 (P111)

格子と通り庭によって内と外を繋ぐ京町家は、扉一枚で内と外を区切っている現代建築と異なり、内と外は融通無碍で変幻自在である。

平入りの大屋根と1階に設けられた深い通り庇は、京町家の外観の特徴の一つであるが、それらは、土壁に雨が吹き付けることを防止すると同時に、夏の強い日射を遮り、冬には太陽光の恩恵を屋内に導いてきた。そして、その通り庇の下の空間は、今日でも雨宿りの場であり、ばったり床几を出して商品展示や休憩の場として、さらに、ある時は幔幕を張ってお祭りの空間として、多様に使われ、公的な通り空間と私的な居住空間をつなぐ半公共的な空間を形成している。



写真 2-46 ばったり床几
出典 「京町家の再生」

格子は機能面でも優れており、道ゆく人からは内側が見えにくいですが、家の中からは外の様子がよく見えるようにできており、柔らかい防犯装置としての機能を持っている。一方、その店の様子を知りたい人には、その前に立ち止まると中の様子がよく見えるようにショーウィンドウの役割も果たしている。

更に、通り庭は店の一部や接遇の場として、やわらかく外に開いている空間である。

通り庭のうち、屋内に入っただけの部分には誰でも入れる場所であり、どんな用事の人もまずはここまで入って来意を告げるのである。多くは立ち話であるが、少し話が込み入ってくると表の間に腰掛けて話し込み、お茶の一杯でも接遇がなされる。さらに通り庭を奥に進み、台所と一体になった空間は、家族の食事や団欒の場である中に面しており、相当に家族と親しい人が立ち入る場である。

このように通り庭は、屋内にあっても半公共的な空間であり、靴を脱ぐことなく大方の接遇はこの場でなされ、家族の多くの者が接遇を共有することにより、家族ぐるみの町内付き合いを支え、コミュニティを育んできた。

また、通り庇や格子、通り庭によって内と外との間の流動的なつながりが生まれることによって、通りもまた、暮らしと離れた場所として存在するのではなく、生活空間の一部として、更には地域の交流の場として利用される。そこは、子供の遊び場であり、大人の社交場でもある。

このように、地域とのかかわりの知恵として形成された、半公共的な空間を持つ奥行き深い京町家の構造と、そこに見ることのできる人々の暮らしや通りでの営みが京町家の町並みと一体となって、京都の長い歴史の中で培われた都市居住の文化が今でも日常として息づいていることを感じる事ができる。

新 (P113)	旧 (P113)
<p>ある。</p> <p>a 地藏盆</p> <p>京都の町中を歩くと、いたるところに美しい季節の花が供えられた「お地藏さん」に出会う。お地藏さんは子供たちの健やかな成長を見守ると同時に、まちの鎮守としても親しまれており、各町内に少なくとも1体の「お地藏さん」が祀られている。立派な京町家の一角に、あるいはマンションの一角に、大きさも祀る社も様々であるが、美しい花が絶えることはない。決まった人がお世話をすることが多いが、その人が亡くなられた場合などには、当番でお世話をするケースも増えている。朝な夕なに道行く人々が手を合わせて通り過ぎてゆく光景は、特別なものではない。</p> <p>8月下旬に催される「地藏盆」は、どこの町内でも必ずといっていいほど行われている夏の終わりを告げる京都の風物詩である。地藏信仰は平安末期から貴族の間で広まり、次第に民間でも石地藏尊を祀るようになった。地藏菩薩は地獄の鬼から子供を守るという信仰により、この日子供のための行事を行う習慣が生まれた。江戸時代にはもっぱら「地藏祭」と呼ばれていた。</p> <p>本来、地藏菩薩の縁日にあたる8月の23、24の両日に行われる会式のことを「地藏盆」というが、近年は、勤め人が多くなったことから、その前後の土曜日、日曜日に催すことが多くなっている。</p> <p>毎年、地藏盆が近付くと、町内の人々は地藏盆の準備に追われる。前日には、お地藏さんを清め、お祭りの飾りを施す。多くは、警察の許可を得て、路上でお飾りを施す。中には、地藏盆用に確保した個人宅で飾る場合もあるが、通りからもお参りが可能なようなしつらえになっている。中央の地藏をきれいに飾りつけ、花や、お神酒、ご飯、山海の恵みを飾り、赤い幔幕を張りまわす。さらに、子供たちの名前が書き込まれた提灯がその周りを取り囲むように飾り付けられ「地藏盆」の雰囲気盛り上げる。</p> <p>当日は、子供たちのため、金魚釣り、西瓜割りなど様々な催しを工夫をこらして行う。このうち、「^{ふごお}畚下ろし」と言われる福引きが行われているところもある。これは、家の2階に景品が入った多くの袋が備えられ、その端から紐が伸びて滑車をくぐって表通りで束ねられる。子供たちは、順番に紐を選んで手元に引き寄せる仕組みである。古くは余興に浄瑠璃もあった。</p> <p>そして、近くのお寺から僧侶に来てもらって読経をあげてもらうなど、子供たちの健やかな成長を祈念する。町中では、今でも「<u>数珠繰り</u>」を行う風習が残っているところもある。通称「百万遍の数珠廻し」と言って、子供たちが、直径2～3メートルの数珠を持って車座に座り、導師の読経に合わせて数珠を廻す。</p> <p>そして夜にはお地藏さんの前に大人が集まり、子供たちのこと、時にはまちづくりのことなど様々な会話を繰り広げ、日頃お付き合いのない人同士も打ち</p>	<p>ある。</p> <p>a 地藏盆</p> <p>京都の町中を歩くと、いたるところに美しい季節の花が供えられた「お地藏さん」に出会う。お地藏さんは子供たちの健やかな成長を見守ると同時に、まちの鎮守としても親しまれており、各町内に少なくとも1体の「お地藏さん」が祀られている。立派な京町家の一角に、あるいはマンションの一角に、大きさも祀る社も様々であるが、美しい花が絶えることはない。決まった人がお世話をすることが多いが、その人が亡くなられた場合などには、当番でお世話をするケースも増えている。朝な夕なに道行く人々が手を合わせて通り過ぎてゆく光景は、特別なものではない。</p> <p>8月下旬に催される「地藏盆」は、どこの町内でも必ずといっていいほど行われている夏の終わりを告げる京都の風物詩である。地藏信仰は平安末期から貴族の間で広まり、次第に民間でも石地藏尊を祀るようになった。地藏菩薩は地獄の鬼から子供を守るという信仰により、この日子供のための行事を行う習慣が生まれた。江戸時代にはもっぱら「地藏祭」と呼ばれていた。</p> <p>本来、地藏菩薩の縁日にあたる8月の23、24の両日に行われる会式のことを「地藏盆」というが、近年は、勤め人が多くなったことから、その前後の土曜日、日曜日に催すことが多くなっている。</p> <p>毎年、地藏盆が近付くと、町内の人々は地藏盆の準備に追われる。前日には、お地藏さんを清め、お祭りの飾りを施す。多くは、警察の許可を得て、路上でお飾りを施す。中には、地藏盆用に確保した個人宅で飾る場合もあるが、通りからもお参りが可能なようなしつらえになっている。中央の地藏をきれいに飾りつけ、花や、お神酒、ご飯、山海の恵みを飾り、赤い幔幕を張りまわす。さらに、子供たちの名前が書き込まれた提灯がその周りを取り囲むように飾り付けられ「地藏盆」の雰囲気盛り上げる。</p> <p>当日は、子供たちのため、金魚釣り、西瓜割りなど様々な催しを工夫をこらして行う。このうち、「^{ふごお}畚下ろし」と言われる福引きが行われているところもある。これは、家の2階に景品が入った多くの袋が備えられ、その端から紐が伸びて滑車をくぐって表通りで束ねられる。子供たちは、順番に紐を選んで手元に引き寄せる仕組みである。古くは余興に浄瑠璃もあった。</p> <p>そして、近くのお寺から僧侶に来てもらって読経をあげてもらうなど、子供たちの健やかな成長を祈念する。町中では、今でも「<u>数珠繰り (じゅずくり)</u>」を行う風習が残っているところもある。通称「百万遍の数珠廻し」と言って、子供たちが、直径2～3メートルの数珠を持って車座に座り、導師の読経に合わせて数珠を廻す。</p> <p>そして夜にはお地藏さんの前に大人が集まり、子供たちのこと、時にはまちづくりのことなど様々な会話を繰り広げ、日頃お付き合いのない人同士も打ち</p>

新 (P118)	旧 (P118)
<p>京都御苑という存在を尊び、歴史の舞台が自分たちの暮らしの舞台であることに誇りと喜びを持っている。</p> <p>そして、5月の葵祭や10月の時代祭には、そんな日常の場がハレの舞台に一変する。煌びやかな装束に身をまとった市民が、京都中から集合し、それを見送る祭の関係者、彼らに連れられた芸妓や舞妓などが晴れやかな祭の日を演出する。</p> <p>また、京都御苑は伝統の技を受け継ぐ人々の活躍の場でもある。歴史的な建造物が多く残る京都御苑の施設や風景を維持していくためには、伝統の技を駆使していく必要があり、そのためには伝統の技を持つ職人たちも不可欠である。</p> <p>苑内には、御所周辺を中心にマツが多く植栽されており、建礼門前に広がる松林は、御苑の中でも代表的な風景の一つである。落ち着きのあるマツの剪定にあたっては、「透かし」という技法が取り入れられている。広大な苑地では、ふところ枝を大切に残しながら風通し良くし、自然風に仕立てられる。高木のマツは、長柄という4～5mの竹竿の先にカマやノコを取り付けた道具を使用する。公家邸庭園跡など狭い空間では、限られた空間に収まるようにするため、5～6月に行われる「ミドリ摘み」(新芽を摘むこと)と11～2月に行う「もみ上げ」(古葉を取り除くこと)が非常に大切な作業である。</p> <p>京都御苑におけるマツの手入れがいつごろからの技術であるかは定かではないが、大正大礼時の写真からは、自然にのびのびと枝が垂れているように仕上げる技法が見て取れ、おそらくこの頃からの技法が現在も引継がれているのではないかと推測できる。</p> <p>また、平成17年(2005)、御苑に迎賓館ができたが、その建築に際しては、京都の伝統の技の粋を集めた。大工、左官、造園はもとより、建具、指物、唐紙、和紙、截金、漆、京焼、金属工芸、織物、染などである。さらに竣工後も、彼らが維持管理に関わる仕組みをつくり、日常的なメンテナンスに取り組むことにより、伝統の技の継承と発展に役立っている。特に造園は、毎日の手入れが大切であり、若い職人も熟練した職人を手伝うことにより、少しずつ技を学んでいくことが期待されている。</p> <p>このように、京都御苑は日常的には市民の憩いの場となり、祭事が行われる際にはハレの舞台となり、その広大な敷地や京都御所などの歴史的な建造物と一体となって歴史を感じさせている。また、そこで行われる伝統の技を受け継いだ営みは、歴史舞台である歴史的遺産と一体となって洗練された伝統ある技術の粋を感じさせている。そして人々は、京都御苑と関わりを持つことで、知らず知らずのうちに歴史の重さや伝統に裏付けられた美意識を培っていくのである。</p> <p>イ 二条城 (7) 二条城の今と昔 二条城は、慶長8年(1603)、徳川家康が諸大名に造営を命じ、将軍上洛時</p>	<p>京都御苑という存在を尊び、歴史の舞台が自分たちの暮らしの舞台であることに誇りと喜びを持っている。</p> <p>そして、5月の葵祭や10月の時代祭には、そんな日常の場がハレの舞台に一変する。煌びやかな装束に身をまとった市民が、京都中から集合し、それを見送る祭の関係者、彼らに連れられた芸妓や舞妓などが晴れやかな祭の日を演出する。</p> <p>また、京都御苑は伝統の技を受け継ぐ人々の活躍の場でもある。歴史的な建造物が多く残る京都御苑の施設や風景を維持していくためには、伝統の技を駆使していく必要があり、そのためには伝統の技を持つ職人たちも不可欠である。</p> <p>苑内には、御所周辺を中心にマツが多く植栽されており、建礼門前に広がる松林は、御苑の中でも代表的な風景の一つである。落ち着きのあるマツの剪定にあたっては、「透かし」という技法が取り入れられている。広大な苑地では、ふところ枝を大切に残しながら風通し良くし、自然風に仕立てられる。高木のマツは、長柄という4～5mの竹竿の先にカマやノコを取り付けた道具を使用する。公家邸庭園跡など狭い空間では、限られた空間に収まるようにするため、5～6月に行われる「ミドリ摘み」(新芽を摘むこと)と11～2月に行う「もみ上げ」(古葉を取り除くこと)が非常に大切な作業である。</p> <p>京都御苑におけるマツの手入れがいつごろからの技術であるかは定かではないが、大正大礼時の写真からは、自然にのびのびと枝が垂れているように仕上げる技法が見て取れ、おそらくこの頃からの技法が現在も引継がれているのではないかと推測できる。</p> <p>また、平成17年(2005)、御苑に迎賓館ができたが、その建築に際しては、京都の伝統の技の粋を集めた。大工、左官、造園はもとより、建具、指物、唐紙、和紙、截金、漆、京焼、金属工芸、織物、染などである。さらに竣工後も、彼らが維持管理に関わる仕組みをつくり、日常的なメンテナンスに取り組むことにより、伝統の技の継承と発展に役立っている。特に造園は、毎日の手入れが大切であり、若い職人も熟練した職人を手伝うことにより、少しずつ技を学んでいくことが期待されている。</p> <p>このように、京都御苑は日常的には市民の憩いの場となり、祭事が行われる際にはハレの舞台となり、その広大な敷地や京都御所などの歴史的な建造物と一体となって歴史を感じさせている。また、そこで行われる伝統の技を受け継いだ営みは、歴史舞台である歴史的遺産と一体となって洗練された伝統ある技術の粋を感じさせている。そして人々は、京都御苑と関わりを持つことで、知らず知らずのうちに歴史の重さや伝統に裏付けられた美意識を培っていくのである。</p> <p>イ 二条城 (7) 二条城の今と昔 二条城は、慶長8年(1603)、徳川家康が諸大名に造営を命じ、将軍上洛時</p>

新 (P119)

の京都宿所として建設した。第3代将軍家光が伏見城の遺構を移すなどして増築を行い、寛永3年（1626）に現在の規模になり、後水尾天皇の行幸を得た。その後、30万人の大軍を率いて上洛した家光を最後に、幕末までは政治の表舞台に登場することはなかった。幕末、第14代将軍家茂が家光以来、230年ぶりに上洛して、再び政治の表舞台となり、第15代将軍慶喜の時に二之丸御殿の大広間において大政奉還が宣告された。

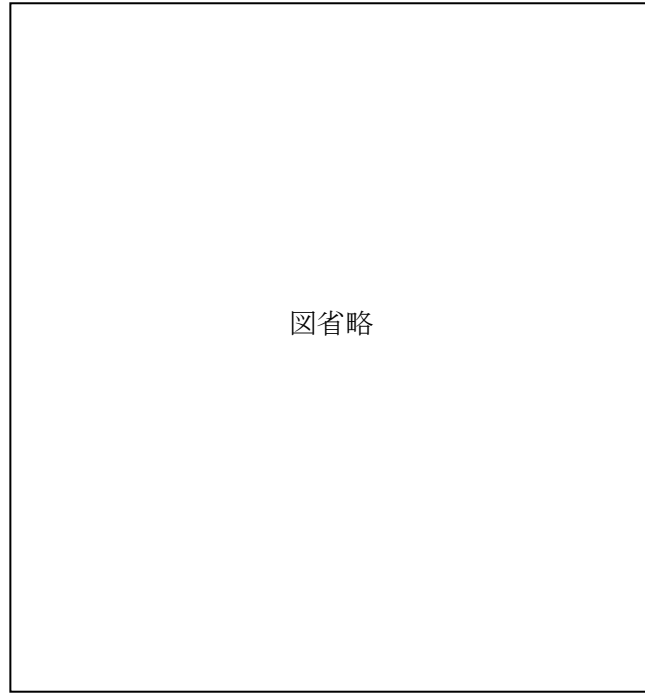


図 2-34 二条城

明治初期には京都府庁として利用され、その後、宮内省の管理となり、大正天皇御大典の儀式などに利用された。昭和14年（1939）に京都市に^{かし}下賜され、市民に公開されるようになった。

二条城は、城全体が国の史跡に指定されている他、二之丸御殿が国宝に、22棟の建造物と二之丸御殿にある計954点の障壁画が重要文化財に、小堀遠州の作と伝わる二之丸庭園が特別名勝に指定されている。さらに平成6年（1994）には「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコの世界文化遺産に登録された。

二条城の魅力は、二之丸御殿の建築様式、二之丸・本丸・清流園の各庭園、あるいは狩野派による障壁画等々あるが、外から望むと、漆喰壁の門や櫓、石垣、それを取り囲む水堀と堀沿いの松の植栽と、堀沿いのピラカンサの緑が昼間の日の光に映える姿が魅力的である。また、夜には東大手門がライトアップされ、夜の京都の町のアクセントとなっている。

(イ) 二条城に見る歴史的風致

日常的には市民の散歩の場であり観光地である二条城だが、ハレの催しが定期的に行われる場でもある。その一つが清流園を会場に開催される茶会である。春は市民煎茶の会、秋には市民大茶会が、それぞれ3日間開催される。どちらも平成21年で55回を迎え、半世紀以上も続く二条城の恒例行事として定着してい

旧 (P119)

の京都宿所として建設した。第3代将軍家光が伏見城の遺構を移すなどして増築を行い、寛永3年（1626）に現在の規模になり、後水尾天皇の行幸を得た。その後、30万人の大軍を率いて上洛した家光を最後に、幕末までは政治の表舞台に登場することはなかった。幕末、第14代将軍家茂が家光以来、230年ぶりに上洛して、再び政治の表舞台となり、第15代将軍慶喜の時に二之丸御殿の大広間において大政奉還が宣告された。

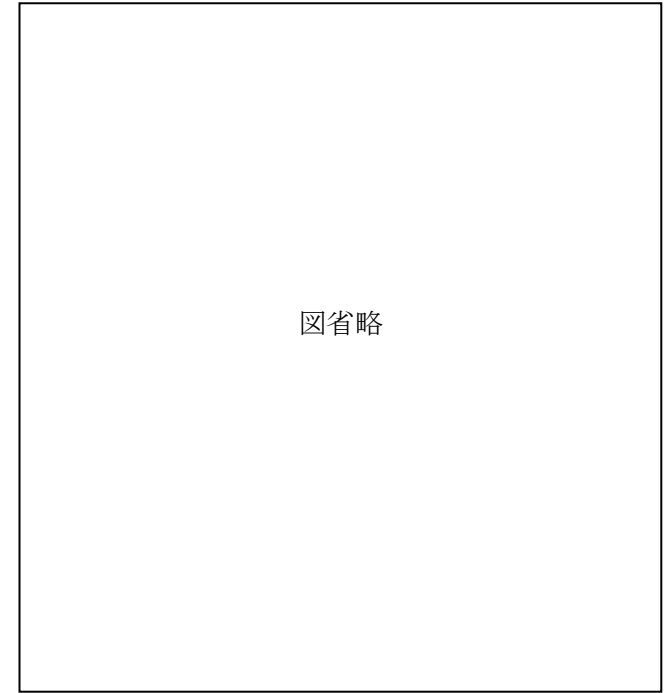


図 2-34 二条城

明治初期には京都府庁として利用され、その後、宮内省の管理となり、大正天皇御大典の儀式などに利用された。昭和14年（1939）に京都市に^{かし}下賜され、市民に公開されるようになった。

二条城は、城全体が国の史跡に指定されている他、二之丸御殿が国宝に、22棟の建造物と二之丸御殿にある計954点の障壁画が重要文化財に、小堀遠州の作と伝わる二之丸庭園が特別名勝に指定されている。さらに平成6年（1994）には「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコの世界文化遺産に登録された。

二条城の魅力は、二之丸御殿の建築様式、二之丸・本丸・清流園の各庭園、あるいは狩野派による障壁画等々あるが、外から望むと、漆喰壁の門や櫓、石垣、それを取り囲む水堀と堀沿いの松の植栽と、堀沿いのピラカンサの緑が昼間の日の光に映える姿が魅力的である。また、夜には東大手門がライトアップされ、夜の京都の町のアクセントとなっている。

(イ) 二条城に見る歴史的風致

日常的には市民の散歩の場であり観光地である二条城だが、ハレの催しが定期的に行われる場でもある。その一つが清流園を会場に開催される茶会である。春は市民煎茶の会、秋には市民大茶会が、それぞれ3日間開催される。どちらも平成21年で55回を迎え、半世紀以上も続く二条城の恒例行事として定着してい

新 (P123)

至るまでは急な傾斜地となっている。また、東山五条から五条通沿い、五条大橋に至る間は緩い傾斜を持っている。清水焼の登り窯は、これらの傾斜を利用してつくられている。現在、五条坂地区には、いくつかの登り窯が現存している。このうち、河井寛次郎記念館（旧河井寛次郎邸）登り窯（国登録有形文化財）や旧藤平陶芸登り窯などは、保存が図られている。



図 2-36 五条坂・やきもののまち

清水焼は慶長年間(1596～1615)の開窯とされ、江戸

時代中期には五条坂もまた、清水焼の生産地となっていたとされている。尾形乾山(1663～1743)が記した「陶工必用」(元文2年(1737))には、「遊行土 洛東松原通(現東山五条)ノ野辺ニアリ」との記述があり、清水焼が洛東の陶土を主原料としたことはほぼ確実であり、よい土がとれたという地質的条件もここで製陶業が栄えた条件であった。また、「都名所図会」安永9年(1780)発行に五条坂付近とみられる焼物商の様子が描かれている。

幕末から明治初期の段階で五条坂には38軒のやきもの屋が立ち並び、

ほんちょうとうきこうしょう
「**本朝陶器攷證**」は、10の登り窯があったと記されている。明治29年(1896)には市立陶磁器試験場が五条坂に創立された。近代には、五条坂地区に多数の登り窯が築かれ、五条通沿いを中心に窯元や販売店が並び、やきものまちとして隆盛した。現在五条坂の風物詩ともなっている陶器まつりは、大正8年(1919)に始まったものである。また、五条坂には、陶芸家・河井寛次郎が居を構え、陶芸を行うなど、民藝運動の主要な舞台ともなった。その旧宅である河井寛次郎記念館は、現在、五条坂の名所のひとつとなっている。

その後、五条通りが拡幅され、登り窯は使用されなくなり、陶磁器の生産機能は、清水焼団地(山科区)などに移り、五条坂は陶磁器販売のまちへと変化していった。

現在、五条坂周辺には清水焼の窯元、陶磁器販売店が集まり、登り窯、陶芸家の旧居などが残っていることにより、清水焼の産地としての歴史を偲ばせる。

この中で、昭和40年に開業し京焼・清水焼の販売を行っている楽只苑(市指定歴史的意匠建造物)は、本家初代入江道仙が寛政年間にこの地で陶磁器の製造をはじめ、昭和18年から有限会社道仙化学製陶所の社長宅兼事務所として使用

旧 (P123)

至るまでは急な傾斜地となっている。また、東山五条から五条通沿い、五条大橋に至る間は緩い傾斜を持っている。清水焼の登り窯は、これらの傾斜を利用してつくられている。現在、五条坂地区には、いくつかの登り窯が現存している。このうち、河井寛次郎記念館（旧河井寛次郎邸）登り窯（国登録有形文化財）や旧藤平陶芸登り窯などは、保存が図られている。



図 2-36 五条坂・やきもののまち

清水焼は慶長年間(1596～1615)の開窯とされ、江戸

時代中期には五条坂もまた、清水焼の生産地となっていたとされている。尾形乾山(1663～1743)が記した「陶工必用」(元文2年(1737))には、「遊行土 洛東松原通(現東山五条)ノ野辺ニアリ」との記述があり、清水焼が洛東の陶土を主原料としたことはほぼ確実であり、よい土がとれたという地質的条件もここで製陶業が栄えた条件であった。また、「都名所図会」安永9年(1780)発行に五条坂付近とみられる焼物商の様子が描かれている。

幕末から明治初期の段階で五条坂には38軒のやきもの屋が立ち並び、「**本朝陶器攷證**」は、10の登り窯があったと記されている。明治29年(1896)には市立陶磁器試験場が五条坂に創立された。近代には、五条坂地区に多数の登り窯が築かれ、五条通沿いを中心に窯元や販売店が並び、やきものまちとして隆盛した。現在五条坂の風物詩ともなっている陶器まつりは、大正8年(1919)に始まったものである。また、五条坂には、陶芸家・河井寛次郎が居を構え、陶芸を行うなど、民藝運動の主要な舞台ともなった。その旧宅である河井寛次郎記念館は、現在、五条坂の名所のひとつとなっている。

その後、五条通りが拡幅され、登り窯は使用されなくなり、陶磁器の生産機能は、清水焼団地(山科区)などに移り、五条坂は陶磁器販売のまちへと変化していった。

現在、五条坂周辺には清水焼の窯元、陶磁器販売店が集まり、登り窯、陶芸家の旧居などが残っていることにより、清水焼の産地としての歴史を偲ばせる。

この中で、昭和40年に開業し京焼・清水焼の販売を行っている楽只苑(市指定歴史的意匠建造物)は、本家初代入江道仙が寛政年間にこの地で陶磁器の製造をはじめ、昭和18年から有限会社道仙化学製陶所の社長宅兼事務所として使用

新 (P133)

大衆の参詣を促していた。寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった江戸時代の京都では、縁日には、その寺社の境内・参道あるいは周辺付近に、必ず露店の「縁日市」が立った。この縁日のうち、京都市には、弘法さん・天神さんといった、広く市民に親しまれ、多くの参拝者で賑わう、毎月の縁日市がある。

a 弘法さん

「弘法さん」は、弘法大師空海の月命日の21日に、東寺（教王護国寺）で行われる弘法市である。弘法市の起源は明らかではないが、中世に「一服一銭」で茶を商う商人が出るようになり、江戸時代には植木屋などその他の商人も出るようになったことが始まりであるとも言われている。寛政11年（1799）

に発行された「都林泉名勝図会」には、空海の命日に行われる法要、御影供の時の参道の様子が描かれており、植木屋や食べ物の屋台の様子などが見受けられる。

この市が開かれる東寺は、東寺真言宗の総本山である。延暦13年（794）の平安遷都に際して、仏教勢力の排除を意図し、平安京には国家鎮護のため羅城門の東西に、東寺、西寺の二つの官寺のみが造営された。以降、西寺が衰退していったのに対して、東寺は勢力を維持しつづけた。嵯峨天皇により空海（弘法大師）に下賜され密教寺院となった東寺は、鎮護国家・王城守護の寺院にとどまらず、密教の隆盛によって貴族の信仰を集めた。空海没後、弘法大師信仰が盛んになり、庶民の信仰によって栄えていく。このため、鎌倉時代以降、大宮七条に稻荷社御旅所があったことなども影響し、次第に東寺門前には、門前町が形成された。

「弘法さん」の当日、の東寺では、御影供が営まれるが、境内や寺の周

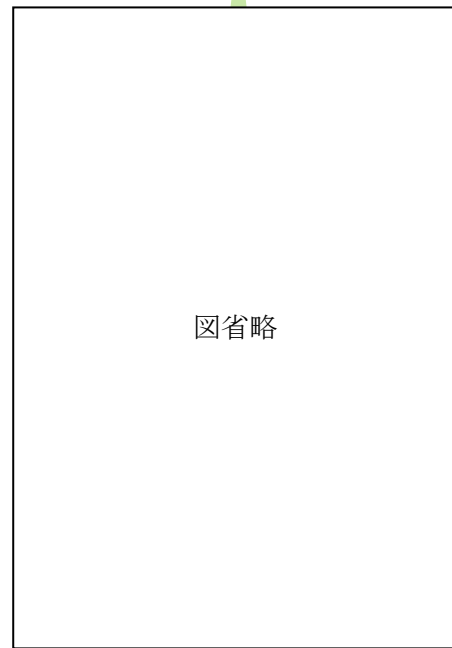


図 2-41 弘法さん



写真 2-70 弘法さん

旧 (P133)

大衆の参詣を促していた。寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった江戸時代の京都では、縁日には、その寺社の境内・参道あるいは周辺付近に、必ず露店の「縁日市」が立った。この縁日のうち、京都市には、弘法さん・天神さんといった、広く市民に親しまれ、多くの参拝者で賑わう、毎月の縁日市がある。

a 弘法さん

「弘法さん」は、弘法大師空海の月命日の21日に、東寺（教王護国寺）で行われる弘法市である。弘法市の起源は明らかではないが、中世に「一服一銭」で茶を商う商人が出るようになり、江戸時代には植木屋などその他の商人も出るようになったことが始まりであるとも言われている。寛政11年（1799）

に発行された「都林泉名勝図会」には、空海の命日に行われる法要、御影供の時の参道の様子が描かれており、植木屋や食べ物の屋台の様子などが見受けられる。

この市が開かれる東寺は、東寺真言宗の総本山である。延暦13年（794）の平安遷都に際して、仏教勢力の排除を意図し、平安京には国家鎮護のため羅城門の東西に、東寺、西寺の二つの官寺のみが造営された。以降、西寺が衰退していったのに対して、東寺は勢力を維持しつづけた。嵯峨天皇により空海（弘法大師）に下賜され密教寺院となった東寺は、鎮護国家・王城守護の寺院にとどまらず、密教の隆盛によって貴族の信仰を集めた。空海没後、弘法大師信仰が盛んになり、庶民の信仰によって栄えていく。このため、鎌倉時代以降、大宮七条に稻荷社御旅所があったことなども影響し、次第に東寺門前には、門前町が形成された。

「弘法さん」の当日、の東寺では、御影供（みえく）が営まれるが、境内や寺の周りには多くの縁起物、日

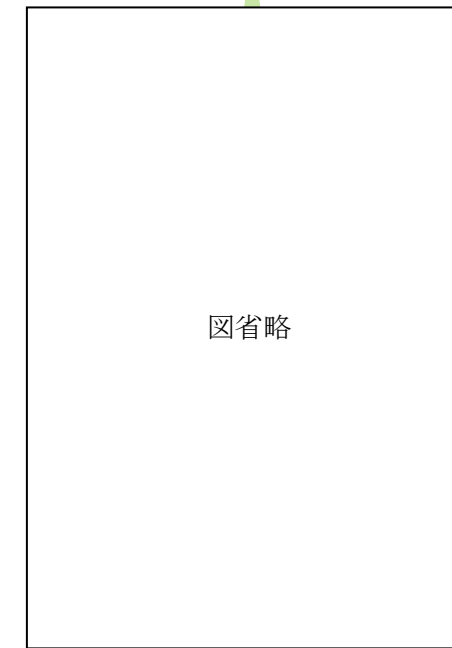


図 2-41 弘法さん

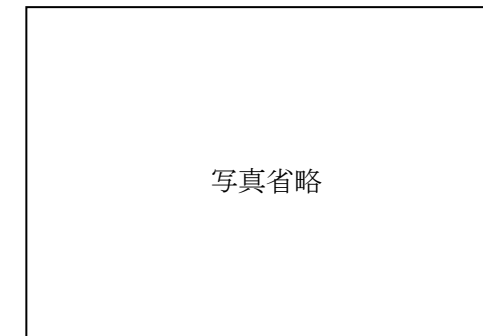


写真 2-70 弘法さん

新 (P134)

りには多くの縁起物、日用雑貨品から植木、骨董品まで、広い境内や周辺の通りに所狭しとあらゆる商品の露店が多数軒を並べ、参詣客と活気あるやりとりが繰り上げられる。

なかでも、1月の初弘法と12月の終い弘法は特に多数の参詣客で賑わい、威勢のよい商人の呼び声が、雑踏の中に響き渡る。

築地堀越しに見える堂舎や五重塔の風景を背景に繰り上げられ、縁日の活気とざわめきの中、買い物客等は時を越えて歴史ある風情を感じさせる。

b 天神さん

天神さんは、平安時代に学者・政治家として活躍した菅原道真をお祀りする北野天満宮（国宝）において、毎月25日、菅原道真公の月命日に行われる市である。初天神の北野詣では近世の記録にもあり、「弘法さん」と同様、寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった近世には、人々の生活の身近な月市として親しまれていたと考えられる。

「北野の天神さん」と親しまれている北野天満宮は、天暦元年（947）に創建され、中世以降、次第に文教の祖神とも仰がれるようになり、特に学問の神様としての信仰が篤く、受験シーズンには市内だけでなく遠方からも御利益を求める人で賑わう。

縁日が開かれる当日は弘法さんの縁日と同様、参道や御前通近辺には多くの露店が立ち並び、終日活気にあふれており、今出川通りからもその活気を感じられる。天神さんは骨董品と古着の露店が多く集まることで有名であり、なかでも、1月の初天神と12月の終い天神は特に多数の参詣客で賑わいをみせる。



図 2-42 天神さん



写真 2-71 天神さん

旧 (P134)

用雑貨品から植木、骨董品まで、広い境内や周辺の通りに所狭しとあらゆる商品の露店が多数軒を並べ、参詣客と活気あるやりとりが繰り上げられる。

なかでも、1月の初弘法と12月の終い弘法は特に多数の参詣客で賑わい、威勢のよい商人の呼び声が、雑踏の中に響き渡る。

築地堀越しに見える堂舎や五重塔の風景を背景に繰り上げられ、縁日の活気とざわめきの中、買い物客等は時を越えて歴史ある風情を感じさせる。

b 天神さん

天神さんは、平安時代に学者・政治家として活躍した菅原道真をお祀りする北野天満宮（国宝）において、毎月25日、菅原道真公の月命日に行われる市である。初天神の北野詣では近世の記録にもあり、「弘法さん」と同様、寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった近世には、人々の生活の身近な月市として親しまれていたと考えられる。

「北野の天神さん」と親しまれている北野天満宮は、天暦元年（947）に創建され、中世以降、次第に文教の祖神とも仰がれるようになり、特に学問の神様としての信仰が篤く、受験シーズンには市内だけでなく遠方からも御利益を求める人で賑わう。

縁日が開かれる当日は弘法さんの縁日と同様、参道や御前通近辺には多くの露店が立ち並び、終日活気にあふれており、今出川通りからもその活気を感じられる。天神さんは骨董品と古着の露店が多く集まることで有名であり、なかでも、1月の初天神と12月の終い天神は特に多数の参詣客で賑わいをみせる。



図 2-42 天神さん



写真 2-71 天神さん

新 (P137)	旧 (P137)
<p data-bbox="765 577 845 609">(省略)</p> <p data-bbox="142 1033 308 1064">(4) 祇園甲部</p> <p data-bbox="172 1079 1121 1381">現在、最も大きな規模を誇る花街が「祇園甲部」である。<u>寛文10年(1670)に鴨川の改修工事が進み、大和大路(縄手通)に「祇園外六町」が開かれ、お茶屋の営業が許された。さらに正徳2年(1712)には「祇園内六町」が開かれ、祇園の市街地は拡大の一途をたどっていった。</u>19世紀初頭には、祇園町のお茶屋は700軒、芸舞妓は3,000名を超えている。祇園町は明治14年に甲部と乙部に区分され、その甲部が現在祇園甲部と呼ばれるところである。</p> <p data-bbox="172 1396 1142 1701">明治新政府が行った「廃仏毀釈」※政策による上知令により、寺社領が縮小することで京都の町並みは大きく変化し、祇園町にも大きな影響を及ぼした。明治5年(1872)建仁寺の境内の北部が上知され、現在の祇園町南側に編入されたことから、町家が立ち並ぶ花見小路などの町通りが形成された。地域に編入された多くの土地は、女紅場学園の所有となり、お茶屋は土地を借りることになった。現在もお茶屋形式の建物が建ち並ぶ町並みが守られてきた理由の一つとなっている。</p> <p data-bbox="172 1715 1130 1793">「祇園甲部」のうち、「祇園新橋伝統的建造物群保存地区」に指定している祇園新橋や「祇園町南歴史的景観保全修景地区」に指定している付近は、今も良好な</p>	<p data-bbox="2190 577 2270 609">(省略)</p> <p data-bbox="1576 1033 1742 1064">(4) 祇園甲部</p> <p data-bbox="1605 1079 2555 1291">現在、最も大きな規模を誇る花街が「祇園甲部」で、<u>享保年間(1716-1736)に公許された「祇園新地内六町」を起源としており、一般的には祇園町と呼ばれていた。</u>19世紀初頭には、祇園町のお茶屋は700軒、芸舞妓は3,000名を超えている。祇園町は明治14年に甲部と乙部に区分され、その甲部が現在祇園甲部と呼ばれるところである。</p> <p data-bbox="1605 1306 2576 1610">明治新政府が行った「廃仏毀釈」※政策による上知令により、寺社領が縮小することで京都の町並みは大きく変化し、祇園町にも大きな影響を及ぼした。明治5年(1872)建仁寺の境内の北部が上知され、現在の祇園町南側に編入されたことから、町家が立ち並ぶ花見小路などの町通りが形成された。地域に編入された多くの土地は、女紅場学園の所有となり、お茶屋は土地を借りることになった。現在もお茶屋形式の建物が建ち並ぶ町並みが守られてきた理由の一つとなっている。</p> <p data-bbox="1605 1625 2555 1703">「祇園甲部」のうち、「祇園新橋伝統的建造物群保存地区」に指定している祇園新橋や「祇園町南歴史的景観保全修景地区」に指定している付近は、今も良好な</p>

新 (P139)

(ウ) 祇園東

「祇園東」の辺りは、禁裏守護の火消し役であった江洲膳所藩の京屋敷があった場所であり、「膳所裏」とも呼ばれていた地域である。明治3年(1870)にこれらの屋敷が撤去された跡にお茶屋が建ち、当時栄えていた祇園町の花街が広がった。明治14年(1888)に京都府知事により祇園町は甲部と乙部に区別され、乙部は昭和24年(1949)に「東新地」と改称され、昭和30年(1955)頃に「祇園東」となった。

「祇園東」では昭和27年(1952)より「祇園をどり」が始められた。踊りの振り付けは藤間流で、昭和33年に建てられた「祇園会館」で、他の花街では春に開催される中、ここでは毎年秋に開催されている。この時期になると、八坂神社の西楼門のはす向かいに位置する祇園会館はちょうちんやぼんぼりで飾られ、また茶屋の前には、祇園をどりのちょうちんが灯される。



写真 2-75 祇園をどりの時期の茶屋

提供：祇園東お茶屋組合

(以下省略)

旧 (P139)

(ウ) 祇園東

「祇園東」の辺りは、禁裏守護の火消し役であった江洲膳所藩の京屋敷があった場所であり、「膳所裏」とも呼ばれていた地域である。明治3年(1870)にこれらの屋敷が撤去された跡にお茶屋が建ち始め、当時栄えていた祇園町の花街が広がった。明治14年(1888)に京都府知事により祇園町は甲部と乙部に区別され、乙部は昭和24年(1949)に「東新地」と改称され、昭和30年(1955)頃に「祇園東」となった。

「祇園東」では昭和27年(1952)より「祇園をどり」が始められた。踊りの振り付けは藤間流で、昭和33年に建てられた「祇園会館」で、他の花街では春に開催される中、ここでは毎年秋に開催されている。この時期になると、八坂神社の西楼門のはす向かいに位置する祇園会館はちょうちんやぼんぼりで飾られ、また茶屋の前には、祇園をどりのちょうちんが灯される。



写真 2-75 祇園をどりの時期の茶屋

提供：祇園東お茶屋組合

(以下省略)

新 (P140)	旧 (P140)
<p data-bbox="629 352 712 384">(省略)</p> <p data-bbox="151 1354 281 1381">(オ) 先斗町</p> <p data-bbox="172 1398 1130 1656">「先斗町」は、宮川町と同じく、寛文10年(1670)、鴨川と高瀬川の間 の護岸工事により生まれた中の島に、延宝2年(1674)に若松町に5軒家が形 成されたことを契機に、急速に家が建ち並び、町並みが整っていったことが起源 になる。正式に芸妓取扱いの許可が下りたのは、文化10年(1813)になっ てからで、町の名前となっている先斗(ぼんと)の由来は諸説あるが、ポルトガ ル語のポント(先,先端,点)に由来するとも言われている。</p> <p data-bbox="172 1671 1118 1791">先斗町の「鴨川をどり」も、祇園甲部の「都をどり」と同様に明治5年(18 72)の京都博覧会の余興として開催されたのが起源で、当初は裏寺町四条上る 大竜寺横の「千代の家」で開催された。踊りの振り付けは尾上流で、現在は昭和</p>	<p data-bbox="2053 352 2136 384">(省略)</p> <p data-bbox="1576 533 1706 560">(オ) 先斗町</p> <p data-bbox="1596 577 2573 835">「先斗町」は、宮川町と同じく、寛文10年(1670)、鴨川と高瀬川の間 の護岸工事により生まれた中の島に、延宝2年(1674)に梅ノ木町に5軒家が形 成されたことを契機に、急速に家が建ち並び、町並みが整っていったことが起源 になる。正式に芸妓取扱いの許可が下りたのは、文化10年(1813)になっ てからで、町の名前となっている先斗(ぼんと)の由来は諸説あるが、ポルトガ ル語のポント(先,先端,点)に由来するとも言われている。</p> <p data-bbox="1596 850 2564 1062">先斗町の「鴨川をどり」も、祇園甲部の「都をどり」と同様に明治5年(18 72)の京都博覧会の余興として開催されたのが起源で、当初は裏寺町四条上る 大竜寺横の「千代の家」で開催された。踊りの振り付けは尾上流で、現在は昭和 2年(1927)に完成した先斗町歌舞練場で毎年春に開催され、「都をどり」と 同じくまちが賑わいを見せる。</p> <p data-bbox="1596 1077 2555 1472">また、先斗町は鴨川の納涼床が行われる場所としても知られ、現在では毎年5 月1日から9月30日の間、先斗町を含めた二条大橋から五条大橋までの鴨川の 西岸に、納涼の床組みが建てられる。鴨川の納涼床の歴史は古く、江戸時代に裕 福な商人が夏に遠来の客をもてなすのに、四条河原付近の浅瀬や中洲に床几を置 いたのが起源といわれている。安永9年(1780)に発行された「都名所図会」 には、四条河原の床几などでの納涼の様子が描かれている。当初は床几形式であ った床は、数百年に亘る歴史の中で幾多の変遷を経て、現在見られる高床式の姿 となり、納涼床では川面を流れる涼風を感じ、せせらぎの水音を聞き、暑い京の 夏に涼感を与えてくれる。まさに、人々の暮らしの知恵でもある。</p> <p data-bbox="1596 1486 2546 1562">風情のある建物から鴨川に面して床が連なり、その上に舞妓や芸妓の花を時折 見つけることができる頃になると、京都の夏を感じる季節になる。</p>

新 (P144)	旧 (P143)
<p>—文化・芸術のまち京都—</p> <p>(1) 文化・芸術のまち京都</p> <p>京都は、平安遷都以来およそ1100年の間、わが国の都であり、それを支えてきた公家の文化が綿々と伝えられてきた。その公家文化は、室町期以降の武家文化とも融合し、京都は洗練された日本文化の中心地としてあり続けた。近世に入ると、それまでの文化に町人文化が加わった。この時代には、政治的中心は江戸に移ったが、文化的中心は依然として京都にあった。そして、これらのことを背景とした京都は今もなお、文化・芸術が広く市民生活の中に浸透し、日常的な暮らしの中に息づいている。</p> <p>この項では、現在京都で行われている能・狂言などの伝統芸能、茶の湯やいけばななどの市民の間で親しまれている伝統文化、伝統に培われてきた美術などを例として、文化・芸術の地である京都の歴史的風致を示していく。</p> <div data-bbox="528 352 1172 1560" style="border: 1px solid black; text-align: center; padding: 50px 0;">図省略</div>	<p>—文化・芸術のまち京都—</p> <p>(1) 文化・芸術のまち京都</p> <p>京都は、平安遷都以来およそ1100年の間、わが国の都であり、それを支えてきた公家の文化が綿々と伝えられてきた。その公家文化は、室町期以降の武家文化とも融合し、京都は洗練された日本文化の中心地としてあり続けた。近世に入ると、それまでの文化に町人文化が加わった。この時代には、政治的中心は江戸に移ったが、文化的中心は依然として京都にあった。そして、これらのことを背景とした京都は今もなお、文化・芸術が広く市民生活の中に浸透し、日常的な暮らしの中に息づいている。</p> <p>この項では、現在京都で行われている能・狂言などの伝統芸能、茶の湯やいけばななどの市民の間で親しまれている伝統文化、伝統に培われてきた美術などを例として、文化・芸術の地である京都の歴史的風致を示していく。</p> <div data-bbox="1952 352 2597 1560" style="border: 1px solid black; text-align: center; padding: 50px 0;">図省略</div>
<p>ア 具体事例</p> <p>(7) 雅楽</p> <p>「雅楽」は、平安遷都以前に生まれた歌と舞、管・絃・打楽器が一体となって繰り広げられる総合芸術で、雅な雰囲気に含まれた日本の伝統芸能である。10世紀に宮中のほか南都や天王寺に雅楽を司る楽人の組織である「楽所^{がくそ}」が成立し、中世末期から近世初頭にかけて、京方（宮中・京都）、南都方（興福寺・奈良）、天王寺方（四天王寺・大阪）の「三方楽所」と呼ばれる雅楽の伝承組織が整えられた。</p>	<p>ア 具体事例</p> <p>(7) 雅楽</p> <p>「雅楽」は、平安遷都以前に生まれた歌と舞、管・絃・打楽器が一体となって繰り広げられる総合芸術で、雅な雰囲気に含まれた日本の伝統芸能である。10世紀に宮中のほか南都や天王寺に雅楽を司る楽人の組織である「楽所（がくそ）」が成立し、中世末期から近世初頭にかけて、京方（宮中・京都）、南都方（興福寺・奈良）、天王寺方（四天王寺・大阪）の「三方楽所」と呼ばれる雅楽の伝承組織が整えられた。</p>

新 (P145)

明治6年(1873)に雅楽に関する制限が解かれ、現在のように誰もが雅楽を演奏することができるようになると、京都でも雅楽を演奏する「雅楽会」が結成され、それ以降、京都の多くの寺社を始め全国の有名寺社で演奏が行われるようになった。

現在、各神社の祭礼や初詣などで雅楽は不可欠な存在となっており、人々が雅楽に触れる機会も多い。

『京都の祭礼』の項で示した盛夏に行われる祇園祭で広く知られている八坂神社において奉奏される「東遊」でも雅楽が演奏されている。この「東遊」は天延3年(975)に、^{ほうそう}痘瘡の災を除くため、朝廷より奉幣したことが始まりと言われ、毎年6月に行われている。また、賀茂別雷神社(通称、上賀茂神社)や賀茂御祖神社(通称、下鴨神社)の社頭の儀においても雅楽は演奏され、時間がゆったりと流れるような舞や音色は、人々を厳かで雅やかな王朝の世界に誘っている。

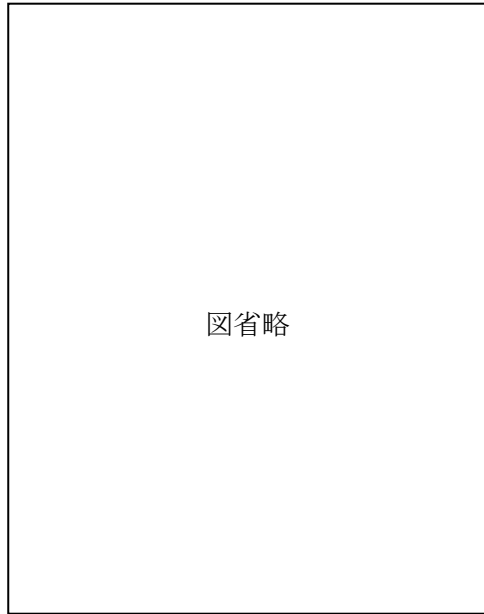


写真 2-83 東遊 (八坂神社)
提供 八坂神社

図 2-51 東遊 (八坂神社)

このような営みが、舞台となっている寺社等の歴史的な建造物と一体となって、境内やその周辺において展開され、平安時代から綿々と続く宮廷の雅さに、京都の伝統文化を感じさせる。

(4) 能・狂言

室町時代に開花した京都の文化を代表する「能」は、江戸時代まで「猿楽」と呼ばれており、平安時代に宮廷で演じられていた唐に由来する「散楽」と平安中期に生まれた「田楽」が「猿楽」に大きく影響を及ぼし、室町時代に今日の能楽

旧 (P144)

明治6年(1873)に雅楽に関する制限が解かれ、現在のように誰もが雅楽を演奏することができるようになると、京都でも雅楽を演奏する「雅楽会」が結成され、それ以降、京都の多くの寺社を始め全国の有名寺社で演奏が行われるようになった。

現在、各神社の祭礼や初詣などで雅楽は不可欠な存在となっており、人々が雅楽に触れる機会も多い。

『京都の祭礼』の項で示した盛夏に行われる祇園祭で広く知られている八坂神社において奉奏される「東遊」でも雅楽が演奏されている。この「東遊」は天延3年(975)に、^{ほうそう}痘瘡の災を除くため、朝廷より奉幣したことが始まりと言われ、毎年6月に行われている。また、賀茂別雷神社(かもわけいかずちじんじゃ、通称、上賀茂神社)や賀茂御祖神社(かもみおやじんじゃ、通称、下鴨神社)の社頭の儀においても雅楽は演奏され、時間がゆったりと流れるような舞や音色は、人々を厳かで雅やかな王朝の世界に誘っている。

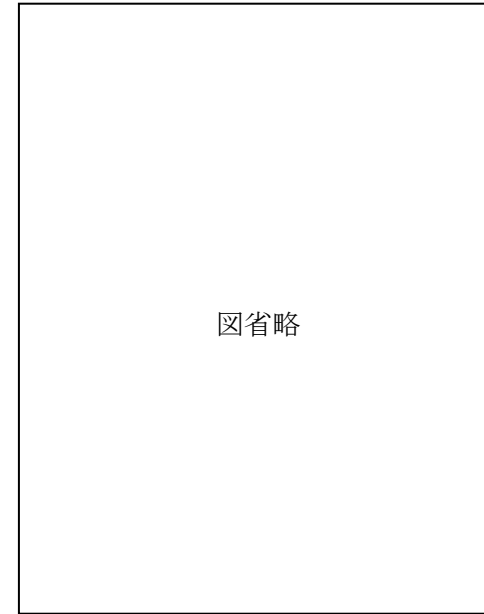


写真 2-83 東遊 (八坂神社)
提供 八坂神社

図 2-51 東遊 (八坂神社)

このような営みが、舞台となっている寺社等の歴史的な建造物と一体となって、境内やその周辺において展開され、平安時代から綿々と続く宮廷の雅さに、京都の伝統文化を感じさせる。

(4) 能・狂言

室町時代に開花した京都の文化を代表する「能」は、江戸時代まで「猿楽」と呼ばれており、平安時代に宮廷で演じられていた唐に由来する「散楽」と平安中期に生まれた「田楽」が「猿楽」に大きく影響を及ぼし、室町時代に今日の能楽

新 (P146)

の基礎を成した。

「能」は、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の五流派があり、各家元は江戸時代に江戸に移ったが、現在京都には一時衰退しその後再興した金剛流の家元がある。金剛能楽堂は、明治初年金剛家の祖野村三次郎直寛が石清水八幡宮の能舞台を買い取り自宅に移築したものであり、元は室町にあったが平成15年に現在の地（烏丸今出川下る龍前町）に新たな「金剛能楽堂」が開館し、その際、130年近い歴史を持つ能舞台がそのまま移築された。ここでは、数々の能などの公演が行われている。

一方、江戸時代の京都では、能の歌詞である謡曲を歌う「謡」が一般の人々に流行していたことから、後に「京観世五軒家」と呼ばれる家々が観世流の素謡^{すうたい}を広めるとともに、「京観世」という固有の文化を形作った。観世屋敷の管理や運営を任された片山家は、現在も京都における流派の中心的存在であり、能楽は観世会館を中心に定期的に開催されている。また、その他の観世流の能楽堂としては、明治時代後期に建てられた京都最古の能楽堂「大江能楽堂」や「河村能舞台」などがあり、ここでも定期的に公演が行われている。

能と同様に猿楽から発展した「狂言」は、明治期以降は、能、式三番と併せて「能楽」と呼び、能の一部として演じられる「間狂言」のほか、いわゆる独立して演じられる「狂言」がある。近代以降、京都では「お豆腐主義」を公言する茂山千五郎家が庶民的な狂言を演じて、好評を得た。江戸家元のは武家式楽の伝統を今に残す古風で剛直な芸風に対し、茂山千五郎家は写実的で親しみやすい芸風である。



写真 2-84 市民狂言会(第 214 回市民狂言会より)

能・狂言が行われる能舞台は、もともと舞台部分には屋根がかかっているが観客席は露天となっており、現在のように能舞台と観客席とが一屋根の下に収まった「能楽堂」になったのは明治14年(1881)に建設されたものが最初である。

西本願寺には、天正9年(1581)の墨書があり、現存最古といわれる能舞台「北能舞台(国宝)」や「南能舞台(重文)」があり、毎年5月の親鸞の誕生を祝って催される行事、「宗祖降誕会^{ごうたんえ}」では、この南能舞台で祝賀が演じられ、多くの参拝者に披露されている。

旧 (P145)

の基礎を成した。

「能」は、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の五流派があり、各家元は江戸時代に江戸に移ったが、現在京都には一時衰退しその後再興した金剛流の家元がある。金剛能楽堂は、明治初年金剛家の祖野村三次郎直寛が石清水八幡宮の能舞台を買い取り自宅に移築したものであり、元は室町にあったが平成15年に現在の地（烏丸今出川下る龍前町）に新たな「金剛能楽堂」が開館し、その際、130年近い歴史を持つ能舞台がそのまま移築された。ここでは、数々の能などの公演が行われている。

一方、江戸時代の京都では、能の歌詞である謡曲を歌う「謡」が一般の人々に流行していたことから、後に「京観世五軒家」と呼ばれる家々が観世流の素謡^{すうたい}を広めるとともに、「京観世」という固有の文化を形作った。観世屋敷の管理や運営を任された片山家は、現在も京都における流派の中心的存在であり、能楽は観世会館を中心に定期的に開催されている。また、その他の観世流の能楽堂としては、明治時代後期に建てられた京都最古の能楽堂「大江能楽堂」や「河村能舞台」などがあり、ここでも定期的に公演が行われている。

能と同様に猿楽から発展した「狂言」は、明治期以降は、能、式三番と併せて「能楽」と呼び、能の一部として演じられる「間狂言」のほか、いわゆる独立して演じられる「狂言」がある。近代以降、京都では「お豆腐主義」を公言する茂山千五郎家が庶民的な狂言を演じて、好評を得た。江戸家元のは武家式楽の伝統を今に残す古風で剛直な芸風に対し、茂山千五郎家は写実的で親しみやすい芸風である。



写真 2-84 市民狂言会(第 214 回市民狂言会より)

能・狂言が行われる能舞台は、もともと舞台部分には屋根がかかっているが観客席は露天となっており、現在のように能舞台と観客席とが一屋根の下に収まった「能楽堂」になったのは明治14年(1881)に建設されたものが最初である。

西本願寺には、天正9年(1581)の墨書があり、現存最古といわれる能舞台「北能舞台(国宝)」や「南能舞台(重文)」があり、毎年5月の親鸞の誕生を祝って催される行事、「宗祖降誕会^{ごうたんえ}」では、この南能舞台で祝賀が演じられ、多くの参拝者に披露されている。

新 (P147)

他にも京都の寺社等には能舞台を持つところが多くあり、今なお能や狂言が演じられる舞台として、活躍している。

また、京都薪能は、毎年6月の夜、平安神宮で行われており、平成21年度(2009)で60回を数える初夏の風物詩となっている。夕方から能を始め、日が暮れるとかがり火を焚き、屋外での奉納の風情を醸し出している。平安神宮を舞台に幽玄の世界が繰り広げられる。

能や狂言、謡の舞台は、能楽堂などの歴史的な建造物だけではない。京都の旧市街地に残る京町家の前を通ると、謡の声や鼓の音が聞こえる。また、能の稽古のために京町家の2階座敷を板張りにしている所もある。

このように、歴史的な能舞台などで演じられる能・狂言は、寺社等の歴史的建造物や、町の各所から聞こえる謡に親しむ市民の声、周囲の歴史的町並みと一体となり、人々の趣味の奥深さと情緒を感じさせる。

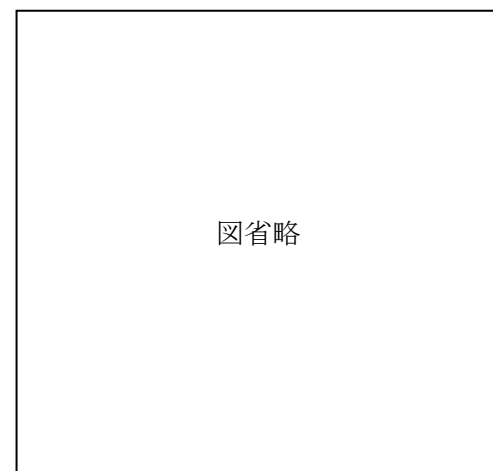


図 2-52 宗祖降誕会 祝賀能 (西本願寺)



図 2-53 京都薪能 (平安神宮)



写真 2-85 京都薪能

(ウ) 歌舞伎

師走に入り、京都南座に顔見世のまねき看板が上がると、京都では日々のご近所同士の挨拶の中に、「顔見世」の言葉が上ようになる。その彩りに、早くも正月気分がただよい、あわただしさも忘れてしまう。吉例顔見世興行は、古くから

旧 (P146)

他にも京都の寺社等には能舞台を持つところが多くあり、今なお能や狂言が演じられる舞台として、活躍している。

また、京都薪能は、毎年6月の夜、平安神宮で行われており、平成21年度(2009)で60回を数える初夏の風物詩となっている。夕方から能を始め、日が暮れるとかがり火を焚き、屋外での奉納の風情を醸し出している。平安神宮を舞台に幽玄の世界が繰り広げられる。

能や狂言、謡の舞台は、能楽堂などの歴史的な建造物だけではない。京都の旧市街地に残る京町家の前を通ると、謡の声や鼓の音が聞こえる。また、能の稽古のために京町家の2階座敷を板張りにしている所もある。

このように、歴史的な能舞台などで演じられる能・狂言は、寺社等の歴史的建造物や、町の各所から聞こえる謡に親しむ市民の声、周囲の歴史的町並みと一体となり、人々の趣味の奥深さと情緒を感じさせる。

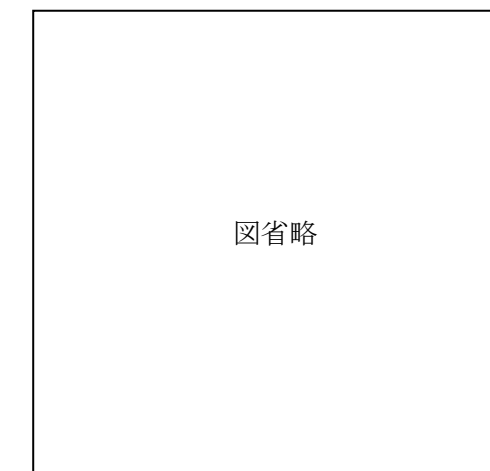


図 2-52 宗祖降誕会 祝賀能 (西本願寺)



図 2-53 京都薪能 (平安神宮)



写真 2-85 京都薪能

(ウ) 歌舞伎

師走に入り、京都南座に顔見世のまねき看板が上がると、京都では日々のご近所同士の挨拶の中に、「顔見世」の言葉が上ようになる。その彩りに、早くも正月気分がただよい、あわただしさも忘れてしまう。吉例顔見世興行は、古くから

新 (P150)

旧 (P149)

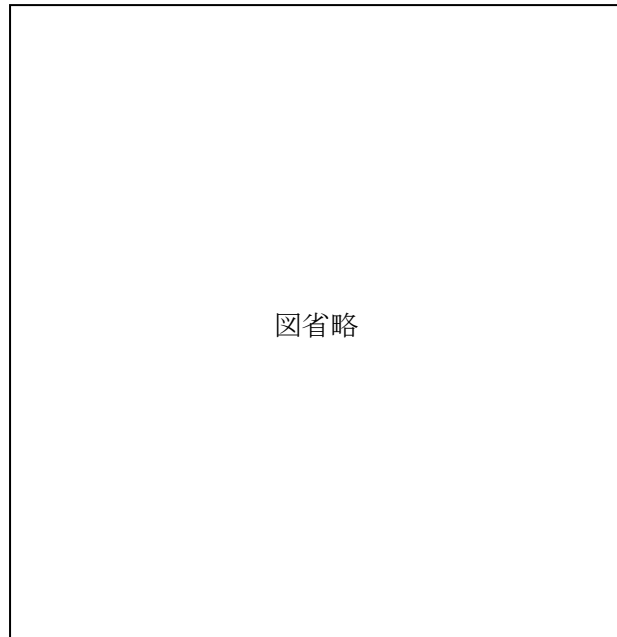


写真省略

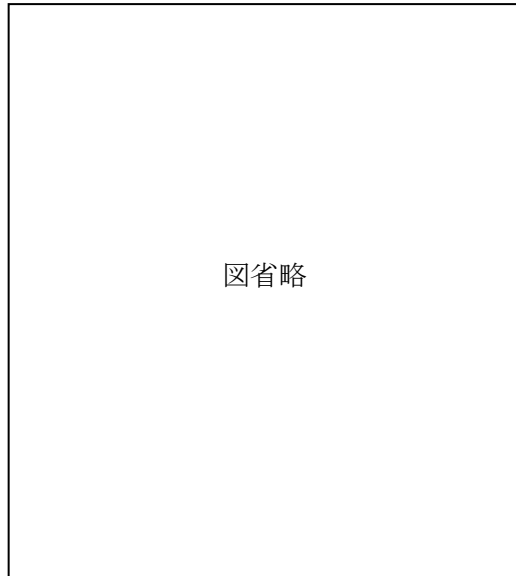
写真 2-88 小川通の町並み

茶道の家元である表千家（不審庵）や裏千家（今日庵）、武者小路千家（官休庵）の建ち並ぶ小川通の周辺は、全国から修業のために来訪した和装の人々が行きかい、華やかな雰囲気をかもし出している。また、風情ある茶道家の表構えは、日本的な美の世界である茶の湯のもてなしの心を自然に感じさせる。この小川通

りはかつて小川（こかわ）が流れていたところで、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が小川通りに面しているのは、良質の地下水がわくためであったと言われる。ここでは、茶の湯を手掛ける人々の日常の姿があり、行きかう和装姿の人々や、茶道具店に並べられた道具類もまた、町並みに風情を与えている。三千家とは場所が離れるが、藪内家（燕庵）は、世界遺産に登録されている西本願寺の東に位置し、その構えは本願寺界わいの風情を醸し出す一つの重要な要素となっている。



図省略



図省略

図 2-56 三千家と藪内家

このように、京都の歴史的な寺社等において行われる茶会等の営みとそこに集う和服姿の人々の営みが、寺社等の歴史的建造物やその周辺の町並みと一体となって、静寂で落ち着きのある情緒を醸し出している。そして、小川通をはじめと

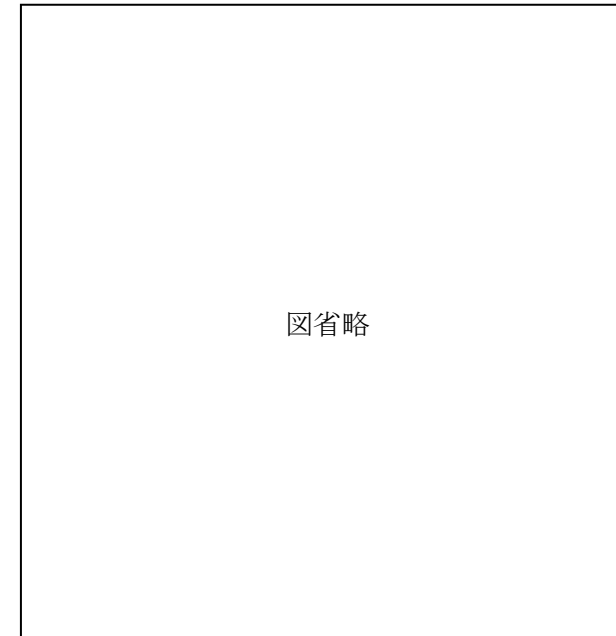


写真省略

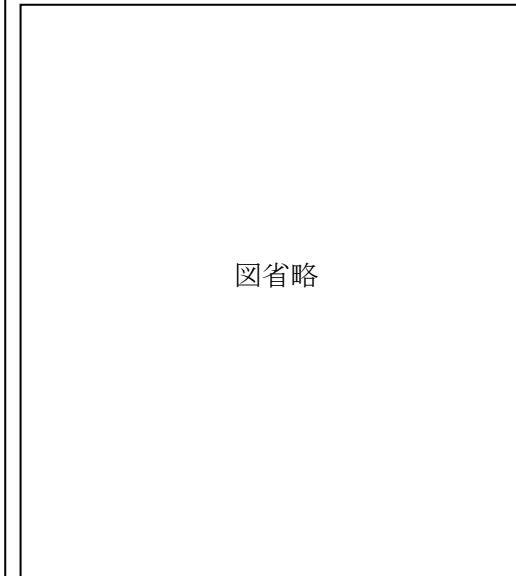
写真 2-88 小川通の町並み

茶道の家元である表千家（不審庵）や裏千家（今日庵）、武者小路千家（官休庵）の建ち並ぶ小川通の周辺は、全国から修業のために来訪した和装の人々が行きかい、華やかな雰囲気をかもし出している。また、風情ある茶道家の表構えは、日本的な美の世界である茶の湯のもてなしの心を自然に感じさせる。この小川通

りはかつて小川（こかわ）が流れていたところで、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が小川通りに面しているのは、良質の地下水がわくためであったと言われる。ここでは、茶の湯を手掛ける人々の日常の姿があり、行きかう和装姿の人々や、茶道具店に並べられた道具類もまた、町並みに風情を与えている。三千家とは場所が離れるが、藪内家（燕庵）は、世界遺産に登録されている西本願寺の東に位置し、その構えは本願寺界わいの風情を醸し出す一つの重要な要素となっている。



図省略



図省略

図 2-56 三千家と藪内家

このように、京都の歴史的な寺社等において行われる茶会等の営みとそこに集う和服姿の人々の営みが、寺社等の歴史的建造物やその周辺の町並みと一体となって、静寂で落ち着きのある情緒を醸し出している。そして、小川通をはじめと

新 (P153)

秀吉は洛中に散在していた寺院を、東京極大路があった辺りの東側に移転させた。集められた寺院の数は80か寺にもおよぶ。門前町としての体裁が整ってくるに従って、寺町通りの商店街も形成され、17世紀前後から、位牌・櫛・書物・石塔・数珠・^{はさみばこ}挟箱・文庫・仏師・筆屋などの寺院に関連した店が立ち並び始めた。

江戸時代初期に成立した「^{けふきくさ}毛吹草」には、寺町通の名産として絵像や木像、紙表具、屏風といった、美術につながるものが示され、美術の町並みが形成されていたことが伺える。さらに、その他の店も並びだし、現在の寺町通りの商店街の基礎ができたという。現在でも、寺町通りには古美術や古書、日本画、洋画、版画を取り扱う店や、画廊などが先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家などの歴史的建造物で営まれ、町の風景を形作っている。

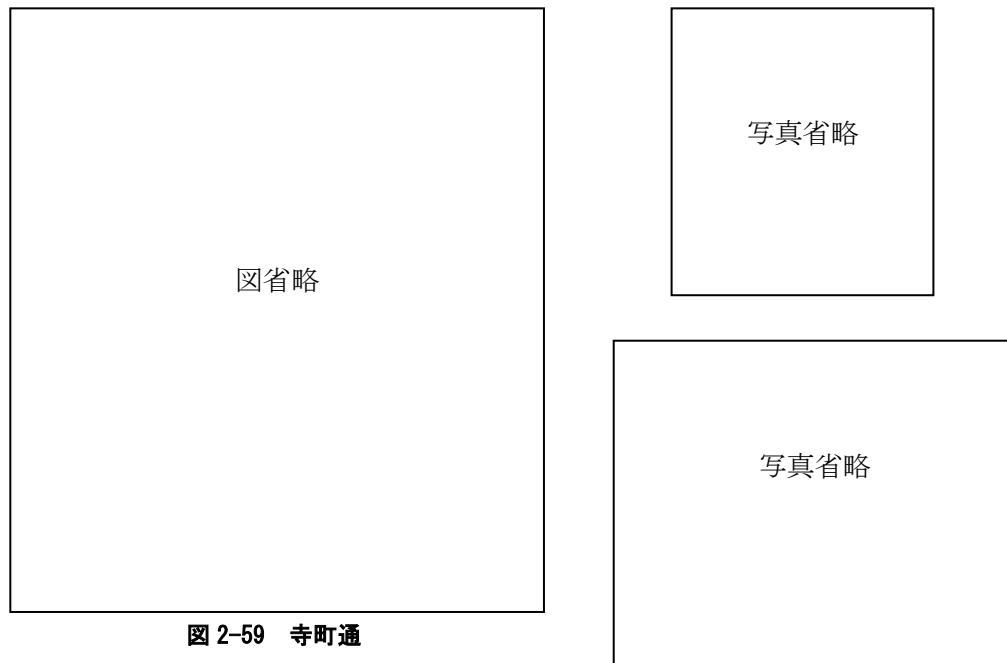


図 2-59 寺町通

写真 2-91 寺町通の店舗

新門前通およびその周辺地区も、古美術のまちとして有名である。この界限は、知恩院の門前町として元禄期を前後して形成され、古くは茶道具商が立地した。円山公園にホテルが建設され、この界限が河原町通りに入る散策道となることで、明治末期以降古美術商が集まり、情緒豊かな町並みが形成された。新門前通は、美術品を扱う同業者町を形成しているが、家主の人格を象徴するように、一軒として同じ家屋がなく、風情を凝らした町家建築で町並みが構成されている。その店先には、古美術商であることを匂わせるような美術品が展示され、町並みに彩りを添えている。

岡崎は、伝統と進取の気風の地として後に示すとおり、京都市美術館をはじめとする文教地区が形成され、文展を前身とする日展が行われるなど、近代以降の日本画と洋画の融合などの革新をはじめとする芸術の振興が今なお続く町である。

旧 (P152)

秀吉は洛中に散在していた寺院を、東京極大路があった辺りの東側に移転させた。集められた寺院の数は80か寺にもおよぶ。門前町としての体裁が整ってくるに従って、寺町通りの商店街も形成され、17世紀前後から、位牌・櫛・書物・石塔・数珠・^{はさみばこ}挟箱・文庫・仏師・筆屋などの寺院に関連した店が立ち並び始めた。江戸時代初期に成立した「^{けふきくさ}毛吹草」には、寺町通の名産として絵像や木像、紙表具、屏風といった、美術につながるものが示され、美術の町並みが形成されていたことが伺える。さらに、その他の店も並びだし、現在の寺町通りの商店街の基礎ができたという。現在でも、寺町通りには古美術や古書、日本画、洋画、版画を取り扱う店や、画廊などが先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家などの歴史的建造物で営まれ、町の風景を形作っている。

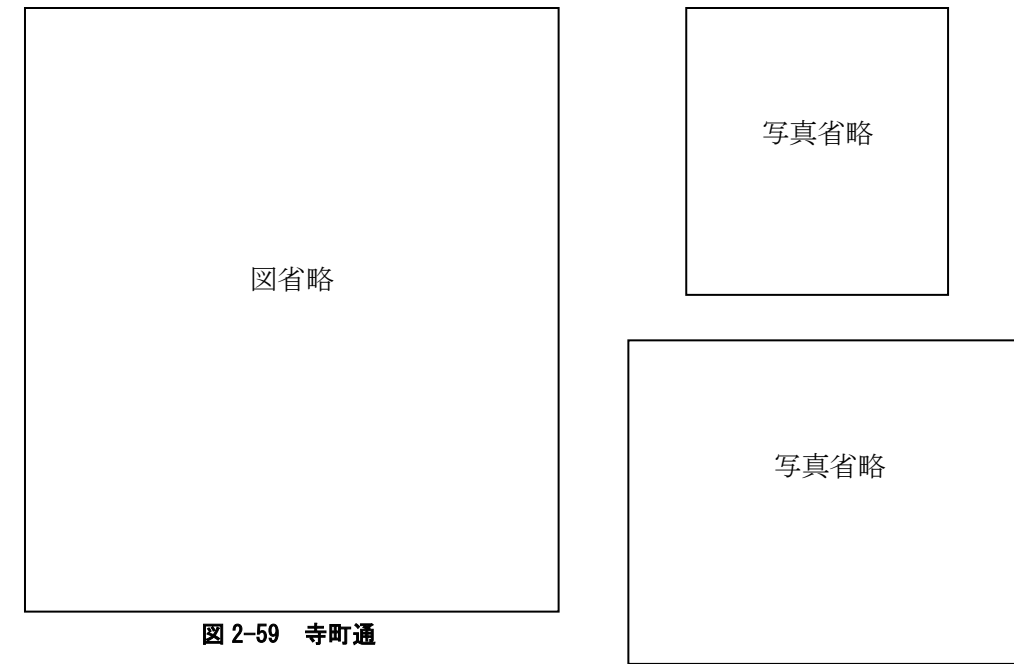


図 2-59 寺町通

写真 2-91 寺町通の店舗

新門前通およびその周辺地区も、古美術のまちとして有名である。この界限は、知恩院の門前町として元禄期を前後して形成され、古くは茶道具商が立地した。円山公園にホテルが建設され、この界限が河原町通りに入る散策道となることで、明治末期以降古美術商が集まり、情緒豊かな町並みが形成された。新門前通は、美術品を扱う同業者町を形成しているが、家主の人格を象徴するように、一軒として同じ家屋がなく、風情を凝らした町家建築で町並みが構成されている。その店先には、古美術商であることを匂わせるような美術品が展示され、町並みに彩りを添えている。

岡崎は、伝統と進取の気風の地として後に示すとおり、京都市美術館をはじめとする文教地区が形成され、文展を前身とする日展が行われるなど、近代以降の日本画と洋画の融合などの革新をはじめとする芸術の振興が今なお続く町である。

新 (P157)

イ 具体事例

(7) 琵琶湖疏水と邸宅群

琵琶湖疏水は、琵琶湖取水地点から伏見区堀詰町で一級河川^{ほりかわ}濠川となる地点までの「第1疏水」、第1疏水取水地点の少し北側から全線トンネルで蹴上付近で第1疏水と合流する「第2疏水」、第2疏水取水口付近の立坑から全線トンネルで安朱で第2疏水に合流する「第2疏水連絡トンネル」及び蹴上付近から分岐して左京区北白川久保田町に至る「疏水分線」からなっている。

現在、琵琶湖疏水は水道原水のほか、発電、かんがい、防火及び工業などに利用されており、市民の生活になくてはならないものである。また、琵琶湖疏水の建設に伴い整備された、蹴上発電所や蹴上浄水場、インクライン等の関連施設は近代化産業遺産としての認定を受けるなど、京都の近代を代表する建造物として親しまれている。

そして、開削から120年余りが過ぎようとしている現在においても脈々と琵琶湖から京都市へ命の水を供給し続けている。その本来機能のみならず、岡崎では、優れた近代土木景観と緑豊かな水辺空間という観点からも、市民に親しまれている。例えば南禅寺境内には、当時としては画期的な洋風建造物の水路閣が設置され、今日では緑豊かな周囲の歴史的景観によく溶け込んでいる。また、哲学の道は西田幾多郎などの哲学者らが歩いた道として知られ、現在でも春の桜や秋の紅葉をはじめ、多くの人々が散策するなど、疏水沿線は散策の場として市民に親しまれている。



写真 2-95 哲学の道



写真 2-96 南禅寺水路閣

旧 (P156)

(7) 琵琶湖疏水と邸宅群

琵琶湖疏水は、琵琶湖取水地点から伏見区堀詰町で一級河川濠川となる地点までの「第1疏水」、第1疏水取水地点の少し北側から全線トンネルで蹴上付近で第1疏水と合流する「第2疏水」、第2疏水取水口付近の立坑から全線トンネルで安朱で第2疏水に合流する「第2疏水連絡トンネル」及び蹴上付近から分岐して左京区北白川久保田町に至る「疏水分線」からなっている。

現在、琵琶湖疏水は水道原水のほか、発電、かんがい、防火及び工業などに利用されており、市民の生活になくてはならないものである。また、琵琶湖疏水の建設に伴い整備された、蹴上発電所や蹴上浄水場、インクライン等の関連施設は近代化産業遺産としての認定を受けるなど、京都の近代を代表する建造物として親しまれている。

そして、開削から120年余りが過ぎようとしている現在においても脈々と琵琶湖から京都市へ命の水を供給し続けている。その本来機能のみならず、岡崎では、優れた近代土木景観と緑豊かな水辺空間という観点からも、市民に親しまれている。例えば南禅寺境内には、当時としては画期的な洋風建造物の水路閣が設置され、今日では緑豊かな周囲の歴史的景観によく溶け込んでいる。また、哲学の道は西田幾多郎などの哲学者らが歩いた道として知られ、現在でも春の桜や秋の紅葉をはじめ、多くの人々が散策するなど、疏水沿線は散策の場として市民に親しまれている。

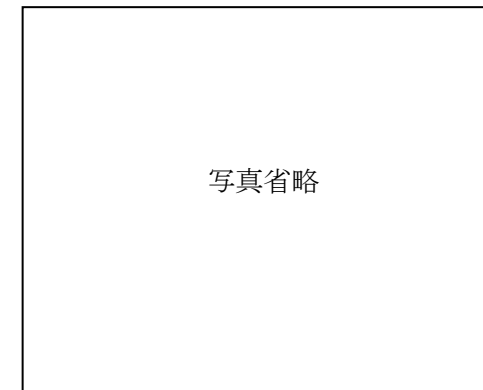


写真 2-95 哲学の道



写真 2-96 南禅寺水路閣

新 (P159)

旧 (P158)



写真 2-97-1 京都市美術館 庭園

写真 2-97-2 邸宅の町並み

写真 2-97-1 京都市美術館 庭園

写真 2-97-2 邸宅の町並み

無鄰庵は、山縣有朋が京都市から借地し明治29年(1896)ごろに建設したもので、七代目小川治兵衛による庭園を持つ、南禅寺邸宅群の先駆けとなった邸宅であり、現在、本市の施設として公開している。日出新聞には、明治28年(1895)8月8日の記事に苑池への疏水からの引水工事を京都市の水利事務所の技手が行う旨の記載があるほか、無鄰庵の建設についての記事が数々掲載されている。昭和8年(1933)に^{へんさん}編纂された「公爵山縣有朋公伝」には、無鄰庵での政財官の有力者との会見について記載があり、無鄰庵は政財官の有力者との会合の場としても利用されていたことが分かる。

界隈の邸宅群は、個人のためだけの施設としてのみ存在したわけではなく、その中で茶会や園遊会等を催すことを前提とした整備がなされ、実際にも国内外の招客のための迎賓的な役割を担っていた。大正大礼や昭和大礼が行われた際に、これらの邸宅群が京都を訪れた皇族等の要人たちの宿舎とされたことも、その役割の一つと言える。そして、これらの邸宅は所有形態こそ変わってきているが、現在でも迎賓的な施設としての役割を果たしている。

人をもてなすため、これらの施設では日々庭園等の手入れを行う。七代目小川治兵衛による庭園を持つ数多くの邸宅が群をなし、また南禅寺をはじめ、庭園を持つ寺社が多く存在する南禅寺界隈は、日本の庭園技術の粋が集まる場であると言えよう。手入れの行き届いた庭園が集積する地では、人々の庭を見る目が自然と養われ、造園技術が磨かれる。南禅寺界隈では、庭園の花や葉の色付きはもちろんのこと、春から初夏にかけての芽摘み、お盆前や暮れの手入れなど、その手入れからも四季を感じずにはいられない。

人をもてなすこと、そしてそのために、日々手入れを怠らないこと。南禅寺界隈を歩くと、人をもてなすため手入れの行き届いた邸宅群の有様に、凜とした中にも人をもてなす心を感じる。その悠然とした門構え、通りに続く塀や垣は、内側に特別な空間の存在を思わせる。そして、邸宅群などでのそれらの営

無鄰庵は、山縣有朋が京都市から借地し明治29年(1896)ごろに建設したもので、七代目小川治兵衛による庭園を持つ、南禅寺邸宅群の先駆けとなった邸宅であり、現在、本市の施設として公開している。日出新聞には、明治28年(1895)8月8日の記事に苑池への疏水からの引水工事を京都市の水利事務所の技手が行う旨の記載があるほか、無鄰庵の建設についての記事が数々掲載されている。昭和8年(1933)に編纂された「公爵山縣有朋公伝」には、無鄰庵での政財官の有力者との会見について記載があり、無鄰庵は政財官の有力者との会合の場としても利用されていたことが分かる。

界隈の邸宅群は、個人のためだけの施設としてのみ存在したわけではなく、その中で茶会や園遊会等を催すことを前提とした整備がなされ、実際にも国内外の招客のための迎賓的な役割を担っていた。大正大礼や昭和大礼が行われた際に、これらの邸宅群が京都を訪れた皇族等の要人たちの宿舎とされたことも、その役割の一つと言える。そして、これらの邸宅は所有形態こそ変わってきているが、現在でも迎賓的な施設としての役割を果たしている。

人をもてなすため、これらの施設では日々庭園等の手入れを行う。七代目小川治兵衛による庭園を持つ数多くの邸宅が群をなし、また南禅寺をはじめ、庭園を持つ寺社が多く存在する南禅寺界隈は、日本の庭園技術の粋が集まる場であると言えよう。手入れの行き届いた庭園が集積する地では、人々の庭を見る目が自然と養われ、造園技術が磨かれる。南禅寺界隈では、庭園の花や葉の色付きはもちろんのこと、春から初夏にかけての芽摘み、お盆前や暮れの手入れなど、その手入れからも四季を感じずにはいられない。

人をもてなすこと、そしてそのために、日々手入れを怠らないこと。南禅寺界隈を歩くと、人をもてなすため手入れの行き届いた邸宅群の有様に、凜とした中にも人をもてなす心を感じる。その悠然とした門構え、通りに続く塀や垣は、内側に特別な空間の存在を思わせる。そして、邸宅群などでのそれらの営

新 (P164)

他にも、前川國男が設計し、昭和35年(1960)に開館したモダニズム建築・京都会館は50年を超える歴史を持ち、多くの音楽や演劇、芸能を市民が身近に楽しめる場として、そして市民の文化的欲求を満たす文化創生の拠点として、長く愛されている。労演で親しまれる京都労働者演劇鑑賞会などは開館当初から続くもので、会館とともに歴史を刻んできた。また、明治36年(1903)に全国で2番目に開園した動物園は、市民の寄付金と市債により建設された動物園として最も古い歴史を持っており、現在でも幅広い世代の市民に愛されている。



写真 2-102-1 京都会館



写真 2-102-2 京都市動物園

その北に位置する吉田界限では、明治22年(1889)に大阪から移転した第三高等学校を皮切りに、京都帝国大学等の高等教育施設群が次々と設置された。現在でも、京都大学本部構内正門(旧第三高等学校正門)(国登録有形文化財)や、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター(国登録有形文化財)等の近代建築が教育施設として存在しており、岡崎とともに白河(岡崎・吉田)一帯が文教地区としての様相を呈している。



写真 2-102-3 京都大学本部
構内正門・時計台 提供：京都大学

これらの施設を取り巻くまちでは、関連する生業を営む店舗によるまちが形成されている。平安神宮参道として整備された神宮道の沿道には、多くの画廊が存在し、様々な美術品が展示され、芸術のまちとしての雰囲気醸し出している。また、旧武徳殿の周辺には、武具店が点在しているほか、一帯に古書店等も存在し、文教施設を支える営みが続けられている。また、今出川通に面した知恩寺では、毎年秋に古本市が開催され、平成25年で37回を数える。そこに並べられている古書は、一般の書籍とともに、学術書や美術書等も並べられており、地区の特色が表れている。

さらに、周辺には神楽岡の住宅開発(谷川住宅群等)や北白川の住宅開発等

旧 (P163)

他にも、前川國男が設計し、昭和35年(1960)に開館したモダニズム建築・京都会館は50年を超える歴史を持ち、多くの音楽や演劇、芸能を市民が身近に楽しめる場として、そして市民の文化的欲求を満たす文化創生の拠点として、長く愛されている。労演で親しまれる京都労働者演劇鑑賞会などは開館当初から続くもので、会館とともに歴史を刻んできた。また、明治36年(1903)に全国で2番目に開園した動物園は、市民の寄付金と市債により建設された動物園として最も古い歴史を持っており、現在でも幅広い世代の市民に愛されている。



写真 2-102-1 京都会館



写真 2-102-2 京都市動物園

その北に位置する吉田界限では、明治22年(1889)に大阪から移転した第三高等学校を皮切りに、京都帝国大学等の高等教育施設群が次々と設置された。現在でも、京都大学本部構内正門(旧第三高等学校正門)(国登録有形文化財)や、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター(国登録有形文化財)等の近代建築が教育施設として存在しており、岡崎とともに白河(岡崎・吉田)一帯が文教地区としての様相を呈している。



写真 2-102-3 京都大学本部
構内正門・時計台 提供：京都大学

これらの施設を取り巻くまちでは、関連する生業を営む店舗によるまちが形成されている。平安神宮参道として整備された神宮道の沿道には、多くの画廊が存在し、様々な美術品が展示され、芸術のまちとしての雰囲気醸し出している。また、旧武徳殿の周辺には、武具店が点在しているほか、一帯に古書店等も存在し、文教施設を支える営みが続けられている。また、今出川通に面した知恩寺では、毎年秋に古本市が開催され、平成22年で34回を数える。そこに並べられている古書は、一般の書籍とともに、学術書や美術書等も並べられており、地区の特色が表れている。

さらに、周辺には神楽岡の住宅開発(谷川住宅群等)や北白川の住宅開発等

新 (P170)

旧 (P169)

—京郊の歴史的風致—

(1) 舟運を支えた地域

この項では、豊臣秀吉により城下町が形成され、その後舟運により発展を遂げた酒造でも知られる伏見とその周辺の地域についての歴史的風致を示していく。

ア 伏見とその周辺の歴史

(7) 豊臣秀吉、徳川幕府による城下町の建設

京都市の南東部に位置する伏見地域は、万葉集にも詠まれるなど、古い歴史を有する地域である。既に平安時代から淀川の舟運と陸路で京都と大阪を結ぶ物流の中継地としての役割を果たしてきた。

この伏見のまちが大きく変わったのが、豊臣秀吉による伏見城の築城と城下町の建設である。伏見の城下町の建設は、豊臣秀吉が伏見城を築いた文禄3年（1594）から始まる。城下町の建設に当たり、秀吉は伏見に水陸交通の機能を集中させるため、周辺の地形を大きく変える大土木工事に着手した。文禄3年、秀吉は直接巨椋池に流れ込んでいた宇治川を槇島堤によって分離北上させ、伏見城下に引き入れた。また、三栖から淀に至るいわゆる太閤堤^{たいこうづつみ}を築造し、宇治川を西流させて淀川へと直結させた。

文禄5年（1596）の大地震により伏見城も城下も壊滅したため、改めて城下町が再建され、城下は、東西4km南北6kmの広大な地域に及び、碁盤目状に整然と区画された。「四つ辻の四つ当たり」と呼ばれている東本願寺伏見別院前の道路のほかは、城下町特有の遠見遮断や袋小路が見当たらず、またその区画のほとんどが全国六十余州の大名たちの屋敷で占められていた。町人地は街道沿いや濠川（外堀）の西側に配され、とくに大和街道沿いにあたる京町通りは往来する人々で賑わっていた。現在の伏見の市街地は、この城下町の都市構造が基盤となっている。

この伏見城が廃城になり、それにかわって徳川幕府により新たに淀城が築城され、城下町が建設された。淀は、宇治川・桂川・木津川の3川が合流する付近に位置し、早くから軍事上、交通上の要衝として知られたところで、10万石余を擁する淀藩の城下町として賑わった。しかし、淀城は、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦の際



写真 2-109 淀城跡の石垣

に炎上し、天守台と本丸の西・南側の石垣、内堀の一部等が残るのみである。現在は、淀城跡公園として整備され、市民の憩いの場となっている。また公園の北側は明治時代に水垂より移された^{よど}与杼神社（拝殿：重要文化財）の境内になって

—京郊の歴史的風致—

(1) 舟運を支えた地域

この項では、豊臣秀吉により城下町が形成され、その後舟運により発展を遂げた酒造でも知られる伏見とその周辺の地域についての歴史的風致を示していく。

ア 伏見とその周辺の歴史

(7) 豊臣秀吉、徳川幕府による城下町の建設

京都市の南東部に位置する伏見地域は、万葉集にも詠まれるなど、古い歴史を有する地域である。既に平安時代から淀川の舟運と陸路で京都と大阪を結ぶ物流の中継地としての役割を果たしてきた。

この伏見のまちが大きく変わったのが、豊臣秀吉による伏見城の築城と城下町の建設である。伏見の城下町の建設は、豊臣秀吉が伏見城を築いた文禄3年（1594）から始まる。城下町の建設に当たり、秀吉は伏見に水陸交通の機能を集中させるため、周辺の地形を大きく変える大土木工事に着手した。文禄3年、秀吉は直接巨椋池に流れ込んでいた宇治川を槇島堤によって分離北上させ、伏見城下に引き入れた。また、三栖から淀に至るいわゆる太閤堤^{たいこうづつみ}を築造し、宇治川を西流させて淀川へと直結させた。

文禄5年（1596）の大地震により伏見城も城下も壊滅したため、改めて城下町が再建され、城下は、東西4km南北6kmの広大な地域に及び、碁盤目状に整然と区画された。「四つ辻の四つ当たり」と呼ばれている東本願寺伏見別院前の道路のほかは、城下町特有の遠見遮断や袋小路が見当たらず、またその区画のほとんどが全国六十余州の大名たちの屋敷で占められていた。町人地は街道沿いや濠川（外堀）の西側に配され、とくに大和街道沿いにあたる京町通りは往来する人々で賑わっていた。現在の伏見の市街地は、この城下町の都市構造が基盤となっている。

この伏見城が廃城になり、それにかわって徳川幕府により新たに淀城が築城され、城下町が建設された。淀は、宇治川・桂川・木津川の3川が合流する付近に位置し、早くから軍事上、交通上の要衝として知られたところで、10万石余を擁する淀藩の城下町として賑わった。しかし、淀城は、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦の際



写真 2-109 淀城跡の石垣

に炎上し、天守台と本丸の西・南側の石垣、内堀の一部等が残るのみである。現在は、淀城跡公園として整備され、市民の憩いの場となっている。また公園の北側は明治時代に水垂より移された^{よど}与杼神社（拝殿：重要文化財）の境内になって

新 (P171)

おり、淀城跡と^{あいまって}相俟って歴史的な雰囲気醸し出している。

(イ) 高瀬川の開削による港町としての発展

江戸時代に入ると、京都の豪商・角倉了以が、慶長19年(1614)に高瀬川を開削した。これより高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり、舟運による物流の拠点機能が高まり、港町として、そして水陸の交通の要衝にある宿場町としてさらに繁栄することとなった。この当時、淀川を伏見から大阪まで往来していたのが十石船や三十石船で、それらが舟運の中心的役割を果たしていた。

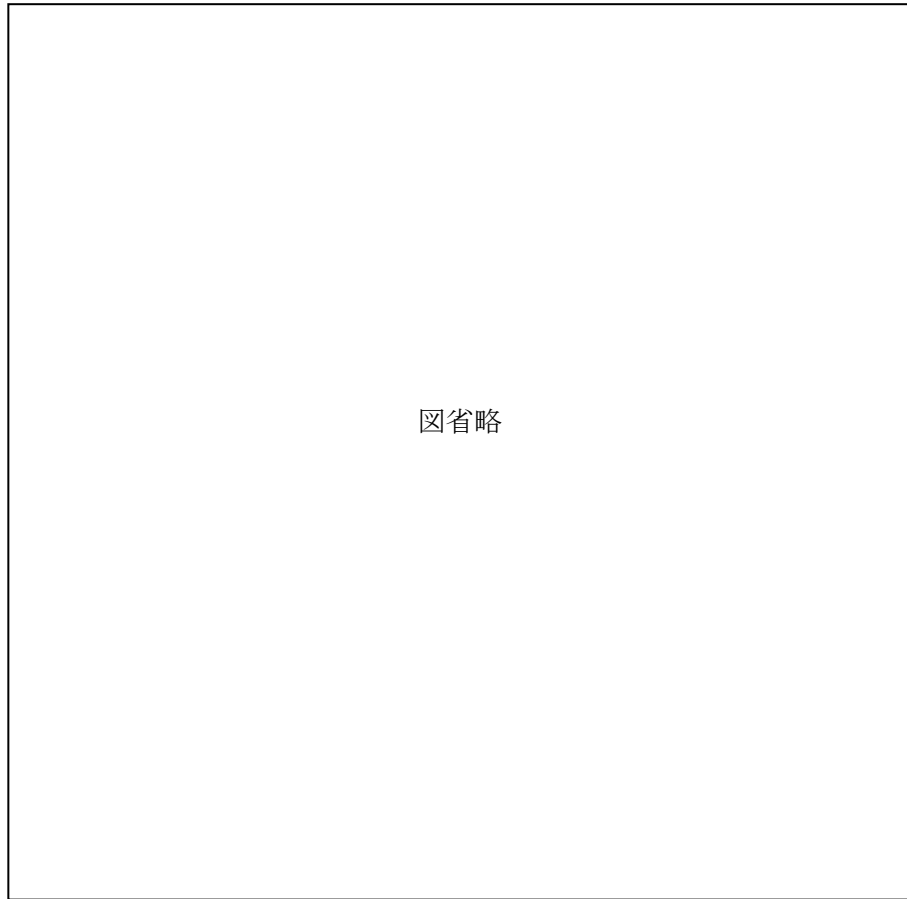


図 2-64 伏見と淀

イ 伏見のまちと酒どころ

かつて伏見は「伏水」と表され、良質な地下水が豊富なところとして知られていた。現在も近郊の祭礼行事の中心社として広く信仰を集めている御香宮神社は、平安期、境内から病気に効く香水がわき出たため清和天皇からこの名を賜ったといわれている。文禄3年(1594)から始まる秀吉による城下町の建設以降、この良質で豊富な地下水、そして舟運などの物流機能、城下町・宿場町としての発展による酒の需要の高まりなどを背景に、伏見の酒造は盛んになり、江戸初期から本格化

旧 (P170)

おり、淀城跡と相俟って歴史的な雰囲気醸し出している。

(イ) 高瀬川の開削による港町としての発展

江戸時代に入ると、京都の豪商・角倉了以が、慶長19年(1614)に高瀬川を開削した。これより高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり、舟運による物流の拠点機能が高まり、港町として、そして水陸の交通の要衝にある宿場町としてさらに繁栄することとなった。この当時、淀川を伏見から大阪まで往来していたのが十石船や三十石船で、それらが舟運の中心的役割を果たしていた。

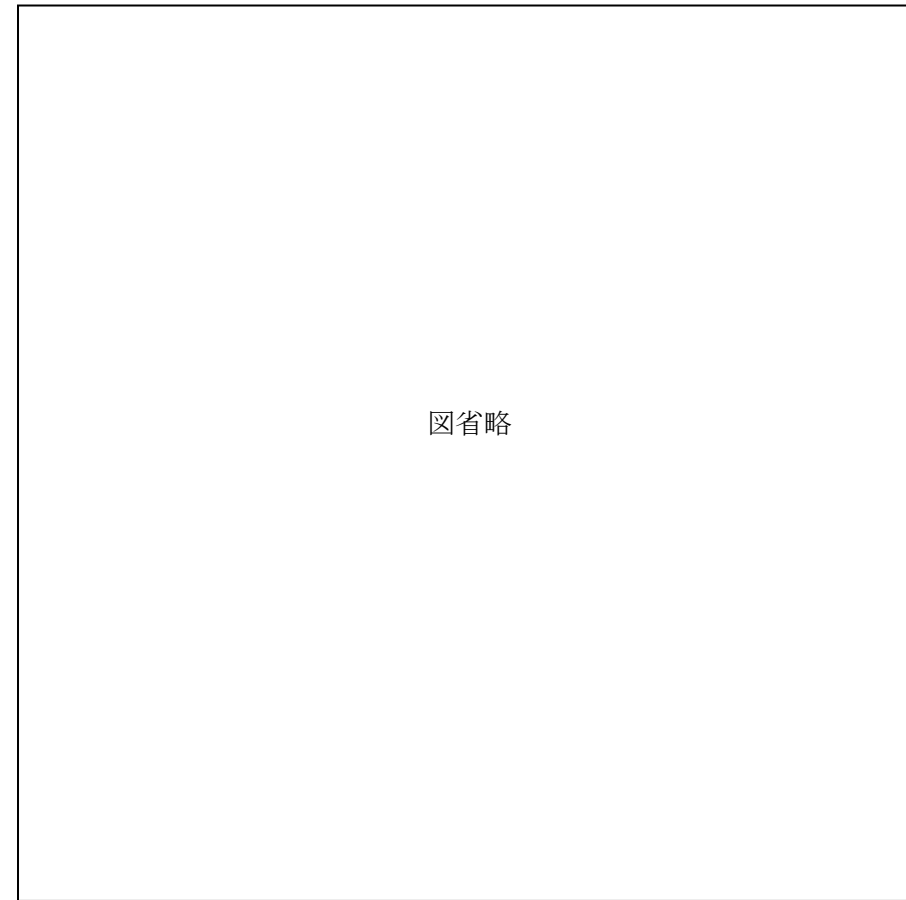


図 2-64 伏見と淀

イ 伏見のまちと酒どころ

かつて伏見は「伏水」と表され、良質な地下水が豊富なところとして知られていた。現在も近郊の祭礼行事の中心社として広く信仰を集めている御香宮神社は、平安期、境内から病気に効く香水がわき出たため清和天皇からこの名を賜ったといわれている。文禄3年(1594)から始まる秀吉による城下町の建設以降、この良質で豊富な地下水、そして舟運などの物流機能、城下町・宿場町としての発展による酒の需要の高まりなどを背景に、伏見の酒造は盛んになり、江戸初期から本格化

新 (P173)

喰壁、焼板壁及び瓦屋根などが独自の風情を醸し出し、酒どころとして近代から今日まで生き続けている伏見の人々の気概をうかがわせている。これらの酒蔵は、鳥羽伏見の戦いで酒蔵のほとんどが被災したため、明治以降、地下水をより有効に活用するため最良の地下水が湧き出る現在の地に構えられたものである。

写真省略

写真省略

写真 2-110 酒蔵の町並み

写真 2-111 十石舟

ウ 伏見やその周辺の祭礼行事

御香宮神社は、伏見の^{うぶすなかみ}産土神とされる。その由緒は、式社内の^{みもろ}御諸神社であるとも、九州の香椎宮であるとも言われるが、貞観4年（862）に境内から香水が湧き出たことから、御香宮と称したとされる。

文禄年間（1592～1596）に豊臣秀吉が、伏見城の鬼門の守護として大亀谷に遷座したが、徳川家康が慶長10年（1605）にもとの場所に戻した。境内には、本殿、表門（重要文化財）など、桃山文化を象徴する建造物が点在している。

看聞日記では応永23年（1416）以降、9月1日に御香宮祭礼が行われていたという記事が散見される。現在は神幸祭もしくは伏見祭と呼ばれ、毎年10月上旬に数日にわたっておこなわれる伏見随一の祭である。

祭の初日と最終日の前日の2回、各町内から花傘が御香宮神社に集まる（花傘総参宮）。かつて、村ごとに競って趣向を凝らしたという花傘は、今も町内ごとに工夫をして作っている。また、最終日には、3基の神輿のほか、獅子、猿田彦命、稚児行列、武者行列が、趣向をこらした大小の花傘が氏子各町から「アラウンヨイヨイ…」のかけ声で参加し、夜遅くまで賑わう。

また、現在の能楽堂は明治時代のものであるが、年1回御香宮神能が行われている。

このほか、淀や納所などの^{うぶすなかみ}産土神として鎮座している与杼神社で毎年秋に行われる「淀祭」では、旧神社跡に向けて3基の神輿が担がれたのが始まりとされる神輿渡御が行われる。

エ 舟運を支えた地域における歴史的風致

このように、伏見・淀においては、城下町の都市構造を骨格として、川という京都の自然を生かした水運、名水を活かした酒造などの伝統的な人々の活動や神社な

旧 (P172)

喰壁、焼板壁及び瓦屋根などが独自の風情を醸し出し、酒どころとして近代から今日まで生き続けている伏見の人々の気概をうかがわせている。これらの酒蔵は、鳥羽伏見の戦いで酒蔵のほとんどが被災したため、明治以降、地下水をより有効に活用するため最良の地下水が湧き出る現在の地に構えられたものである。

写真省略

写真省略

写真 2-110 酒蔵の町並み

写真 2-111 十石舟

ウ 伏見やその周辺の祭礼行事

御香宮神社は、伏見の^{うぶすなかみ}産土神とされる。その由緒は、式社内の^{みもろ}御諸神社であるとも、九州の香椎宮であるとも言われるが、貞観4年（862）に境内から香水が湧き出たことから、御香宮と称したとされる。

文禄年間（1592～1596）に豊臣秀吉が、伏見城の鬼門の守護として大亀谷に遷座したが、徳川家康が慶長10年（1605）にもとの場所に戻した。境内には、本殿、表門（重要文化財）など、桃山文化を象徴する建造物が点在している。

看聞日記では応永23年（1416）以降、9月1日に御香宮祭礼が行われていたという記事が散見される。現在は神幸祭もしくは伏見祭と呼ばれ、毎年10月上旬に数日にわたっておこなわれる伏見随一の祭である。

祭の初日と最終日の前日の2回、各町内から花傘が御香宮神社に集まる（花傘総参宮）。かつて、村ごとに競って趣向を凝らしたという花傘は、今も町内ごとに工夫をして作っている。また、最終日には、3基の神輿のほか、獅子、猿田彦命、稚児行列、武者行列が、趣向をこらした大小の花傘が氏子各町から「アラウンヨイヨイ…」のかけ声で参加し、夜遅くまで賑わう。

また、現在の能楽堂は明治時代のものであるが、年1回御香宮神能が行われている。

このほか、淀や納所などの^{うぶすなかみ}産土神として鎮座している与杼神社で毎年秋に行われる「淀祭」では、旧神社跡に向けて3基の神輿が担がれたのが始まりとされる神輿渡御が行われる。

エ 舟運を支えた地域における歴史的風致

このように、伏見・淀においては、城下町の都市構造を骨格として、川という京都の自然を生かした水運、名水を活かした酒造などの伝統的な人々の活動や神社な

新 (P174)	旧 (P173)
<p>どで行われる祭礼行事が現在もなお受け継がれ、酒蔵など歴史的な建造物を中心とした町家群等が建ち並ぶ変化に富んだ歴史的町並みと一体となった風景が今もまさに伝統が息づいていることを感じる。</p> <p>(2) 景勝地としての洛外</p> <p>京都の三山の麓の地は風光明媚な景勝地として古来より多くの人々が訪れた。平安遷都以来これらの地には、自然豊かな風景を楽しむため、貴族の別荘や隠棲の居、門跡寺院などの寺社が営まれた。またその風景は和歌や物語などの文学や絵画などの中に描かれた。このような地は、次第に名所として意識されるようになり、室町時代には庶民がこれらの景勝地へ訪れるようになった。</p> <p>江戸時代になると、絵で見て楽しむ「都名所図会」などの発刊も手伝い、名所旧跡詣でが盛んになった。洛外と呼ばれたこれらの地域は、三山の麓の美しい自然の中に、寺社、庭園、史跡、あるいは和歌や物語などの文学の舞台のある場所として知られ、地方から多くの人々が京都を訪れた。そして、京都の人々は、京都の案内記や、京都へ来訪した人々の中で定着した京都を通してこれらの地を再認識し、来訪者を迎える営みを続けてきた。</p> <p>この項では、嵯峨野を具体事例として、京都の洛外の景勝地に形成されている歴史的風致を示していく。</p> <p>ア 具体事例：嵯峨野への景勝地詣で</p> <p>嵯峨野は、古来より景勝の地として知られてきた。嵯峨という地名が現れるのは、平安京が営まれて間もなくのことで、平安京の原型とした唐の長安の近郊にある景勝地「嵯峨山」（峨媚山）から得たのが地名の由来と言われている。この地域は、船岡山や神楽岡と並んで聖なる丘の一つとされた双ヶ丘、愛宕山や小倉山などの山々、豊かな清流を湛える大堰川、一陣の風にさやさやと音を立てる竹林など、美しい自然に恵まれた地域である。</p> <p>平安時代の嵯峨野は、貴族たちの狩猟の場だけではなく、美しい自然を愛で、そして親しむ別業地（<u>別荘地</u>）でもあった。</p> <p><small>さいおんじきんつね</small> 西園寺公経の別業地を足利義満が譲り受け、その没後に開山された金閣寺（鹿苑寺）、大徳寺実能が別業とした地に創建された竜安寺、光孝天皇の発願によって建立され宇多天皇が居を営んだ仁和寺、花園法王が別荘を喜捨して寺院とし、その後文明年間に中興された臨済宗大本山の妙心寺、嵯峨天皇が営んだ嵯峨院が元になった大覚寺、後嵯峨上皇が営んだ仙洞嵯峨御所に足利尊氏が創建した天龍寺など、嵯峨野をはじめとする洛西に点在する寺院の多くは、もとを辿ると皇族や貴族などの別業地を前身としている。</p> <p>これらの寺社や庭園をはじめ、嵯峨野に広がる田園風景や農家、街道筋に立ち並ぶ民家などと美しい自然とが融合し、洛中とは一味違う洛外の伸びやかで美しい景</p>	<p>どで行われる祭礼行事が現在もなお受け継がれ、酒蔵など歴史的な建造物を中心とした町家群等が建ち並ぶ変化に富んだ歴史的町並みと一体となった風景が今もまさに伝統が息づいていることを感じる。</p> <p>(2) 景勝地としての洛外</p> <p>京都の三山の麓の地は風光明媚な景勝地として古来より多くの人々が訪れた。平安遷都以来これらの地には、自然豊かな風景を楽しむため、貴族の別荘や隠棲の居、門跡寺院などの寺社が営まれた。またその風景は和歌や物語などの文学や絵画などの中に描かれた。このような地は、次第に名所として意識されるようになり、室町時代には庶民がこれらの景勝地へ訪れるようになった。</p> <p>江戸時代になると、絵で見て楽しむ「都名所図会」などの発刊も手伝い、名所旧跡詣でが盛んになった。洛外と呼ばれたこれらの地域は、三山の麓の美しい自然の中に、寺社、庭園、史跡、あるいは和歌や物語などの文学の舞台のある場所として知られ、地方から多くの人々が京都を訪れた。そして、京都の人々は、京都の案内記や、京都へ来訪した人々の中で定着した京都を通してこれらの地を再認識し、来訪者を迎える営みを続けてきた。</p> <p>この項では、嵯峨野を具体事例として、京都の洛外の景勝地に形成されている歴史的風致を示していく。</p> <p>ア 具体事例：嵯峨野への景勝地詣で</p> <p>嵯峨野は、古来より景勝の地として知られてきた。嵯峨という地名が現れるのは、平安京が営まれて間もなくのことで、平安京の原型とした唐の長安の近郊にある景勝地「嵯峨山」（峨媚山）から得たのが地名の由来と言われている。この地域は、船岡山や神楽岡と並んで聖なる丘の一つとされた双ヶ丘、愛宕山や小倉山などの山々、豊かな清流を湛える大堰川、一陣の風にさやさやと音を立てる竹林など、美しい自然に恵まれた地域である。</p> <p>平安時代の嵯峨野は、貴族たちの狩猟の場だけではなく、美しい自然を愛で、そして親しむ別業地でもあった。</p> <p>西園寺公経の別業地を足利義満が譲り受け、その没後に開山された金閣寺（鹿苑寺）、大徳寺実能が別業とした地に創建された竜安寺、光孝天皇の発願によって建立され宇多天皇が居を営んだ仁和寺、花園法王が別荘を喜捨して寺院とし、その後文明年間に中興された臨済宗大本山の妙心寺、嵯峨天皇が営んだ嵯峨院が元になった大覚寺、後嵯峨上皇が営んだ仙洞嵯峨御所に足利尊氏が創建した天龍寺など、嵯峨野をはじめとする洛西に点在する寺院の多くは、もとを辿ると皇族や貴族などの別業地を前身としている。</p> <p>これらの寺社や庭園をはじめ、嵯峨野に広がる田園風景や農家、街道筋に立ち並ぶ民家などと美しい自然とが融合し、洛中とは一味違う洛外の伸びやかで美しい景</p>